

俺の千冬姉がこんなに
可愛いはずが……あつ
た

pluet

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

千冬姉が露骨にブラコンだつたら？ そんな電波を受信した結果がコレ。 所謂性格
改変モノです。

なので、主人公は一夏（憑依、転生なし）。一応、一夏ラヴァーズの方々もヒロイン。
ただしサブ。

この作品はにじファンにて掲載していたものの、再投稿となります。

第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
									目次
193	164	139	121	99	78	48	30	10	1

第1話

IS＜インフィニット・ストラトス＞というものがある。

簡単に言えば、パワード・ステッツ。

それを一度纏えば、現行兵器を軒並みなぎ払えるほどの能力を持ち、ほぼ生身に近いのに音速に近い速度での飛行も可能となる代物だ。

開発者曰く、本来は宇宙空間での活動を目的に開発されたものらしいんだが、そのデビューやそれはもう無茶苦茶やらかしてしまった所為でそちらの方面での研究開発はほとんど進んでおらず、専ら軍用及び、レース等のスポーツ用などで使用されるようになった。

特に軍事面に関しては、このISの登場で世界中に大混乱をもたらしたんだが、当の開発者である某ウサギさんは、あはは、と腹を抱えて笑っていた。いつかめる。

また、このISは女性にしか使用できないという謎機構を備えてる所為で世界に女尊男卑の風潮が生まれてしまう始末。

世界中の軍でも部隊解体や人員削減などが行われ、主に男性が失業の憂き目に会つたりした。

女性専用なんて兵器としては欠陥品もいいところだと思うんだが、どうしてこうなつたんだか。

まあ、その女性にしか試用できないってのは、最近否定されたんだけどな……他でもない、俺、織斑おりもん一夏らいちかの存在によつて。

遡ること2ヶ月ほど前のこと。

当時中学3年だった俺は、他の学生と変わらず受験戦争の真っ只中だつた。

前述の通り、ただでさえ、男性不利の風潮がある所為で就職率が軒並み低下し、就職氷河期が到来してゐる昨今【※ただし男に限る】俺たち男は進学は結構死活問題だつたりする。

ま、そういうこともあつて俺は女手一つで家計を支えてくれてる姉のために、学費が安く、就職のためのキャリア教育が充実してゐる藍越《あいえつ》学園への入学を志望し、試験会場にやつてきていた。

んで、ものの見事に迷子になつてしまつて、片つ端から会場と思しき部屋を空けていつたらIS学園の試験会場に入つてしまい、どういうわけかISを起動させてしまつて今に至る、と。

うむ、藍越学園とIS学園。

Tが抜けるだけでこうも違うとは、世の中分からいものだよなあ。
あははは……ハア。溜息しかでねえよ。

まあ、そこからは満足に状況を把握する余裕すら許されず、いろんな研究機関や病院をたらい回しにされた上で、原因不明の烙印お捺されて世界各国のIS操縦者等を育成する唯一の特殊教育機関である此処に放り込まれたわけだ。

おかげでまともに家にも帰られず、帰つても四六時中黒服の明らかに堅気じやない人たちに囲まれる始末。

姉に陳情したら、ものの数分で撃退されたのが幸いだ。

とはいって、警護は必要だからと監視は続けられた。

プライバシーの保護はどうしたんだ、人権国家。

「……アレだな、きっとISとの相性が悪いんだろうな、俺。 いつぞやも誘拐とかされちまうし……千冬姉に苦労ばつかりかけるし」

こんな風にぼやいてしまうのも何回目だっけか。

とはいって、ぼやいたところで状況が好転するはずもなく、結局千冬姉に迷惑をかけてしまうわけで。

ハア、苦労をかけないように学校を選んだはずが逆に苦労かけてりや世話がない。

世界でただ一人の男性IS操縦者なんてものになつてしまつたんだから、その苦労は

推して知るべしといったところか。

きっと、俺の知らないところでずつと頑張ってくれてるんだろう。
まつたく、頭が上がらないよなあ。

「あ、あのう……織斑君？」 織斑一夏くーん？ 聞こえてますか……？」
いやまあ、今も昔も上がった試しなんて一度たりともないんだけど。
織斑家では女尊男卑の風潮が I.S.発明以前から吹き荒れております。

くだらない事に脳の容量を使つてる俺は、不意に名前を呼ばれて顔を上げる。
目の前には、副担任の山田真耶先生が若干涙目になつていた。

……相当無視してたらしい。そして、周りからの視線も痛い。

現実逃避なんてしてみても、やっぱりこの状況から逃げることは出来ないらしい。
いや、だつて考えてもみてくれ。I.S.は女性にしか動かせない、男の操縦者は俺だけ。
つまり、この I.S.学園は女子高。教員にすら男性がほぼいないんだぜ？

……居た堪れないことこの上ないと思わないか。

友人である五反田弾なら『それなんてエロゲだよおお!!』といつて叫び出すレベル。
実際、血涙流しながら俺に殴りかかってきたんで、返り討ちにしてやつたけど。
というか、俺だつて代わられるなら代わつてやりたい。

だけど、この能力が簡単に委譲できるんなら今ここにはいないんだよなあ。

さて、いい加減山田先生もマジ泣きになりつつあるし、窓側からの幼馴染の視線も痛いから自己紹介を済ませる事にしよう。

「あ、はい、自己紹介ですね。織斑一夏です。何故か唯一の男性IS操縦者になってここに入学する事になりました。よろしくお願ひします」

無難な自己紹介で済ます。

ただでさえ、今までと違う環境だしな。ここで外して孤立なんて憂き目に会うわけにはいかないのである。

一礼してから、席に着こうとしたそのときだつた。

「ちなみに私の弟だ。故に色目、ハニートラップなんぞ仕掛けてみろ。二度と朝日が捕めると思うな。コイツは私のモノだ」

『はい?』

何故かとても聞き覚えのある声で、とんでもないセリフが発せられた。
クラスのみんなに疑問符が急浮上する。無論、俺にも浮かんでいる。

……なんで、千冬姉がいるんだよ?

教室のドアから颯爽と現れた千冬姉こと、おりむらちふゆ織斑千冬。俺の姉である。

世界で始めてISを操縦し、飛来する2000発以上のミサイルと世界各国の戦闘

機及び軍艦をを刀一本でばつたばつたと切り伏せた世界最強。文武両道、容姿端麗。まさにミスパーフェクト、と言いたいところだが、その実、家事全般が苦手という意外にだらしない面も……

——スパンツ！

「つたあ!?」

などと、千冬姉の特徴を頭の中で論あげつらつていたら、出席簿が直撃した……！

「失礼な事を考えるからだ、馬鹿者め。だいたい、お前がいれば問題なかろうが」

いつからウチの姉は読心術なんぞ覚えたんだろうか。

それとも、俺が分かりやすいだけなのか。

というか、俺がいれば問題ないって、ずっと千冬姉の面倒見なきやならないのかよ。辞書には自立という言葉があつてだな。

などと思いがけないところであつた姉との心温まる？ やり取りをしていると、逸早くフリーズから立ち直ったファースト幼馴染こと篠ノ之_{しのの}一_{はうき}等が吠えた。

「な、ななな、何を言つているんですかッ！ 千冬さん！」

「篠ノ之。ここは学校だ、織斑先生と呼べ」

再び教室に乾いた音が響いて、同時に机に崩れ落ちる等。

おおう、何か俺のときより威力が増してゐる気がするなあ。南無。

「グ、ぬ、お、織斑先生！ それよりも先ほどの発言について説明を求めますツ！」

「あ、あのう、私も聞きたいたいなあ……なんて」

だが、一度の注意にめげることなく、篝は再度説明を求めた。

んで、何故か山田先生も追随した。

まあ、確かに俺としても実の弟をモノ扱いされた件について問い合わせたくはあるんだけどな。

クラスのみんなも同じことを思つてゐるのか、事の推移を見守つてゐる。

「ん？ 何だ理解できなかつたのか？ そこにいる、織斑一夏は、私のだ」

『……』

おいおい、みんな黙つちまつたじやないかよ。

いや、山田先生だけは頬に手を当ててイヤンイヤンつてしてゐるけど。

何を想像してゐるんですか、先生。

というか、千冬姉、答えになつてないぞ。俺が千冬姉の『弟』だつて事はさつき言つたんだから今更だろうに。

ほら、みんなも戸惑つてるぞ？

「では、自己紹介を続ける」

そんなクラスの様子を一切合財気にすることはなく、千冬姉は自己紹介を再開させ

る。

まさに唯我独尊だなあ、おい。

まあ、通常運転だけどな。

そんな変わらない千冬姉の様子にため息を吐きつつも、かなり憂鬱だったこの学園生活も少し楽しみに思えてきた俺はシスコンなのだろうか。

なんて頭を悩ませていると、隣の席の女の子が声をかけてきた。

「織斑君つて愛されてるねー」

「そうか？」

「ふふ、そうだよ。……姉弟同士、愛し愛され……そして禁断の領域へ——

うん、今年の夏はこれね。たば×ちふ本からシエアを根こそぎ奪い取るのも夢じやないかも……」

後半の方はよく聞き取れなかつたけど、そんな事を言つてから前を向いてしまつた。

なんだつたんだ……？

周りからもよく言われるが、そんなに俺は千冬姉に大切にされてるんだろうか。どちらかつて言うと、振り回される感が強いんだが。

でもまあ、それが本当なら家族冥利に尽きる。

俺にとつても千冬姉は大切な家族だしな。

何はともあれ。

隠して、クラス中から（何故か）生暖かい視線を感じつつも、俺のI.S学園での高校生活はスタートするのであつた。

第2話

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、教壇に立つ山田先生はモニターを消した。
 「はいっ、これで午前中の授業は終わりです。皆さんお昼ご飯を食べてきてください
 ねー」

山田先生がそう言うや否や、がたがたと、教室中から席を立つ音が聞こえてくる。
 そんな喧騒の中、俺は深くため息を吐いた。

ようやく、この長く辛い時間が終わつた、と。

いや、まいつた。山田先生の授業の内容が何一つ分からないんだもんな。

日本語で説明されてるのに、まるで知らない言語で説明されてるみたいだつた。

やっぱ、入学前の参考書を古雑誌と一緒にまとめてゴミに出したのはマズかつた
 なあ。

具体的には俺の頭に千冬姉の一撃をお見舞いされる程度には。

死滅した二万個の俺の脳細胞に黙祷を捧げる。

一応 板書はノートに写したけど、単語から分からんんだから意味がない。
 なんだよ、
 P パツシフ・イナーシヤル・キヤンセラーハ
 I つて。

ええい、辞書はないのか辞書は。

「あるわけないだろ、馬鹿者」

「うん？ なんだ箒か」

「箒か、じゃない。何だあの体たらくは……。勉強はできる方だつたろうが」

「元を抑えながら、呆れ果てたと全身で表していた。

のつけから失敬な奴だな。

「いつの話だそりや。だいたいそう言う次元じゃないだろ、コレは……。お前等と違つて事前知識つてのが皆無なんだぞ、俺は」

「入学準備を怠つたお前が悪い」

「……はい」

何も

言い返せない

事実だもの

いちか

どつかの詩人みたいだな。

とは言うものの、実際に参考書があつたとしてもそれを読み込めるだけの時間が俺に

あつたのかといえば首を傾げざるを得ないわけで。

やらないよりはマシだつたんだろうけどな。

まあいい、俺は他の子よりもスタート地点が後ろだつただけだ。
ここから挽回すればいい。

亀でも兎に勝てるんだから、たゆまぬ努力こそが最大の近道なんだ！

「まあ、こここの生徒は兎みたいに怠ける奴はほとんど居ないだろうけどな」
身も蓋もない事を言う奴だ。

どうして俺の身内はこうセメントな奴ばっかりなのか。

「…………はあ、説教ならメシの後にしてくれよ。箒も一緒に行くだろ？」

「あ、ああ、別に構わない……」

「そつか。あ、でもその前に寄るところがあるから付き合つてくれよ」

「つ、付きッ!? こほんっ……いいぞ。それでどこ「ちよつとよろしくて?」……」

箒の声を遮つて後ろから聞こえた声に振り向くと、そこには“いかにも”と言つた感じのお嬢様お嬢様（？）した女の子が立つていた。

高貴オーラがこつちまで漂つてくる。

ていうか、金髪ロールお嬢様つて実在したのな。1つ前の次元の話かと思つてたぞ。

「ああ、別にいいけど何の用だ？ 俺達これからメシなんだけど」

「まあ!? 何ですのそのお返事は。この私に声をかけてもらえるだけでもその身に余る光栄なことでしょう。ならば相応の態度と言うものがあるのでなくって？」

「……」

「ご多分に漏れず……というか、テンプレ乙だな。

さつき列挙した特徴に高慢も追加しておこう。

というか、相応の態度つてなんだ。ご機嫌麗しゆうございますとでも言えばいいのか

？

どう考へてもめんどくさい手合いだ……うん、スルーしよう。

「あーあー、んんっ！ 失礼いたしました、貴方様にお声をかけていただけること、まことに光栄に思わないこともないでござりますことよ（棒）…………ふう、これでいいか

？」

「いいわけないでしよう！ バカにしてるんですの!?」

「おお、どうしよう箒、バレてしまつた」

「……それ以前に似合わなすぎて鳥肌が立つたぞ」

そう言つて箒は頭に手を当てやれやれと呆れてしまつっていた。

何故だ、俺の演技は完璧だつたじやないか。

「ちえ、次はもつと精進するか。じやあ、俺達はこれで」

「あ、はい。ご苦労様でした——つてえ？ お待ちなさい!!」

「おお、見たか箒、ノリツツコミだ。最近の外国人はお笑いに関しても造詣が深いらしい

ぞ

ジャパニーズOWARA-I だぜ。

海外にも普及するなんて、なんだか感慨深いものがあるな。

「いいからお黙りなさいッ！ 話が進まないじゃないですか!!」

「ああ、それはすまん。で、君は誰なんだ？」

「な、な、なんですって!? 貴方はイギリス代表候補生にして、入試主席であるこのセシリアル・オルコットを知らないと言うんですか!?」

いや、主席とか代表候補生とか知らないし。いつそんな発表があつたんだよ。
そもそも、日本の代表候補ならともかくイギリスの事まで把握しておけつてのは酷
じやないのか？

まあ、日本の代表候補生とやらも知らないんだけどな。

なんて、此処で口を滑らすとまた話が進みそうにないから黙つておく。

「……とりあえず何か凄そうな子だと言うのは分かつた。ちなみに何組なんだ？ 僕達
は一組なんだけど」

「お・な・じ・クラスですわッ!! いつたい、貴方はどこに目玉をお付けになつていやが
るのかしらッ?!」

一気にまくし立てた所為か、ゼーゼーと息を荒くしているセシリリア。

とりあえず、汚いのか丁寧なのか、よく分からん言葉遣いだな。

そんな事を思つていると、隣の篝が訊いてきた。

「一夏……お前、自己紹介を聞いてなかつたのか？」

「え、いや、あの時は千冬姉の登場で混乱しててさ。その後も授業とかのことでいっぱいだつたし……」

「……まあ、あれでは仕方がなかつたかもしけんが」

「だよな。正直クラスの人の名前なんてお前ぐらいしか分からぬぞ」

「……喜んでいいのか、そこは」

「くくくくッ!! こつちの話を聞きな「廊下で何を騒いでいるんだ、貴様等は」あうつ?！」

パシンッと、そろそろ聞いただけで、PTSDを発症しそうな音が廊下に響く。

ついでに黄色い悲鳴も響きわたる。

我らが千冬姉の登場だ。俺が行く前に用件の方がこちらに来てしまつた。

「はあ、お前が遅いからこちらから来る羽目になつた」

「あ、ごめん……はい、弁当。今朝、電話で言つてた千冬姉の分つてのはこういうことだつたんだな」

「ああ、今日は入学準備で山田先生に泣き付かれて帰れなかつたからな。あの天然駄肉メガネめ……」

仮にも同僚に向かつてヒドイ言い草だ。

弁当なんかで大げさだなあ……。

「別に学食があるんだからそこで食べれば……」「いつも家に帰れないんだから昼ぐらいはお前の料理が食べたい。……そう思うのはいけないか？」

ぐつ、その聞き方は卑怯だろう。

「……作り手冥利に尽きます」

「よろしい。それについても、篠ノ之はともかくオルコットもか……貴様等、今朝言つた事は忘れるなよ」

篠達に一睨みしてから、颯爽と去つて行く千冬姉。

なんというか、クラス皆の千冬姉への態度が微妙に納得できてしまふ。

我が姉ながら格好良過ぎだらう。

ま、何にせよ、これで寄り道する必要はなくなつたな。

「よし、俺の用は済んだし学食行こうぜ篠」

「え、あ、ああ……。だが、いいのか？　あれを放つておいて」

篠の視線の先には、さつきの千冬姉の一撃から未だにリカバリーできていないセシリ

アが頭を抱えたままブルブルと蹲つていた。

あ、ちょっと涙目になつてる。

あの痛みと衝撃は経験者にしか分からぬからな。

「ま、いいんじやないか？ しばらくじつとしてれば痛みは引くだろ。なあ、経験者？」

「お前ほどじやないがな」

なんて軽口を叩きながら、学食に向かう俺達。

そういえば、さつきのセシリアは結局何の用だつたんだろうか？



さて、時間は流れ、放課後になつたわけだが、昼休みにした決意に早くも挫けそくなつてる俺がいる。

やつぱり、意気込みだけじゃ乗り切れない局面もあるつてことだな。

いつの間にかクラス代表に仕立て上げられるし、セシリアと決闘する事になるし……。

まあ、売り言葉に買い言葉で喧嘩を買つてしまつた俺も俺なんだけど。

授業にすらついていけないのに、実践でどうにかなるのか？

俺、ＩＳをまだ数回しか起動させたことないんだけど。それも試験の時を除いて起動させただけってレベル。

試験にしても、操作になれる前に自爆されたせいでほとんど動かしてないし。まつたく、喧嘩を買う前の俺にもう少し冷静になれと言つてやりたい。

……結果は変わらない気もするが。

せめて知識だけでも何とかしようと思うんだけど、参考書の再発行はいつ頃になるのやら。

というか、普通何部か余分に作るもんじやないのか？ 経費削減とかか？

こうなつたら箒辺りにでも借りて勉強するかなあ……多少はマシかもしないし。などと、机に座つて頭を抱えていると山田先生に声をかけられた。

「あの、織斑君？」 ちよつといいかな？」

「あ、山田先生にちふ……織斑先生」

「……まあ、見逃してやろう」

「危ねえ。また叩かれるところだつた。

「それで、どうしたんです？」

「あのですね、織斑君のお部屋が決まったので、そのお知らせに来たんです」

「へ？ 部屋つて寮のですか？ 部屋は全部埋まつてゐるから1週間ぐらいは自宅通学になるつて聞いてたんですけど」

「そうなんですけど、事情が事情ですから……相部屋にしてでも必ず寮に入れると政府の方から特命が来ちゃいますて……」

なんて特命だ。

無理矢理つて……相部屋の子はどう考へても女の子じやないか。

男女七歳にして同衾せず、常識だろ。いつたい日本政府の倫理観はどうなつてやがる。

といつても、特命である以上は覆せないんだろうなあ……

俺、こんなんでも一応重要人物指定なんだろうし。警護の問題もあるつてことか。
身の丈に合わないことこの上ないな。

「……分かりました。でも、荷物の方はどうするんです？ さすがに男でも、この身一つでつて訳にもいかないんですけど」

「ああ、それなら——」

「私自ら用意してやつた。感謝しろよ」

「……へつ？ 今なんて？」

「私が、用意した」

じーざす……ツ!!

実の姉に部屋を物色されたと言うことですか!?

あ、いや、赤の他人にされても困るわけだが……

「安心しろ、お前の部屋の押入れの奥に隠してあつた鍵付きの箱は開けてない」

「か、鍵付きつて……つ!! だ、ダメですよ、織斑君ツ!! そんな、ふ、不潔です!!」

「ちよつ、違つ!? 押入れの中にそんなものは置いてねえ!!」

……押入れには。

「ああ、確かに押入れにはなかつた。なにせ机の引き出しの二重底から見つけたのだからな……」

「ち、千冬姉ツ!?」

「織斑先生だ」

ばこつと叩かれる。

千冬姉の所為じやんか！ 理不尽だ!!

さつきの千冬姉の発言のせいで、クラスに残つてた子達の視線とひそひそ話が全身に突き刺さる。

山田先生は顔を真つ赤にさせたまま「だ、ダメです……ツ……そんなの……!」とか咳いている。何を想像してるんですか!?

「まあ、それに付いては後で家族会議をするとして、荷物の方は当面の着替えと携帯の充電器ぐらいでよかつたな？」

洗面用具等の足りないものは購買で買うといい

「……了解です。それで、俺の部屋はどこなんですか？」

——ああ、
——それは——

千冬姉の言う事を聞き逃しまいと、クラスの子達も聞き耳を立てている。そして、聞いてしまう。

「私の部屋だ」

爆弾発言を。

—なつ！？

「なつ!?

『なんだつて――ツ!?

爆発したのはこちら側だつたけど。

で、千冬姉に連れられて部屋に到着してしまった。

どうやら千冬姉は寮長だつたらしく、職員寮ではなく学生寮の方に部屋があつた。
つまり――

「ねえ、織斑君つて千冬様の部屋に住む事になるのかしら。先生と生徒だけどいいのか
な」

「二人は姉弟なんだし別にいいんじゃない？」

「あーん、せつかく織斑君の部屋に押しかけようとか考えてたのにい。これじゃ無理
じやない？」

「行けば？ もれなく死ねるけど」

「……遠慮しまーす」

後ろの方で女の子がひそひそと……ツ!!

それなのに、ウチの姉上様ときたら
「どうした？ 入らないのか？」

「……」

我関せらずと完全に無視している。

その強靭な精神を見習いたい。無理だろうけど。

まあ、ここで立ち止まつたまま衆人の注目を浴び続けるのは勘弁願いたい。
さつきと部屋に入ろう。

「し、失礼しまーす」

「一夏、今日からお前の部屋でもあるんだ。そんなに仰々しくする必要はないぞ」

「いや、でも織斑先生……」

〔馬鹿者〕

ぱしつ と軽く頭をはたかれる。

はて？ 何も間違つてはないハズだけど？

制裁にしても威力は低かつたし。

「ここからはプライベートな時間だ。二人の時は……」

「！ ああ、そうだな。分かつたよ、千冬ね「お姉ちゃんと呼べ」って、はあツ!?」

「だから、二人の時は『お姉ちゃん』と呼べと言つている」

「お、おね、おねえちや……つて、言えるかあ！！ いだつ!?」

「姉に向かつてなんて言い草だ」

「殴ることないだろ!?」

「すまんな、照れ隠しだ。……ああ、そうだと、これは別にお前の夜のおかずの中に姉ジャンルがなかつた事に対する八当たりでは断じてない」

後半の方は聞こえなかつたけど、何が照れ隠しだよ。

いつも通りの不敵な笑みを湛えた顔なのに……

「まあ、姉弟のスキンシップはここまでにして置くか。さて、一夏？」

「な、なんだよ千冬姉……」

「今日の授業一切ついていけてなかつたな？」

「うぐっ!? はい、その通りです」

素直に認める。事実だし。

「どうしてお前はある一点を除いてそつなくこなすというのに、ここぞというときにミスをするんだ。大体お前はだな——」

「申し訳ございません……」

ちくちくと嫌味を言われ続ける。

うう、千冬姉だつて私生活はだらしないじやんか。

……この部屋だつて着てた物も脱ぎっぱなしで散らかし放題だし。

やつぱりここでも片付けるのつて俺がやらなきやいけないのか？

なんて失礼な事を考えていたら、千冬姉に睨まれた。叩かれる前にすぐに思考を放棄

する。

「また叩かれたら敵わないからな。

「まあ、何が言いたいかと言うとだ。お前に合わせてクラスの授業を遅らすわけにはいかない」

「そりやそうだ」

「だから、私が毎日個人授業をしてやる」

「えつ!? いいの『そんなのダメですツ!!!』って、筈!?」

「ほう、盗み聞きしてるとは思っていたが、まさか、突入してくるとはな。少々見誤つていたようだな、篠ノ之筈という女を」

いやいや、千冬姉はどうしてそんなに冷静なんだよ。

部屋のドアが叩き斬られたんだぞ? 不法侵入の上に器物破損じやん。

そして、筈は木刀を降ろせ、話はそれからだ。

「ISに関しては私が一夏に教えます! だいたい、教師が特定の生徒に蠶貝をしてはいけないでしよう!!」

「ふんつ、それがどうした。これは私の親友の言葉で、唯一賛同する言葉だが『有史以来、人は平等であつた事など一度もない』

つまりはそういうことだ。だいたい、今は私達家族のプライベートな時間だ。生徒だ

の教師だの関係ない」

ぐいっと、千冬姉に抱き寄せられる。ちよつ、恥ずかしいんだけど！

ああ、しかも筈の怒りが加速したぞ。

「ぐぬぬっ！ 一夏！ お前からも何とか言えッ！」

「え、あ、いや、俺はどうせなら千冬姉に教えてもらいたいんだけど……？」

先生なんだから、生徒に教えてもらうよりもいいはずだし。

なんで千冬姉はそんなに勝ち誇った顔をしてるんだ？

「ふ、分かつたら負け犬はこの部屋から出ていくのだな」

「……一夏」

「お、おう」

「放課後は空けておけ……鍛えなおしてやる」

「へ？ なんでだよ？ というか、放課後はお前は剣道部とか言つてた……」

「問答無用だ！ いいな、絶対空けて置けよ！！」

「フリだな」

「違います！！ それじゃあ、失礼しましたツ！！」

「ああ、そうだ篠ノ之」

「……なんですか？」

「そのドアの修理代は請求させてもらうからな」

「？ ドアって……あ……」

あ……って、お前自分で壊したこと忘れてたのかよ。

まあ、壊したと言うより斬ったんだけど。 というか、剣道の全国制覇すると木刀でドアを叩き斬れるレベルになるのか。

ちなみに学生寮のドアは防犯上の理由により、特性の防刃防弾仕様になつてているそうな。 斬鉄剣かよ。

アイツが剣の類を持つてるとときは、絶対怒らせないようにしよう。

「う、あ……分かりました……」

「ならばいい。では、そうそうに立ち去るといい」

千冬姉がそう言うと、箒は何故かこちらをキッと睨んで部屋から出て行つた。
……俺は悪くないと思うんだが。

「さて、うるさいのもいなくなつたことだ。さつそく勉強を教えてやろう」

「了解。……つと、その前に一つ訊きたいんだけどいいか？」

「ん、なんだ？」

「この部屋ベッドが一つしかないんだけど……俺のは？」

寮長の部屋だから、普通の個室よりは広いみたいだけどさすがにベッドまでは置いて

ない。

後から簡易ベッドみたいなのを運び込むんだろうか?

「何をバカな事を。一つしかないならそこで寝ればいいだろう」「……その場合、千冬姉はどこで寝るんでしょう?」

「ベッドだが?」

「一緒に寝るのかよッ!?」

いくら姉弟とはいって、それはダメだろ!

「当たり前だ。何をそんなに恥ずかしがる事がある。昔はよく一緒に布団で寝たじやないか。」

ああ、なんなら一緒に風呂でも入るか?

生憎お前の好きな大浴場には入れないが、こここの寮長部屋の風呂ならば、多少手狭だが入れない事はあるまい

「いやいや! 何言つてんだよ千冬姉ッ!? 別々に入ればいいだろう!」

「ちつ、お前もくだらん倫理観に縛られたものだな」

倫理は大事だろ。超大事だろ。

人として守らなきやならない一線だよ。

「まあいい、とりあえず勉強の方が先だ。ほら、さつさとノートを持って来い」

「わ、分かつた。でも、絶対一緒に寝ないからな！」

「そんなに私と寝るのが嫌なのか……？」

「ちがつ、嫌とかじやなくてな!?」

「冗談だ。いいから準備しろ」

うう、良い様に千冬姉に振り回されてる気がする……。

自室つてもつと寛げる様なところじやなかつたつけ？ 精神的に追い詰められてる

気がするんだけど。

授業で使つたノートを鞄から引っ張り出しながら、そんな事を思う俺なのであつた。

こうして俺の I.S 学園での初日は幕を閉じた。

く。
……ちなみに、ちゃんと風呂と寝る場所は別々だつたという事をここに明記して置

第3話

pi pi pi と携帯と形態のアラームが鳴り、朝だと告げていた。

俺は、目も開けずにアラームを止める。

アラームを設定したのは A.M. 5:30。

健全な学生としては二度寝につきたいところだが、俺は毎朝 千冬姉の弁当を作る事を厳命しているのである。

よつて、真に残念ではあるがこのぬくもりを放棄しなくてはならない。

ああ、でも手放しがたいぞ……このぬくさと柔らかさ。

そして手のひらからこぼれるぐらいの程よい大きさ、それでいながら、しつとりとし
て肌になじみ、少し押してみれば戻つてくるこの弾力……あれ？

掌に感じる明らかにベッドや枕とは異なる感触に違和感を覚え、うつすらと目を開けてみる。

そして、そこには――

「……あ……んつ……」

「……。oh」

千冬姉がいた。

ここは千冬姉の部屋でもあるから、千冬姉がいること自体は間違いないじゃない。

問題はなんで千冬姉が俺のベッドで寝てるかつてことだ……！

昨日ちゃんと山田先生に頼んで簡易ベッドを調達してもらつて、俺はそこで寝た。

これは俺のベッドだから、夜中に起きて間違えて入り込んだとかもない。

千冬姉だって隣のベッドに入ったハズだぞ？！

というか、千冬姉寝巻きはどうした!? なにゆえ下着姿!?

俺が混乱していると千冬姉が目を覚ました。

「……ふあ……ん? なんだ、一夏……起きていたのか?」

「起きてたのか、じゃねーよ!? なんで俺のベッドで寝てるんだ!?

「そこに一夏がいたからだ」

「なんだよ、その「そこに山があるからだ（キリツ」とか言う登山家みたいな言い訳は!?」「なんだ、こんな美人な姉に添い寝してもらつて嬉しくなかつたのか? アレだけ好き勝手に触つておいて……」

「起きてたのかよ!」

「ほう、やはり触っていたか……お前とはいえども勝手にお触りは許さん（※）」 ※自分から誘う分には問題なし

千冬姉の誘導尋問に踊らされた俺にドスツと、でこピンのものとは思えぬ音と共に素晴らしい衝撃が突き刺さるのであつた。

勝手に潜り込んで来ておいて理不尽じやね？

「どうか、脳みそに直接衝撃ががががッ！」

「まあ、それで許してやろう。私は寮内の見回りがあるからここを離れるが、気安く生徒を招き入れるんじやないぞ」

「了、解……」

それだけ言うと千冬姉は脱ぎ捨ててあつたジャージを纏い、身だしなみを整える……かと思いきや、そこで、ふと何か思い付いたようにこちらを見てきた。

「なあ、一夏」

「ん、どうかした？」

「久しぶりに、アレをやつてくれないか？」

アレって、何を……。ああ、そういうことか。

そういえば、ここんとこ千冬姉が帰つてこなかつたからしばらくやってなかつたな。帰つてきても弁当だけ受け取つてすぐ戻るし。

「……ダメか？」

「別にダメなんかじゃないさ。じゃあ先にシャワーでも浴びてきてくれよ」

「ああ、分かった」

・・・・・

「……んつ、い、ちか……少し、強い……」
「あ、ごめん……痛かつたか？」

「いや、そこまでじゃない…………ふふつ……」

「ん？ どうしたんだ？」

「ああ、なに、一夏も上手くなつたなと思つてな。…………最初なんて、力加減が全くできなくてあちこち痛かつたが…………」

「いつの話だよ…………。アレから何回やつたつて事もないのに…………」

「そうだな…………。久しぶりだが、やはり心地いいものだな…………」

「そつか…………それじや、仕上げといきますか」

「ん、頼んだ」

少し、熱っぽい千冬姉の吐息。赤くなつている首筋。普段は感じない色香を感じる。

俺は手に持つたソレを上から下へとスライドさせる。

その先端が少し触れてしまい、千冬姉が身動（みじろ）ぐ。

千冬姉の艶のある黒髪が靡いて、シャンプーのいい香りと…………千冬姉自身のどことなく甘いような香りが鼻をくすぐつた。

無防備に俺に身体を預ける千冬姉の暖かさを間近で感じながら、俺は――

——丁寧に手櫛で整えて、最後に髪を結う。

「これでよし。

「千冬姉、できただぞ」

「ああ、すまないな。では、今度こそ行つてくる」

「ん、いつてらつしやい……つていうのも何か変だな。またすぐ会うんだし……」

「ふふ、そうだな」

そう微笑んでから、千冬姉は部屋から出ていった。

いやー、久しぶりだつたからうまくできるか心配だつたけど、どうにかなるもんだな。

千冬姉が I.S の操縦者になる前、つまりは、今みたいに忙しくなる前はこうやって俺が千冬姉の髪を梳かしていた。

何でも、自分でやるよりも上手く整つてるんだそうな。

俺も小さい時だつたから、千冬姉に褒められたのが嬉しくて、ついつい頑張っちゃつ

たんだつけか。

これが好評で東さんや篝にもねだられたんだよなあ……。懐かしい。

なんて遠い日の事に思いを馳せつつ、顔を洗つて制服に袖を通す。

そういうや、俺の入学つて突然決まつた割りに I.S 学園にも男子の制服つてあるんだよな。男女共学でもないのに。

まあ、女子の制服を着ろと言われても全力で断るけどな。

どうでもいい事を考えつつ、今日の授業の用意をし終えてから、自前のエプロンを着けて弁当の準備に取りかかる。

現在 6 時……丁度ご飯が焼き上がつたところだ。

さて、今日は何を作ろうかなつと。オーソドックスに玉子焼きと……

頭の中でメニューを考えながら備え付けの冷蔵庫を開け中身を確認したところ。

●ビール × 6 缶

●つまみ

●ミネラルウォーター × 2 本

……終わり。

……ゑ？

食材と呼べるモノが、ない……だと？

……まあ、物臭の千冬姉に期待した俺が間違っていた。うん、そうに違いない。
下手したらフライパンすらない気がしないでもない。

……あ、さすがにあつた。使つた形跡はまるでないけど。

それにもしても、どうするかなあ。

I S 学園の購買にも一応食材を売つてるらしいけど、この時間帯に開いてるはずない
よな、さすがに。

仕方ない、今日の昼は学食で食べるよう言つておくか……。

しかし、となると時間が空いちまつたな。

このまま二度寝でもするか……？

いや、千冬姉が起きてしまつてゐんだからそんな事が許されるわけがない。

見つかつたら、文字通り“叩き”起こされるに決まつてゐる。

……大人しく勉強しておこう。主に俺の脳細胞達のために。

またぞろ叩かれるのは勘弁願いたい。

そういうえば、結局なんで千冬姉が俺のベッドにもぐり込んでたか分からなかつたなあ。

後で筈にでも訊いてみるか。

なんだかんだで、筈も千冬姉との付き合いも長いし何かわかるかもしない。
くるりと、シャーペンを回しながらそんなことを思う俺なのであつた。

朝食の時間が近づき、復習を切りのいいところでやめて学食に向かっていると、廊下
でばつたりと筈と出くわした。

何かひどく狼狽してたが、自称 空気を読むのに定評のある俺は華麗にスルーして一緒に学食に向かうことにして。

「——つてことなんだ……なんでか分かるか?」
「————ツ!! この変態がツ!!」
「ぶべつ!!」

問答無用に竹刀でぶん殴られた。

どうやら、俺は相談相手を間違えたらしい。あと、暴力はいけないと思うぞ。
というかその竹刀をどつから出したんだよ、お前は。

「先ほどまで朝練だつたのだ」

「いやいや、理由になつてないだろ」

「そんなことはどうでもいいっ! お前は分かつてるのか、お前と織斑先生は姉弟なのだぞ!
さらに教師と生徒でもあるのだぞ!!」
「は? 何を今更……」

「そんなお前等が一緒のふ、布団で寝るなどと「ばつ、声がでかい!!」————ツ!?」
余計な事を口走ろうとした筈の口を慌てて塞ぐが、時既に遅し。

Q. ここは?

A. 学生食堂。

Q. 今は?

A. 朝食の時間。

Q. そんなときに大声を出せば?

A. 皆に聞こえる。

「やつぱり千冬様と織斑君つてそういう関係なのね」

「ああ、私の千冬さまがあ……」

「あなたのじやないでしょ！」

「うふふ、姉弟愛。近親相姦。生徒と教師。禁断の……薄い本が厚くなるわね」

こうなるのである。

……また俺を見ながらのひそひそ話が急増するんだろうなあ。

どう考えても、高校デビューやを失敗した気がするぜ。

「んむくくくっ!!（い、一夏が、顔が近い！匂いが！息が耳にい……!）」

「おつ、スマン。塞ぎっぱなしだった」

「ば、ば、馬鹿者お……わ、私を（悶え）殺す気か？」

「や、だからごめんつて。大丈夫か？ 顔が真っ赤だぞ？」

「そ、それは一夏が……」

真っ赤な顔のまま、うつむいて何かごによごによと呟いている筈。

よっぽど苦しかつたらしい。反省。

筈もようやく息を整え終えて、朝食を再開したところで――

「ね、ねえ織斑君つ。ここいいかなつ？」

「おりむー、一緒にご飯食べよー」

「ああ、大丈夫。空いてるぞ」

女の子が三人、声をかけてきた。

確かみんな同じクラス……のハズ。

のほほんとした声が特徴的な のほほんさん こと、布仏本音《のほとけ ほんね》

さん以外の子は正直自信がない。

というか、のほほんさんのその着ぐるみは何だ。寝巻き……？

あ、でも一人は俺の隣の席の子だ。名前は……なんだつたけか。

セシリアの事があつてから一応覚えようと努力はしてるんだが、休み時間の度に一年生だけじゃなくて、上級生からも人が会いに来るせいで誰が誰なんだかさっぱりだ。

そのくせ、急に顔色を悪くして帰つてくんだもんな。体調が悪いなら無理する必要もあるまいに。

「うわあ、織斑君つて朝すぐ食べるんだあ……」

「おりむーは男の子だねー」

「夜はあんまり食べないようにしてるからな。朝はこれぐらい食べないときついんだよ」

「……大丈夫だつたの、夜の方は（性的な意味で）」

「？　ああ、慣れればたいした事はないさ」

何か含みがあるような言い方だな……まあ、いいか。

「それよか、女子の方こそ朝それだけで足りるのか？」

「えつ？　あ、これはそのお……ね？」

「んふふふ　かなりんはねー、おりむーの前だから見栄を張つちやつて「本音ちやーんつ
?!」むぐむぐ」

のほほんさんが最後まで言い切る前に、かなりんさんが慌てて口を塞いでいる。

別に見栄なんて張る必要なんてないと思うんだけどなあ……。

食べなくて、授業中に腹でも鳴つたらそれこそ恥ずかしいだろうに。
ま、男の俺とは考え方が違うのかもな。

「ちなみに私は小食なのさ」

「ふーん、のほほんさんは？」

「私？ 私はほら、お菓子とかよく食べるしー」

そう言つて、嬉しそうに着ぐるみからポツキーを取り出すのほほんさん。

そういう問題じやないと思うが……ていうか、耳がピコピコ動いてるんだけど!? のほほんさんの動く耳に釘付けになつていると、さつきから黙つていた箸が声をかけてきた。

「……一夏」

「ん？ どした 箸？」

「こほんっ……どうやら少し量が多かつたみたいだ。……食べてくれないか？」

「え、さつきはちよつと量が少ないとかぼやいて「ないつ!!」わ、分かつたよ……」
ご飯が半分ほど残つた茶碗を突き出され、仕方なく受け取る。

なんで対抗意識燃やしてくるんだ、コイツは。

そんな箸を見て、かなりんさんは何故か顔を真つ赤にしている。

「あうあう、篠ノ之さん大胆だよう」

「……どこが？」

「そんな、口移しでなんて……」

「ぶふう!?」

「うおッ!?」

「おおく、かなりんは想像力豊かだねー」

想像というかそれは妄想の域だよ、のほほんさん。

口移しとか、いつたい何手先の妄想をしてるんだこの子は。

半ば呆れる俺。

そして、筈はどうと、その発言で勢いよく味噌汁を噴出し、咳き込んでいる。

「げほげほつ、な、何を言つてるんだ! わたしがそんな事をするハズが……ハズが……うあ……」

「なんでお前まで真っ赤になつてるんだよ……」

「う、うるさいつ」

「ほら、顔拭いてやるから動くなよ」

「なつ!？」

『『『●』』』

味噌汁を噴出したせいで汚れてしまつての顔を布巾で拭いてやる。

……なんか小さい頃を思いだすなあ。筈を“男女”とか呼んだ奴等を筈が木刀でボコボコにした時に、ついた返り血をこうやって（ry

などと、昔の出来事に思いを馳せていると――

スパン!

また俺の脳細胞五千個が快音と共に天国へと旅立つた。

後ろには振り向くまでもなく、千冬姉が立っていた。

部屋を出て行くときの機嫌のよさはどこへやら、憤怒の様相である。ハハハ、詰んだ。「食事は迅速に効率よく取れ。そこで妙な目つきで見て いるお前等もだ！」 遅刻なんぞしてみろ、グラウンド 10 周ほど走らせてやる!!」

その言葉を聞くや否や、隣ののほほんさん達もすごい勢いで飯を食べ始める。

七

「そして喜べ、織斑、篠ノ之。お前等は遅刻しなくともきつちり10周走らせてやろうじゃないか。さつさと着替えてグラウンドに来るんだな、他の者が来るまでに終わらなければ授業後に回してやろう」

「マジかよッ!?」

「どうした？」もう5周追加してほしいのか？」

『……喜んでやらせていただきます』

周りから同情の視線が惜しみなく注がれる中、俺達は急いで朝食を食べるのであつた。

ちなみにこのＩＳ学園のグラウンド、一周当たり約5キロ。

無論、その日の休み時間と放課後は完全に潰れたのであつた。

ランナーズハイの境地に初めて至つた、そんな2日目。

「 今日の篠ノ之さん 」

「 ふつ 」

寮のベッドに疲れた身体を投げ出す。

「…………疲れた」

普段ならしないようなだらしない格好になるが、今日くらいは許されるだろう。
まさか、本当に十周走らされるとは……。放課後は一夏を鍛え直すはずだったのに
……！

くつ、コレも全部一夏のせいだ！

一夏が私にあ、あんな事を…………えへへ（思い出し照れ）

そ、それに考えようによつては今日一日一夏とずっと一緒に居たわけで……ん？　な
んだ問題ないではないか。

「篠ノ之さん、私先にシャワー借りるよー？」

「ふふふ、明日も一夏と一緒に……」

「…………なんで一人でにやついてるのかしら、この娘」

ふと気が付くと、同室になつた鷹月さんに不審そうな目で見られていた。
はて？

第4話

どうやら、俺はまだこのIS学園でIS操縦者としてやつていくのに、覚悟つてモノが足りていなかつたようだ。

放課後、学園のアリーナにてそんな事を思う。

今更だが、ISつてのは女性限定で纏う事のできる兵器である。

そのISの特性上、量子化されている機体や武装を展開した時に、操縦者はその動きを阻害するような服装であつてはならない。

よつて、通常ISを展開する場合、その操縦者はISスーツなる自身の動きを制限しないアンダーウェアを着てる。

一応、動きを阻害しないつてだけじやなく、ISが展開しているシールドバリアが消えた時に攻撃を受ける事を想定して、ある程度防弾や防刃仕様が施されているが、俺が言いたいのはそんな事じやない。

あー、つまり、その、何だ……。

ISスーツつてのは一口に言つてしまえば、スクみ……いやいや、甚だ露出が多いのだ。

ここまで言えば、俺が何が言いたいか分かるだろ？

「どうした、一夏？ そんな明後日の方を向いたまま、私の訓練が受けれると思つているのか？」

「…………」

目のやり場に困る……ツ！

目の前には訓練用 I S 『打鉄』^{うちがね}を纏つた千冬姉が悠然と立つてゐる。一応、世界大会の映像とか見て分かつてはいたんだが、あのメリハリのある身体にこの装備は卑怯だろ。

実の姉弟ではあつても、俺は KENZEN な男なんだぞ。そこのところ分かつて
るのか、スーツ開発者！

いかん、落ち着くんだ織斑一夏。訓練された弟は姉にそんな感情は抱かない……！
というか、現役時代この格好でテレビで放映されたのか。

……東さんに頼んでデータを全部消去してもらえないだろうか。

とまあ、どうでも言い事を考えつつ、どうしてこんな状況になつたのかを考える。
考えるまでもなく、セシリリアとの戦いに備えての話だつたな、うん。つまり、こんな事になつたのも俺が原因、と。

入学してから今までの授業は主に I S についての基本的な動作や関連する法律など

を学ぶ座学や、一般教養の科目を中心にやつてきていた。

そのため、この学園のメインであるISの訓練機を使った実習ってのは、それらがある程度習熟できた暫く先の事になるはずだつた……が、しかし。

5日後に迫つた代表候補生であるセシリシアとのクラス代表決定戦を前に、まともにISを機動すらできない俺が戦うつてのは無謀すぎると千冬姉が特別に放課後の時間を使つて教えてくれる事になつたのだ。

その際に籌が「私との約束はどうしたのだ！」と木刀を持ち出して来た所為で、学園中を逃げ回るは羽目なつたのは忘れない。

一方の対戦相手であるセシリシアは既にIS稼動時間が300時間オーバーなので「まあ、そのくらいハンデにもなりませんわ」とかなんとかであつさり認めてくれた。男だなんだとバカにしてきたが、案外いい奴なのかもしれない。それとも、ただの余裕か慢心か。

それならそれで、対戦の時に油断でもしてくれるかもしれないな。

などと、現実逃避を兼ねて現状の整理をしていた俺の顔は、千冬姉の手によつてぐいっと強引に視線を戻された。

「いい加減こちらを向け」

「……うう、分かつたよ」

「まあ、そうやつて意識してくれるのはいいが、今から行うのは訓練だ。そうやつて呆けたままでいると……」

「……いると？」

「こうだ」

ザシユツ！ と打鉄の主武装である近接ブレードがちょうど俺の首の高さで振るわれる。

……あれ？ 訓練と称じた斬首刑か何かだつたのか、コレ？ だらだらと冷や汗が流れる。

「まあ、とにかく打鉄を展開しろ。話はそれからだ」「ん、分かつた」

とりあえず、目の前に持つてきてある打鉄に身を預け、試験会場でやつたように展開を試みる。

千冬姉や山田先生の授業を受けて、ある程度理解が追いつくようになつた今でもこれが装着される仕組みが分からん。なんで勝手に装着されるんだ？

「よし、できた」

「今はこれでいいが、ISの装着は1秒を切る速さで行えるようになれ。まあ、それはお前の専用機が届いてからの方がいいかもしないがな……」

「え？ 専用機って……」

「ああ、まだ言つてなかつたか。お前がＩＳ操縦者になつたときから東に頼んでいてな、本番までには届けるようによつてある」

「何かすぐ優遇されてる気がするのんは気のせいいか？」

まあ、ド素人が代表候補生と戦うんだからこれぐらいはあつて然るべき事なのかも知れなわけです。

と思つたけど、それだけではなく、俺が世界で唯一の男のＩＳ操縦者だつて事も関係してゐみたいだ。

所謂きな臭い政治がらみの話つてことらしい。

ま、貰える物は貰つておく主義だからいいけどな。

ともかく、こうして手伝つてくれる千冬姉や筈のためにも無様な結果に終わらせるわけにはいかない。

やるからには勝つ。少なくとも、千冬姉の顔に泥を塗ることだけはできない。

「では、訓練を開始する。初めに言つておくが、お前の勝率は限りなく低い」

「へっ？」

「当たり前だろうが、仮にもオルコットは代表候補生だ。お前のような素人の攻撃はまず当たらないだろう。それに専用機に関しても急がせて入るがアソツの事だ、面白そ

だからとかいう理由で本番当日に届けるかもしけん。つまり、乗り慣れてない状態で戦う羽目になることもありうる」

「……」

確かに、東さんならやりかねん。

基本、行動理念が面白い面白くないで動いてる人だからな。

「つまり、お前に残された勝機は相手に生じた隙や焦りにつけ込むしかないだろう。そのためにはまず回避だ。可能な限り避け続けろ」

「ん、ド素人の俺に避けられて焦れたところを狙えって事か」

「そういうことだ。まあ、後は最低限のダメージを抑えて油断した所を叩くと言うのもあるが、それはダメだ」

「……？ 確かに誰も好き好んでボコボコにされたかないけど、なんでだ？」

「……心配するだろうが」

「うん？ ごめん、聞こえなかつた。もう一回……痛つ！」

「話は終わりだ、私が攻撃してやるからきりきり避けろ」

そう言つて斬りかかる千冬姉……つて、おわあ！？

それ絶対素人相手の太刀筋じやないだろおおおおおッ！？

◆
その日から、決戦当日まで訓練と言う名の私刑が続くのだった。

そして、本番当日になつた。

うーむ、それにしても何故かここ数日の記憶が虫食い状態なんだが、これはどういうことなんだろうか。

授業の内容とかは覚えてるんだけど、放課後以降の記憶が曖昧だ。

気がついたらベッドの上とかがデフォルトだつた。

朝、筈と飯を食うときとかすごく可哀想な目で見られてたから、どうしてなのか訊いてみても絶対目を逸らすんだよなあ。

そういうえば、セシリ亞も同じように氣の毒そうな顔してたっけか……。
ま、そんな事はともかく。

俺は第三アリーナのピットにいるわけなんだが、千冬姉が言つてた俺の専用機が届か

ない……どうしよう。

「なあ、等」

「ああ、どうした一夏」

「正直、専用機よりも打鉄でやつた方がいいような気がしてきたんだが」

「……せつかく千冬さんが用意してくれたものを無碍に扱うと酷い事になりそうだがな」

「……」

確かに。IS持ち出して来て俺の体をブレードで、ずんばりんとかありそうだ。

といつても、このアリーナの使用時間つてのも限られてるからのんびりしてるわけにもいかないんだよな、セシリ亞も既に待ってるし……。

横に映し出されてるモニターの映像を見ると、青を基調とした機体を纏ったセシリ亞が宙を浮いていた。

持つてる武器から見て、遠距離型みたいだな。

俺、千冬姉からは主に近接戦闘における回避しかやつてなかつた気がするんだけど

……。

今までの苦労はなんだつたんだと思つてたら、山田先生が息を切らせながら駆け込んできた。

「織斑君、織斑君、織斑君ッ!!」

「三回言わなくても聞こえますよ、山田先生」

「織斑君の専用 I S が到着しましたっ」

山田先生がそう言うや否や、ガコンと無骨な音を立て隣の搬入口が開き出す。

——そして、その白い機体が俺の眼前に現れた。

「これが、俺の専用機……」

「はいっ、これが織斑君専用 I S 『白式』ですよ！」
びやくしき

白式、俺の専用機か。

うん、なんかいいな。専用機つて響きがこう、男の口マンっぽくて。

「バカな事を考えてないでさつさと装着しろ。時間は限られているんだからな」

「了解です」

とりあえず、いつの間にか隣まで来ていた千冬姉の言われるがまま、I S を装着する。まあ、装着と言つても俺が何もしなくとも勝手に動いて最適化するんだけど。

なんて事を考えながら待つていると、目の前にセシリアの I S 『ブルー・ティアーズ』と白式のデータが流れ始める。

……何だこの機体。

武装が近接ブレード一本つて……零式にだつてハイパー・ラスターとかアーマーブ

レイカーヒーとかあるのに。劣化ダ○ゼンガーミみたいなものだろうか。

でも、この万能感はすごい。今まで訓練で使ってきた打鉄以上のそれに、思わず気分

が高揚してしまう。

これで一次移行^{ファースト・シフト}がまだなんだから恐れ入る。

そんなこと思つていると、千冬姉^{が声}をかけてきた。

「ちつ、時間がないな……。初期化^{フォーマット}と最適化^{ファイツティング}処理は実戦でやれ。

……大丈夫だ、訓練の事を思いだせ。お前ならできる、そうだろう？」

千冬姉が寄せる信頼がくすぐついた。

それに答えるように、言葉を紡ぐ。

「ああ、なんたつて俺は千冬姉の弟だからな。その顔に泥を塗るわけにはいかないさ」

「ならばいい。それと……」

「分かつてますよ、織斑先生」

「馬鹿者、お姉ちゃんだ」

「まだそれを言つてるのかよ!?」

「しつこいな、おい!?」

「でもこれで余計な力は抜けた氣がする。案外これを狙つてたのかもな。

「篠ノ之さん、私たちの事忘れられてません……？」

「お姉ちゃん……だと？」一夏のシスコンも大概だが、千冬さんのブラコンも拍車がか
かつてきていなか？早く手を打たねば、手遅れに……！」

「あ、あのう、聞いてます？ 篠ノ之さん？」

後ろの方で何かブツブツ言つてる筈と涙目の山田先生の姿が“見える”。
——これはハイパーセンサーの補正のおかげか。

というか、筈の目が虚ろになつてちよつと怖い。フォローしてから行くか。

〔筈〕

「ツ！ な、なんだ？」

「山田先生が泣きそうだぞ」

「へっ!? あ、いや、これは先生を無視してたんじやなくてですね!?」
「ううう、いいんですよー、どうせ私は先生らしくないですしぃ」

「違いますつて!?. あーもう！ 一夏のせいだからな!!」

「なんでだよ。まあいいさ……筈」

「だからなんだ！」

「——行つてくる」

「！」

——ああ、勝つて来いッ!!

その言葉を背に受けながらゲートから飛び出した。

アリーナに到着し、俺より上方に浮いていたセシリ亞と相対する。いつものように偉そうに腰に手を当てたまま声をかけてくる。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「そりやまあな。あそこまでお膳立てされてんだ、やらなきゃ嘘だろ？」

「ま、そうですわね。……それより、お体の方は大丈夫ですかの？」

「ん？　何がだ？」

「い、いえ、特に何もないのならいいですわ……」

おかしな事を言う奴だ。

でも、こうやつて話してゐる間にも最適化が行われてるわけだからいいけどな。

この勝負の鍵は一次移行にかかる。

それが終わるまではできるだけ力を温存して、勝機を逃さないようにしないと。

そんな事を考えながら、改めてセシリアのブルー・ティアーズの武装を確認していると、これまた偉そうにビシツと俺を指を指してくる。

どうでもいいが、人を指差してはいけないと教わらなかつたのだろうか、このお嬢様は。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンス？」

「このまま戦えば私の勝利は自明の理。ですから、無様な姿を皆さんに晒す前に謝つてくだされば、許してあげない事もなくつてよ」

「そいつは受けられられないな。ここで謝つた方がよほど無様を晒す

「ふふ、まあ、そうでなくては戦う甲斐がないというものですわ。

では、一手、踊つていただきましょうか、わたくし私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーブズが奏でる円舞曲ワルツで……！」

「生憎、俺が踊れるのは盆踊りと日本舞踊だけだ……！」

「地味にすごいですわね!?」

そんなセシリアの咆哮^{つっこみ}と共に、セシリアの持っていたレーザーライフル『スターライト Mk II』が火を噴いた。

ハイパー・センサーの警告が表示され、上昇する事で回避する。

まあ、撃たれると分かっているものを避けるのはそう難しいことじゃない。ましてや、直線的な攻撃なら尚更だ。

ここからが正念場だ。

量子化されていた近接ブレードを呼び出し、構える。

千冬姉が言つていた通りに、避け続けるにも限界がある。

本来の用途とは違うが、少しの間、盾になつてもらおう。

「初撃を避けたくらいでいい気にならないことですわ！」

次々に精密な射撃が放たれ、俺へと襲い掛かってくる。

でも、その正確な射撃だからこそ、ハイパー・センサーを備えるISならその射線を見切ることができる。

千冬姉に身体に叩き込まれた回避術が今此処に……！

捻り、旋廻、上昇、下降。狙いを定めさせない。

セシリ亞もこちらの回避先を先読みし、撃ちこんでくるがブレードを盾にダメージは最小限に抑える。

近接での回避しかしてこなかつた千冬姉との特訓だが、攻撃への反応速度は格段に上がつた気がするな。

でも、こんな程度でどうにかなる程度の腕で一国家の代表の候補になど選ばれるわけもない。

セシリ亞は決定打を与えると見るや、すぐに戦術を変更する。

「くつ、この一週間の特訓とやらは伊達ではなかつたということですわね……。ですが、それだけでこの私に勝てるとは思わない事ですわッ!!」

「ちい……！」

ブルー・ティアーズに付いてるフイン・アーマーから4つほどビットが分離し、それが不規則に動き回り俺へとレーザーを放ち始める。

さすがに多角攻撃の回避なんぞ教えてもらつてない。それでも必死に避けるが、その回避先にもビットが配置されて、レーザーが撃ち込まれる。

ブレードを盾にしても凌ぎ切れるもんじやないぞッ！

何とか直撃を避けながらも逃げてるけど、着実にシールドエネルギーが削られていく。

「そつ、最適化なんて待つてられないつ……こつちから仕掛けるッ!!
「せりやあッ!!」

被弾覚悟で一つのビットに一気に接近する。

さすがにISの加速ほどの速さはビットにはないらしく、ブレードで真つ二つにする。

が、その隙を狙われセシリシアからライフルの射撃が襲いかかる。

「その隙、いただきますわッ!!」

「つあつ!!」

無理矢理身体を捻り、何とか直撃だけは避ける。

こんな千冬姉の九頭龍閃もどきに比べれば、なんてことはないッ!

「……無茶苦茶な回避をしますわね」

「……必要に駆られて学ばざるを得なかつたんだ」

その同情の視線が痛い。

ま、なんとなくだがコツが掴めた。

それに、もう少しで相手の攻撃の癖とか分かりそなんだが……。

「はっ!? 呆けている暇などなくつてよ!!」

「自分だつてしてたくせにツ!!」

まずは、このレーザーの雨を切り抜けてからだなツ!!

——シールドエネルギー残量 114

中破判定か……ええい、最適化はまだかよつ!?

あれから15分と少し。そろそろレッドアラートがなり始めるレベルだが、例のビットもさらに一個潰して残り2機。

そして一向に最適化が終了する気配もない。

いやはや、千冬姉の訓練がなかつたらもう負けてたかもな……

「初見でこれほどまでに私もブルー・ティアーズを避けて、その上2機も落とすとは……」

認識を改めますわ」

「そいつはどうも、すぐに残りの2機も叩き斬つてやるよ」

「ふふつ、できるものならやつてごらんなさいな」

まあ、耐えた分だけ見えてきたものもあつた。

あのビット……自動起動兵器かと思つたがどうやらそうでもないらしい。

あのビットが攻撃してくる間は、セシリニア本人からは攻撃をしてこない。同時に狙つたほうが効率がいいのにも拘らず、だ。

こつちを侮つての余裕かとも思つたけど、それなら一機やられた時点で撃つてきてもいいはずだ。

つまり、あのビットはセシリニア本人が操作していて、そつちに集中してゐる所為で同時にライフルで狙うなんて事はできないつて事なんだろう。

ビットの役割は攻撃・攪乱・誘導の三つ。

攻撃は基本的に俺の一番反応の遠い角度で狙つて撃つてくる。それもタイミングを微妙にズラし、回避予測位置を狙つてくる。

誘導は狙つてゐる位置に相手を誘導して、ライフルでズドン。これが基本戦術。

まったく、俺のISとは相性悪いなあ。

近づけばこつちにも分があるんだろうけど、向こうだつて近接の備えはあるだろうし。

ともかく、あのビットをどうにかしなくちや、近づくことも出来やしない。

「さあ、終幕といきましようか！」

その宣言と同時に再びビットが襲いかかって来る。

でも、これで来るつて事はセシリ亞本人からの攻撃はないッ！

「つまり、俺はこっちのビットだけに集中すればいいってワケだッ！」

「その様子だと、このブルー・ティアーズの仕組みに気付いたようですね……でも、甘いですわッ！」

「なあっ!?」

セシリ亞はビットを操つてるにも拘らず、ビットを射出したものとは別のアーマーからミサイルを撃ち出し、さらにはライフルで射撃をしてきた。

ミサイルはともかく、ライフルを撃てるはずが……つて、そうか！　俺がビットを破壊したからその破壊した分だけライフルへ思考が割けたのかッ!?
つか、避け切れ——ツ!!?



ピットから一夏を見送った私は、一夏の戦う姿を見逃しまいとそのままピットで観戦

していた。

さすがに銃器相手だと近距離主体の一夏では分が悪いらしく先ほどから、ほとんどワ
ンサイドゲームと言つていい程に一夏はオルコットに追い込まれている。

だが、そんな中でもアイツは勝機を見つけたようで目が輝いている。

……私の好きな顔の一つだ。

こほんっ……そしてオルコットの正確な射撃を華麗とは言い難いけれどもかわしつ
つ、残つたビットの一つへと突貫する一夏だつたが、そこを目掛けてミサイルでの攻撃
と今まで同時には使わなかつたライフルでの射撃が浴びせられた。

そんな……ッ！

「一夏……！」

「ふ、機体に救われたな……というか、何だこの謀つたかのようなタイミングは」

「へつ？」

千冬さんがそうひとり、「ちるとほぼ同時に、一夏を包むように漂つていた煙幕が吹き
飛ばされるかのように散らされていき、そこに一夏の I S 『白式』の本来の姿が現れた。

「良かつた、無事か……」

「当たり前だ。こんなところで終わるような柔な鍛え方はしてない」

「ふふふ、またそんな事言つて、織斑先生もずいぶん心配してたじやないです。ほら、

強く握っちゃってたせいでスーツに皺が……つて、痛い痛いッ!」

「山田先生はウチの弟並みに学習能力がないようですね。先ほど私は身内ネタでからかわれるのは嫌いだと言ったはずですが?」

「あううう、すいません〜〜〜つ! そんなに強く握られたら千切れます! 千切れちゃいますううううう!」

……一夏、私はちゃんと応援してるからな!



——フォーマットならびにファイティングを終了しました、確認を押してください。

ようやく、か。

一次移行が終了して、白式は新しい姿に……いや、本来の姿か。

「なつ、一次移行? まさか今まで初期設定のままで…ツ!」

「ま、そういうことになるな。つまり、こつからが本番つて事だ」
 そう言つて改めてブレードを構え……つと、こつちも変化してたのか……『雪片式型』?

雪片つて、千冬姉の使つてた武装だよな……?

ははつ、なんてこつた。

「全く、俺は最高の姉を持つたな……俺にはもつたいないくらいだ」

雪片を正眼に構え、刀身をエネルギー・ブレードへと転換する。

まさか、これを受け継ぐことになるなんて……東さんの仕業だな?
 どこかでしてやつたりと笑つてゐる彼女を想像し、苦笑してしまう。
 でも、これならいける。

いつだつて千冬姉に守られっぱなしだつた情けない俺でも、やれる。
 今度は、今度こそは――

「俺が守る番、だよな」

「……は? あなた、いつたい何を――――――」

「いや、こつちの話だ。そんじやま、行くぜッ!!

「なつ!」

さつきとは比べ物にならないほどの加速。旋廻速度。

これが白式か……！

セシリアが再びビットとライフルでの波状攻撃をしてくるが、遅い。攻撃直後を狙いビットを叩き斬る。

迫つてくるミサイルのスラスターを破壊して、一気に接近する。雪片の使い方は何度も千冬姉の映像で見てきた。

振るい方は、この一週間で俺が一番よく見てきた！

「くう、調子に乗つて……！」

残つたビットとライフルで攻撃してくるが、上昇してかわす。

そのまま高度を上げ、急旋回。

追つてきていたビットをすれ違ひ様に斬り裂き、そのままセシリアへと降下する。

「さあ、これで終わりだあッ！」

ライフルから撃ち出されるレーザーを切り払い、降下の推進力と共にセシリアに斬りかかり——

アリーナに、決着を告げるブザーが鳴り響いた。

◆
——結果から言おう。

「で、何か言い訳はあるか？」

「……ありません」

負けました。

エネルギー切れというなんとも無様な幕引きで。

「……さあ、これで終わりだあ、だつたか？」

「スマセン、許してください、筈さん！」

「ふん」

ピットに戻った俺は、このように筈に試合中のセリフを棒読みで言われるという辱めを受けているところだ。過去の黒歴史を暴露される気持ちってこんな感じなんだろうな！　涙が出そうだ！！

それにしてもなんで突然エネルギーが切れたんだ？

まだエネルギー残量は80近くはあつたはずなんだけど……。

「それがあの雪片の特性だからだ」

「千冬姉……」

「まあ、その辺りは帰つてからじっくりと教えてやる。それよりも、だ」
「うあつ、千冬姉からも説教かよ……まあ、あんだけ大見得切つてこの結果だから仕方
ないよな。

「お前は訓練で私が言つた事を忘れたのか？ ん？ 言つたはずだな、避け続けろと
「いや、でも千冬姉 近接しかしながらたつて、痛ひッ!?」

そんな反論など通じるはずもなく、頬をつねられる。新パターンだ！

「そんな言い訳は聞いていない。まつたく、どれだけ私が心配したと思つているんだ
……」

「ひやい、すみません……」

「まあ、試合自体は初めての割りによく動けていた方だ……及第点もやれんがな」（むに
むに）

褒めてるのかそうでないのか。

「どうか、いい加減に頬を引っ張るのをやめてもらえないだろうか、お姉様。」

「急降下からの斬撃はいい……だがツ！ 完全停止もできない分際でそんな事をすればああなるのは分かつていただろう！」

オルコットを巻き込み、抱きついたまま錐揉みしながら墜落など……そうやつて、またお前はフラグを建てるのかツ！ 狙つてているのか!!」

「あい、申し訳ございません……」

千冬姉が後半何を言つてゐるか全く分からんが、こういう時は理由なんか分からなくてもとにかく謝れつて弾が言つてた。

それにして誰に謝らされてるんだ、あいつ？

彼女が欲しい欲しいとか言つてたから、彼女はいないんだろうし……。

などと、別な事を考えていたら例のお約束が飛んできた。

スパーーンツ!!

「一夏、聞いてるのかツ!!」

「ごめんなさい」

最近、脳細胞よりも頭皮の方が心配になつてきた俺なのであつた。

後日談。

クラス代表決定戦の次の日。

結果は負けてしまったけど、クラス代表にはならずに済んだと意気揚々とその日の授業を迎えた訳なんだが……。

「では、一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決定しましたー。あ、なんか一繫がりで縁起も良さそうですねつ」

一が並んでも縁起がいいとは聞いた事などないが、とりあえず――

「なんで俺がクラス代表になってるんですかッ!?」

「馬鹿者、質問があるなら挙手をしろ」

また叩かれる。出席簿超痛え。

大人しく着席して、手を上げる。

〔質問〕

〔なんですか織斑君?〕

小首を傾げる山田先生。

いや、先生分がつてるでしよう。

「なんで自分がクラス代表になつているんですか？」

「それは私が辞退したからですわつ！」

あんすと？

後ろの方でがたんという音がして、振り向くとセシリシアが立ち上がりこちらへ近づいてくる。

「試合の結果こそあなたの負けでしたが、この私を相手取つてあそこまで立ち回り追いで詰めたのは称賛に値しますわ」

おお、何か微妙に褒められてる？

自分を上に見てるのは変わらんけど。

「そ、それで、ですね……。あの時大人気なく怒ったのを私も反省いたしまして……クラス代表を一夏さんに譲つて差し上げようと思つたのですわ」

俺はやりたいとか一言も言つてないけどな。

なんて事を考へてる間にセシリシアは俺の目の前までやつてきて、爆弾を投下した。

「そ、それに、私にあんな事をなさつた責任も取つてもらいませんと……」

「いや、責任つてなんのだよ」

「私、あのように力強く殿方の腕に抱かれたのは……その、初めてだつたんですよ?」「何の話だつ! それに、そんなことなら私にだつて権利はあるぞ!」

何故か筈が参戦した。

ずんずんセシリアへと近づいていき、二人してぎやあぎやあと言い合つてゐる。 というか、お前ら千冬姉の目の前でよくそんな事ができるな。授業中だぞ、今。「いい加減黙らんか、貴様等ツ!!」

『あうつ!?

千冬姉の出席簿アタックが二人の頭に炸裂した。

心なしか、俺の時より威力が高いように思える。

「貴様等、私の言つた事を忘れ他とは言わせんぞ……コイツは私のだつ!!」

……あー授業つていつ始まるのかなー。

そろそろ趣味・特技の欄に現実逃避の項目を追加できそうだ。

そんな現実逃避をしてる俺に隣の席の……えーと、そう、相川さんが話しかけてきた。

「ねえねえ、やつぱり織斑君は織斑先生に愛されてるんだねー」

「……愛つてなんだ、愛つて」

振り向かないことだろうか。

少なくとも、こうやつてクラスメイトの前で自慢されることじゃないはずだ。

「フフフ、冬×夏……いえ、意表をついて夏×冬。学園祭に向けて執筆を開始しなきや
ね」

俺は、何も聞いてない。

こうして千冬姉の身内自慢と言うか、俺自慢の演説を聞かされるという羞恥プレイを
受けながら1限目の時間は過ぎていくのであつた。

第5話

放課後の第二アリーナ。

I Sの練習に精を出す生徒がちらほら見える中、俺は練習に入る事もできず、ただ事の推移を見守っている。

「だからつ、一夏は私が鍛えると言つている！」

「あら、I S適正がCランクの篠ノ之さんに教わるよりもAのわたくしに教わった方がいいのは自明でしよう？」

「ら、ランクは関係ないッ！　それに、もとより一夏と約束していたのは私の方が先だろう！」

……なんでこんなことになつてるんだ？

目の前で筹とセシリ亞が言い争つてる姿を見ながらそんな事を思う。

いつもならこの二人が争うと千冬姉の出席簿スマツシユが飛んでくるんだけど、今はその千冬姉がない。

なんでも今日は職員会議なんだそうな。たぶん、今度のクラス対抗戦の事についてなんだろう。

そして今のこの状況はそのクラス対抗戦が関わってるんだよな、これが。

クラス代表っていうのは、全員がセシリ亞や俺みたいな専用機持ちつて訳じやないけど、千冬姉が言うにはその実力は確かな物のこと。

まだセシリ亞との試合があつたばかりだから、今日は休めつて千冬姉に言われてたんだけど、クラス代表になつたからには俺も相応の努力を重ねないとつて事でここに来たんだが、途中で会つた篠とアリーナで何故か待つてたセシリ亞が鉢合わせて、今に至るト。

それにしても、なんでこいつ等はもめてるんだろうか。別に一緒に教えてくれればいいじゃないか。

ほんやりとそんな事を考えていると、いきなり二人の矛先がこちらに向いた。

「一夏！　お前からも何とか言つてやれ!!」

「一夏さん、わたくしの教え方の方がよっぽどためになりますわ！」

「いや、一緒にやればいいだろ。せつかく篠も打鉄の使用許可取つたんだし……」

なんて至極真つ当な事を言つてみるんだけど、「それじゃあ、意味がない！」と二人して詰め寄つてくる。

何が気に食わないんだよ……。

皆でやつた方が楽しいじゃんか。

「はあ、じやあお前ら二人が戦つて勝つた方に教えてもらうって事で」

「なっ!?」

「！さすが一夏さんッ！ 分かっていらっしゃいますわねっ！」

俺が妥協案を出すと二人は対照的な表情を浮かべる。

というか、篝は完全にこつちを射殺すかのような目付きで睨んできている。
いや、そんなに睨まなくとも分かってるっての。

「ああ、でもさすがにこのままだとフェアじゃないからな。セシリアはあのビットを使用禁止な」

「一夏さん、ビットではなくブルー・ティアーズですわ。ですが、このわたくしを相手にするんですもの、それぐらいのハンデは必要ですわね。でも、一夏さんに教えようとす
る方が一夏さんが貰わなかつたハンデを貰うなんて、やはりわたくしの方が相応しいの
ではなくて？」

そう言いながら、ブルー・ティアーズを身に纏い空へと優雅に舞い上がるセシリア。

一方の篝はといふと、挑発されて怒つてるかと思いきや、逆に不敵に笑つて挑発し返
していた。

「ふつ、今から負けたときの言い訳の仕込とは準備といふことだな」

「んな、なんですって!?」

「だがな、ハンデなどいらん、全力でかかつて來い！」

そう啖呵を切るとセシリ亞を追いかけるように急上昇をする筈。

そして二人の試合が始まった。

筈に全力で來いと言われつつも、何だかんだでセシリ亞はライフルしか使つてない。

それに対する筈もライフルをかわしながら呐喊している。

……やっぱ、筈も操縦がうまいなあ。俺より回避に無駄がないような気がする。

千冬姉が言つてた通り、ISの適正ランクつてあんま當てにならないのな。ちなみに俺の適正はB、筈の1つ上。

なんて事を考えながら、二人の試合を見ていると後ろから声をかけられた。

「ふつ、お前もあいつ等のあしらい方がうまくなつたな。偉いぞ」

「あれ、千冬姉？ 職員会議があつたんじやないのか？」

「嫌な予感がしてな、山田先生に押し付けてきた」

胸を張つて言う事じやないだろ、千冬姉。

今頃涙目になつてるんだろうな、山田先生……。

千冬姉に振り回される苦労は俺が一番よく知つてます。ご愁傷様です。
つか、嫌な予感つてなんだよ。

「そうしたら案の定だ。一夏、お前は私の言つた事を忘れたのか？ 今日は休めと言つ

たはずだぞ」

「い、いや、そういうわけじゃないよ。ほら、俺つてクラス代表になつただろ？ そんな俺が対抗戦で情けない結果に終わつたら譲つてくれたセシリヤやクラスの皆に申し訳ないしな。それに……」

「それに、なんだ？」

「うつ、い、言わなくとも分かるだろ？」

「当たり前だ、何年お前の姉をやつてると思つている」

それなら言わなくとも、という言葉は千冬姉に遮られてしまい最後まで言う事ができなかつた。

「——それでも、私はお前の口から、聞きたい」

真つ直ぐ俺の目を見つめながら、そんなことを言われる。

……その言い方は卑怯だろ。

「……その、千冬姉にさ、いい所を見せたといつて思つて

「ふふつ、期待しているぞ」

そう言つて嬉しそうに俺の頭をぐしやぐしやとなでる千冬姉。

あーもうつ、恥ずかしいっ！ 何だよこれ、新手の羞恥プレイか！！

なんて悶えてる俺の心情を知つてか知らずか……つて、確実に知つた上でやつてるん

だろうけど、千冬姉は俺の腕を引っ掴み、アリーナの出口の方に進んで行く。

「今日は気分がいい。一夏、帰るぞ」

「え、いや、俺、箬達と一緒に練習を……」

「そんな事はどうだつていい、重要なことじゃない。今日はいい酒が飲めそうなんだ、お前には美味いつまりを作つてもらわなければな。購買に食材を調達しに行くぞ」

「え、あ、うん……いいのか……？」

箬達が熱戦を繰り広げているのを見ながら、ずるずると千冬姉に引きずられるままアリーナを退場する俺。

……後が怖いんだが。



「そこッ！」

篠ノ之さんが繰り出す斬撃がわずかに大振りになつた所を見計らい、素早く旋廻、後ろを取る。

「貰いましたわ!!」

「ぐつ、しまつた!?」

わたくしのスターライトmkⅢの一撃が篠ノ之さんの打鉄のシールドエネルギーは削りきつた。

!!
わたくしの勝ち、ですわね！ これで一夏さんと二人つきりの訓練はいただきですわ

一夏さんもわたくしの華麗なる勇姿を見て、その、ほ、惚れ直してくださつてはるはず
です、し……？

あ、あら？ 一夏さんはどこに……？ つて、いらっしゃらないつ！?
「し、篠ノ之さんッ！ 一夏さんはどこに行きましたの！？」
「は？ 一夏ならそこに……い、いない、だと！？」

慌てて篠ノ之さんに訊いてみるものの、どうやら彼女も知らないらしい。
すぐに目配せをして、二人で同じアリーナを使っていた人達に訊いて回る。
するとすぐに原因が判明する。

「お、織斑先生ですの……？」

「くつ、職員会議だからと油断し過ぎたか……！」

こういうのをこちらでは“鳶に油揚げ”と言うんでしようね。
それにしても一夏さんも一夏さんですわっ！

わたくしの試合を見ないだけでなく、ほ、他の女性と一緒にいなくなるなんて……ツ
！」

「うう、せつかく勝ちましたのに……ひどすぎますわ！」

「こうしてはおれんつ！ オルコット、一夏を探しに行くぞッ!!」

「言われなくともっ！」

急いで更衣室へ向かう篠ノ之さんの後を追う。

……やはり目下 最大の敵は織斑先生と言うわけですわね。

ですが、負けまられせんわ。それに相手が強ければ強いほど燃えるというもの。

しかし、一人では到底太刀打ちできそうもありませんわね……となると。

〔篠ノ之さん〕

「なんだ？」

「ここは共同戦線といきません？」

〔共同戦線だと？〕

「ええ、わたくし達の敵は同じです。それも残念ながら一人では太刀打ちできないほど

の」

「こうやってわたくし達が争っていても、互いのためになりません。

「なるほど、織斑先生を打ち破るまでは利害は一致している、ということだな」

「はい、どうです？」

「いいだろう。だが、私は一夏を渡すつもりはない。織斑先生にも、無論お前にもだ」「ええ、構いませんわ。わたくしだって負けるつもりなど毛頭ありませんもの。では、よろしくお願ひしますね、『筈さん』」

「！……ああ、よろしく頼む、セシリア」

ふふつ、織斑先生……一夏さんは絶対に渡しませんわ。



明けて翌日、案の定 昨日の事について二人にねちねちと嫌味を言われ続ける羽目になつた。

文句は千冬姉に言つて欲しいんだが、なんて言い訳が通じるはずもなく機嫌を取るのに苦労した。

そんな俺なんだが夕飯を食べないで、時間になつたら学食に来て欲しいと言われてやってきたんだが――

『織斑君おめでとーー!!』

到着と同時に、ぱんぱんっとクラツカーチの音が鳴り響き、少し遅れて色鮮やかな紙テープが俺の頭に降り注ぐ。

どうやら、今日はクラスの皆が俺の代表決定を祝うパーティーを開いてくれたようだ。

クラス代表が決定したのって先週の始めるんだが、今更やるんだなって突つ込みはやめておこう。

何だかんだで嬉しいしな。

『おりむークラス代表決定おめでとおパーティー』

学食の壁には誰が書いたのか一発で分かる紙が張つてある。

なぜ文体までのほほんとしているんだろうか、のほほんさんは。

「どうぞ、一夏さん」

「セシリア！ 拠け駆けは許さんぞッ!! 同盟はどうなつた！」

「あら、筈さん。あれは織斑先生にしか言及していません。つまり、織斑先生がいない今

わたくしが何をしようと問題ないですか

「貴様、最初からそのつもりで……！」

「……俺を挟んで喧嘩するなよ」

いつの間にか名前で呼び合つてゐる二人は、何故か知らんが言い争つてゐる。

なるほど、これが喧嘩するほど仲がいいと言う奴か。

などと若干関係ない事を考えてる俺を他所にヒートアップしていく二人。
誰か止めてくれなハカ？ 他のクラスメイトに水を向けてみるも

「あははー、無理ですねー」

「馬に蹴られる趣味とかないし」

「むしろ織斑君が蹴られるべきじゃない?」

なんですか

俺だって馬に蹴られる趣味はないぞ。 つていうか、馬に蹴られるのが趣味つてどんな奴だよ。

ま、せつかくのパーティーなのにこんな事で台無しになつてもしようがない。さつさと止めようと思っていたら、その前に止めてくれた人がいた。

「はいはーい、喧嘩はその辺にして頂戴。これからみんな大好き新聞部の取材が始まるわよー」

「そ、そう言う事だから、篠ノ之さんもオルコットさんも喧嘩はやめよ？ ね？」

「そういう」とでしたら……」

まゆずみかおるこ

二人の喧嘩を止めたのは新聞部 副部長 黒薫子先輩とのほほんさんの友達のかなりんだった。

ちなみに、なんで俺が上級生である黒先輩を知つてゐるのかと言うと、入学当初から俺の事を突撃取材でーす！ なんて言いながら度々取材に来ていたからだ。

まあ、取材に来た時には大抵千冬姉がいたから門前払いだつたんだけど。
というか、かなりんも新聞部だつたんだな、知らなかつた。

「あら、かなちゃんはウチの部の一年のエースなんだから、知つておいて貰わなきや困るわ、織斑君」

「あの、先輩、エースっていうか、私以外に誰も入つてもらえなかつただけ……ひやんつ？」

「すとーつぶ！ ジャーナリストは余計な事を口走っちゃ、やつていけないのよ？」

「は、はあい……あう、お尻触られたよお……」

「よしよし、かなりんはがんばったよー」

「ぽふぽふとのほほんさんに頭を撫でられて慰められている。

そうだと、上司のセクハラにも負けずに頑張るんだ、かなりん！

俺とのほほんさんは応援しているぞ。

そのセクハラ上司はとくに、涙目になつてかなりんの事など全く気にした様子も

なく、ずずいと俺にボイスレコーダーを近づけてきた。それでいいのか、副部長殿。

「ま、それはともかく今度こそ取材を受けてもらえるかしら？」

「はあ、手短にお願いします」

「よろしい。ではではぶつちやけクラス代表になつたお気持ちをどうぞ！」

「あー、みんなの期待を裏切らないように頑張ります？」

「なぜ疑問系なのだ」

横から箒のツツコミが飛んでくる。

うつさい、別にいいだろ。いきなり言われても、ぱつと思いつかなかつたんだよ。

「ええ、普通すぎてつまんなーい。

もつとこう『オラ、つえー奴と戦えるなんてわくわくすつぞ！』とか『This is why...』とか。

「先輩は俺をどういう奴にしたいんですか……」

ただのイタイ奴じやねーか。

「ま、いか。適当に捏造しとけば

「よくないですよ！ メディアの腐敗をここに見た!!」

「まあ、なんて言い草なのかしら！ 伝統ある私達の新聞部のモットーは清く正しい捏造よ」

「最後の言葉で前半の言葉が塗りつぶされた！」

「疲れる……なんで俺はこんなにツッコミをしてるんだ。散々俺に突っ込ませておいて、黛先輩はセシリ亞の方にインタビューしている。切り替えが早いな、おい。

何か向こうでもセシリ亞怒らせるし。本当に自由だな、あの先輩。

「——ですか！　わたくしは別にツ！」

「はいはい、ちよろいちよろい。ちゃんとその事は新聞に書いてあげるから」

「だから、書かないでくださいツ！」

「あ、そうだよね。そーゆーことはちゃんと自分で言いたいもんねー。ま、それはともかくちよつとそこに織斑君と並んでよ、一緒に写真とるから。織斑君の写真はイイ値段で売れるんだよねー」

「おい、何勝手に売ってるんだこの人！　というか、いつ撮られた!?」

「なんて思つてると、いつの間にか立ち直つていたかなりんが数枚の写真を取り出した。

「あ、ちなみにコレがその写真だよ」

「……完全に盗撮じやんツ！」

「あ、やつぱりそうなんだ……」

全部カメラに目がいつてないし！ どうやつてこんな角度から撮ったんだよ、これえええツ？

かなりんの話によるところらは定期的に売り出されているらしい。

I S 学園がある種の治外法権だからって肖像権まで無視されるのか！？ 絶対、販売会の場所と時刻を千冬姉にリークしてやる。

「つたく、とんでもない先輩だな、あの人は。とりあえずその写真は返して……」
「……（すつ）」

制服の内側にしまわれた！

えへへ、とか笑つて誤魔化さないつ！

「ほらほら、織斑君も早く並んで並んで」

「くつ、分かりましたよ」

「な、何でそんなに不満そうな顔をしてますのツ！？ そ、そんなにわたくしと一緒に写るのがお嫌ですか……？」

「あ、いや、そんな事はないぞ」

「で、でしたら、もつとこつちに寄つてくださいつ」

「あ、おいつ！ ちよ、ちよつと近すぎないか？」

「こ、これくらい祖国では普通ですわつ！」

セシリ亞との距離はゼロに等しい。つーか、腕を組んでる。
さつき、黛先輩は握手してるのがいいって言つてたろうが。

「あ、そつちでもいいや。捏造のし甲斐がありそうな、一枚になりそうだし
「聞き捨てならないセリフが聞こえたんですけど！」」

「そんな事言つてももう遅ーい。はい、1+1はー？」

『『2い!!』』

——ぱしやり。

“みんな”が声を揃えてピースサインをする。

俺とセシリ亞のやり取りの合間にみんな後ろに回つて、一緒に写っていた。

「あ、あなた達い!!」

「抜け駆けは許さん」

「ふふふ、セシリ亞だけにいい思いはさせないわよー」

「いいじやない、みんなの思い出になつて。思い出はプライスレスなのよ」

セシリ亞の抗議の声も、箒を筆頭としたクラスメイト達によつて丸め込まれてしま

う。

おおう、苦虫を噛み潰したような顔になつてゐるぞ、セシリ亞。

「で、でしたら、先輩もう一枚つ、今度こそ一夏さんとのツーショットで！」

「させるか馬鹿者」

パーンッ!!

毎度おなじみの音が学食に響く。

我等が千冬姉の登場だ。いつもながら唐突に現れるなあ。

そして、その千冬姉の登場にあんなに奔放に振舞つていた黛先輩がびしりと固まつた。

「お、織斑先生……あははー、どうもー」

「ほう、やはりここにいたか、黛。今時間は20時過ぎ……ここにいる一年は許可を取つた上でここに居るからいいが、お前は取つてないな？ 喜べ、2年の寮長から直々に御話があるそうだ」

「うぐつ……分かりました」

おおー、あの黛先輩がたじたじだぜ。さすが千冬姉。
というか、なんともいいタイミングで来たな。出待ちか？

「あ、私が呼びに言つて來た」

「うむ、相川はいい仕事をしてくれた。これからもこのような事がある場合はすぐに私を呼ぶように」

「はい、わかりました！」

「うう、相川さんも敵ですわ……」

何故かセシリアが落ち込んでいる。そんなに写真に写りたかったのか？

別に言つてくれればいつでも撮つてやるのにな。

「じゃあ、私はこれで失礼しますね……とほほ、あの先生説教長いのよねえ……」

「ああ、黛 少し待て」

「はい？ なんですか？」

帰ろうとしていた黛先輩を呼び止め、千冬姉が俺の隣までやつて來た。

そして――

「一枚撮つてから帰れ。写真ができたら、ネガごと渡すように」

『なあつ!?』

「了解ですッ！ はい、チーズ!!」

ぱしやりとな。

そんなこんなで千冬姉との写真が撮られた。

そういえば、千冬姉との写真なんていつも振りだらうな……ここ数年は千冬姉が忙しくて一緒に撮つてないし、千冬姉の成人式の時に撮つたのが最後か？

そもそも、アルバムの類がそんなにないからなあ。その代わり、東さん辺りはたくさん持つてただけど。

ま、この3年は近くにいるんだし、また二人で定期的に写真でも撮るか。

今度は筈やセシリヤ達も一緒に。

「さて、用が済んだから私は帰るが、あまり羽目を外しすぎるなよ。場の雰囲気に当てられて、などと言つて一夏に手を出そうものなら……覚悟するんだな」

『わ、わかりましたー……』

皆が返事をするのを確認してから、千冬姉は去つていった。

そんな心配しなくとも、俺になんかするような子はいないだろ。

「ふふふ、前から怪しいと思つてたけど、私の取材を妨害してたのはこういうことだつたのね……。ネガを取られちやうのは痛いけど、このネタがあればまだ戦える！　こうしちゃいられないわ、それじやあ、みんなは続きを楽しんでね！」

「あの、先輩、私はどうしたら……？」

「ん？　ああ、かなちゃんも参加しちやつていいよ。でも、明日はこの事について裏づけの取材するから放課後すぐに部室に集合ね！」

黛先輩もそう言い残して、走り去つていく。

ホントに嵐のような人だつたな、場を搔き回すだけ搔き回していなくなるとか。

他の皆もポカンとしてるないじやないか。

その後は、普通にパーティーを再開して21時過ぎにお開きとなつた。ちなみにずっと落ち込んでいたセシリアだが、今度一緒に写真撮るかと言つたら一気に機嫌が治つた。

若干情緒不安定なんじやないだろうか、コイツ。ちゃんと気遣うようにしてやろう。そんな事を考えてたら、今度は箒が不機嫌そうに横から脇腹を抓つてきた。

……お前もか。

なんで俺が箒達の心のケアまで考えなきやならんのだと頭を抱えていた頃に、1年寮でセカンド幼馴染が叫んでいたことを知るのは次の日の事だつた。



「なんで千冬さんと一夏が一緒の部屋なのよッ！ おかしいでしょ!?」
 「えつ、なんでつてそう言う関係（姉弟）だからでしょ？」
 「ふつざけんじやないわよーっ！ あたしとの約束はどうしたのよ!!」

「知らないわよ……あ、私は窓側のベッド使つてるから隣のベッド使つてちょうどだい」「フフフ、やっぱラスボスは千冬さんだつたつてわけね……！」

第6話

パーティーの翌日、S H Rも終わり授業の準備をしている俺にクラスの子が声をかけてきた。

「ねえねえ、織斑君はもう2組の転校生のこと聞いた？」

「転校生……？」

まだ4月も終わってないこんな中途半端な時期にか？
どうせなら入学式に合わせりやいいものを……。

「んー、何でもその娘、代表候補生なんだつて。中国の」

「あら、今頃になつてわたくしの危ぶんでの事かしら？」

「あはは、セシリヤアつておもしろいねー。座布団をあげよう
「ちよつと！」

セシリヤアの強気発言が軽く流される。

というか、イギリス人のセシリヤアに座布団をあげるつて言つても意味分かんないだ
ろ。

でもまあ、確かにセシリヤアの事を危ぶんでつてだけじゃ根拠としては弱いな。

のほほんさんが言つてたけど、セシリアの他にも代表候補生はいるらしいし。
そもそも、危ぶむんだつたら最初から入学させるだろ。

「ふん、どちらにせよ隣のクラスの話なのだ、そう騒ぐほどの事でもあるまい」
などと身も蓋もない事を言うのは筈である。

さつきまで不機嫌そうに外を見てたくせにいつの間にこっちに来てるんだ、お前は。
……機嫌が悪そなのは変わつてないけど。

「あら、不機嫌そうですわね、筈さん。何かいい事でもあつたのかしら？」

「……別に、どうやつて昨日の件をどう妨害してやろうかと考えていたまでだ」

「……昨日の件？」

何かあつたつけ？

途中で千冬姉達が乱入したけど、極普通のパーティーだつた気がするが。

「なつ、そんな事させませんわッ！　だいたい既に成立した約束ではありますか！
往生際が悪いですわよ！」

「貴様がそれを言うか！　散々人の約束を横から邪魔しておいて!!」

「なあ、さつきから何の話をしてるんだ？」

どうにも話が見えなくて二人にどういうことなのか訊いてみる。
が、すぐに一蹴されてしまう。

「い、一夏さんには関係ありませんわっ！」

「そ、そうだぞ！　べ、別に一夏との写真が羨ましいわけじゃないんだからなッ!?」

「そうなのか？　だつたら、筈は一緒に撮らなくてもいいんだな」

「へつ？」

「いや、のほほんさんがな？　セシリ亞とだけツーショットはするいつて言うから一緒に撮る事になつたんだよ。

「んで、他にも撮りたいつて子がいるからついでに筈も……つて思つてたんけど、余計なお世話」

だつたな、と最後まで言うことは敵^{かな}わず、ものすごい勢いで筈に遮られる。

「い、一夏がそこまで言うなら仕方ないな！　一緒に写つてやろうではないかッ!!
まつたく、仕方のない奴だな！」

仕方のないのは筈だろ……。支離滅裂じやねーか。

見ろよ、皆もそれはねーよつて顔してるぞ？

何故か一人で満足氣にしている筈は気付く事すらしないでないし。

まあ、指摘するのは竹刀が飛んできそうちからやめよう。

千冬姉に学習能力がないとか言われるけど、ちゃんと学習するんだぜ？　俺も。

「そ、そんなのダメですわッ！　これは最初にお願いしたわたくしの特権ですのにツ！」

「ふん、そんな特権などどこにもない。それに私は、『一夏から』頼まれて写真を撮るのだ。『自分から』頼まねばならないお前とは違うんだ」

「おい、俺がいつ頼んだ」

「本当に都合のいいオツムをしていらっしゃいますわねッ！　いいですわ、前回のよりも鮮烈に明確に敗北を味合わせて差上げますわッ！」

「ふ、私が二度も遅れを取るとは思わないことだなッ！」

「おい、聞けよ」

フフフと晒いながら視線の火花を散らしている二人。

こつちの話を聞きやしない。

というか、そろそろ授業が始まるから席に帰つた方がいいぞー、次つて千冬姉の授業だし。

なんて俺の控えめな提案も完全に黙殺されたとき、突然ガラリと教室のドアが開き何かが飛び込んできた。

「あ、あんた達いつまでやつてんのよッ！　完全に入るタイミングを失つちやつたじやないッ！」

どこかで聞いた事のあるような怒声が聞こえた。

でも、あいつは中国に帰つてつたはずなんだけどな……？　と首を傾げながらも、ド

アの方に目をやる。

果たして、そこには俺が予想した通りの人物が立っていた。

「鈴？」

「久しぶりね、一夏つ！」

そこにいたのは、俺のセカンド幼馴染。

鳳鈴音ファンリンインがそのトレードマークたるツインテールを揺らしながら、声をかけてきた。
……自分で言つておいてなんだが、幼馴染をファースト、セカンドって言うのも何か
変だな。

「おう、久しぶりだな……でも、とりあえずそこをどいた方がいいぞ」「
何よつ、せつかく久しぶりに会つたのにどけだなんてご挨拶ねッ！」

頬を膨らませて、そんな事を言つてくる鈴。

いや、そういうことじやねーよ。

お前が入り口塞いでいる所為で山田先生が入れないで困つてるんだよ。

なんて俺が口に出す前に、山田先生がいつものようにやんわりと注意する。

「あ、あの、あなたは2組の鳳さんですよね？　もうすぐ授業が始まりますから教室に戻つてくださいね」

「へっ？　……あ、ああああああッ！」

山田先生がそう言うと、鈴は慌てて隣の教室に帰つていった。
結局、何しに来たんだアイツ？

「えーと、とりあえず授業を始めますね。皆さん、席についてください」
それを聞いて、ぞろぞろと皆が席についていく。筹とセシリ亞を残して。
……皆が席についてるんだから、お前らも早く座れよ。

「一夏さん？ 後でさつきの方との関係を洗いざらい吐いてもらうのでそのおつもり
で」

「うむ、逃げたら……」

『分かつてるな（ますわね）？』

一人してギロリと俺を睨んでから、それぞれの席へと帰つていった。
お前らさつきまで睨み合つてたのに、息ぴつたりだな。

あと、女の子がそんなドスの利いた声を出すなよ、山田先生もおびえてるじゃねーか。
……というか、千冬姉がいない。

この I.S. 操縦理論の授業は千冬姉の担当だつたはずなんだけどな。

「山田先生、質問です」

「はい、どうしました？」

織斑君

「織斑先生はどうされたんですか？ この授業って織斑先生の担当でしたよね？」

「はい、そうなんですけどね……私もよく分からないんですが、織斑先生の机の上に用事があるから先に授業を進めておいてくれって書き置きが残されてたんです」

「なので私がきました……と山田先生。

仕事に関しては一切手を抜かない千冬姉にしては珍しいな。

何かあつたんだろうか?

そして、代理の山田先生の授業が始まつたわけだが、結局その授業の間に千冬姉は戻つてくる事はなかつた。

いつたいどこで何をしてるんだろうな、俺の姉上様は。



私、黛 薫子は空き教室で織斑先生と相対している

無論、昨日の件についてだ。いきなり呼び出されて驚いたけど、これはチャンス。

織斑先生と織斑君。二人の関係についてじっくりと訊かせて貰おう。とつておきもあることだしね。

ふふふ、こういう機会を物にしてこそ一流のジャーナリストなのよ。

「……それで、例の物は用意できたのか？」

「ええ、抜かりなく。それで、物は相談なんですが……ネガだけは勘弁してもらえません？」

「言わなくても分かつてるだろう？ 答えはノーだ」

まあ、こうなる事は分かつてたし、本番はここからよ。

「ちえつ、じゃあその代わりに取材させてくださいよー」

「言わなかつたか、私は身内ネタでからかわれるのが嫌いだ」

「痛ツ！？ 何もはたくことないじやないですかあ……。だつたら、この写真も付けるつて言つたらどうです？」

「……教師を買収しようとはいいで胸だな」

懐から、一枚の写真を取り出す。

勿論、織斑君の写真。それもセシリリアちゃんと戦つてるときに見せたキリツとしてる顔だ。

これが撮れただけでも授業を抜け出した甲斐があつたつてものだわ。

しかるべきところで売り出せば、軽く諭吉先生がご登場するお値段になるんでしょうけど、今から手に入る情報の事を考えれば惜しくはない。

これさえあればブラコンまつしぐらの織斑先生なら容易く調略できるわ！

「うふふ、ジャーナリストは記事のためなら悪魔にも魂を売るの（ひゅつ）で……って、あれ？ 写真が?!」

「一つ、教えておいてやろう……人質を目の前に晒したまま交渉するのは無謀だ。このようにすぐに奪われてしまうからな」

「か、勝手に生徒の私物を取り上げないでくださいよつ!?」

「確かに、この写真はお前の私物だろう。だが、この被写体になつて的一夏は私の物だ。つまり、これを私が取り上げてもなんら問題はない」

ひつどい暴論なのに妙に説得力があるんですけどッ！？

くつ、さすがブリュンヒルデ……！ 現役を引退したからつて侮つていたわ。
何とか反撃の糸口を見つけないと——そんな甘い考えを抱いていた時期が私にもありました。

「さて、黛……これだけではないだろう？ 相川の報告によると定期的に売り出されて
いるらしいからな」

……バレてるうう！？

なんか冷や汗が止まらないんですけど！

こ、ここは逃げるしかないわ！ 三六計逃げるに如かず、昔の人はいい事言つた！

ありがとう！ 貴方のおかげで私はまだ戦えます！

——でも

「……あ、 私 授業があるのでこれで失礼します！」

「逃がさん」

逃げるタイミングも教えて欲しかつたナ一……

そして、私の持つていた織斑君に関する資料は全て織斑先生に回収されてしまった。
ブラコン恐るべし……今週のメインはコレでいきましょう。

反省？ なにそれ、おいしいの？



昼休み。

学食に向かっている俺は、 篠達に謂れのない罪で責められている。

「お前のせいだぞっ！」

「一夏さんのせいですわつ！」

「何でそうなるんだよ……」

この二人、午前中の授業で山田先生からそれぞれ5回ずつ注意を受けているのである。

セシリ亞の席は教室の後ろの方だから正確には分からぬが、こいつ等は山田先生の授業をほつたらかしにして百面相しながらブツブツ呟いていたのだ。

今日の授業、本当に千冬姉がいなくてよかつたな……いたら今頃頭部が陥没してるぞ。

まあ、そんな籌達の文句を聞き流しながら学食に着いたわけなんだが、券売機の前にちつこいのが立っていた。

……さつきもそうだつたけど、なんでわざわざ人の邪魔になるとここに立つてゐるんだ、お前は。

「遅いじゃない、一夏。あたしがどんだけ待つたと思つてんのよ。あんたの所為で麵が伸びちゃつたじやないッ！」

「すいと、こつちに盆を向けてくる鈴。

勝手に待つといつて理不尽じやね？　と、口に出すのは簡単だが言つてしまふとややこしい事になるから言わない。

「ふんつ、勝手に待つてたくせになんて言い草だ。それに、一夏は私と食べるのだ、関係ない者は退いて貰おうか」

「ちよつと!? 勝手にわたくしを省かないでくれません!?!」

ええー、それ言つちやうのかよ……俺 言うの我慢したのに意味ねーじやん。

そして勝手に省かれたセシリアは箸に食つてかかっている。

仲がいいのか悪いのか一度はつきりさせておいて欲しい……ぎやあぎやあと姦しく言い合う二人を見ながらそんな事を思う。

ふむ、二人なのに姦しい……なんつって。

ま、くだらない冗句はここまでにしてとりあえずはメシだな。

今日は何にしようかなつと……：

「ね、ねえ、一夏?

アタシが言うのもなんだけど、あいつ等放つておいていいの?」

「ん? ああ別にいいだろ、いつもの事だし」

「……相変わらずフラグ建てまくつてんのね、コイツ」

もう、いつもの和定食もいいけど、こつちの中華定食もいいな。

鈴を見たら久しぶりに酢豚が食いたくなつた。鈴の親父さんの酢豚、うまかつたなあ。

……ん? そういうや鈴と酢豚で何かあつたような気が…………はて? なんだつたつ

け。

まあ、いいか。思い出せないんなら、大した事でもないだろう。

そのまま中華定食を選び、食堂の“お姉さん”からお盆を受け取る。

心なしか酢豚の量が増えている。いつもは平等なのにおかしな事もあるもんだなー

(棒)

受け取ったお盆を持って適当に空いてる席に鈴と座る。

「朝にも言つたけど久しぶりだな、鈴」

「そうね、中2の冬だったから一年ぶりつてとこかしら」

「だな。それにしてもいつこつちに帰つてたんだ? 連絡ぐらいしてくれりやいいのに」

「まだ帰つてから2日と経つてないわよ。あつちでバタバタしてたから、入学式にも間に合わなかつたんだし……」

「ん? って事は、朝言つてた転入して来た中国の代表候補生つてお前の事だつたのか」「それぐらい気付きなさいよッ!」

なんだ、俺が悪いのか?

なんつか、昔から一緒にいたせいであんま中国人つて感じがしないんだよな。

「でも、たつた1年で代表候補生つてすごいよな」

「べつ、別にたいしたことないわよ。それよか、あんたの方こそいつの間にかIS乗れるようになつてるし、そつちの方が驚きだわ」

なんて事を話しつつ、思い出話に花を咲かせているとようやく篝たちが合流して來た。

そして、席につくと同時に鈴について訊いてくる。

「それで、そろそろお前達がどういう関係か説明して欲しいのだが?」

「そうですわつ! も、もしかしてお二人はつ、付き合つていらっしゃるのかしら……!?

「べ、べべ別にあたし達はそんなんじゃ……えへへ」

セシリアの質問にわたわだと手を振りながら答える鈴。なんでそこで照れるんだ?

「そうだぞ、どこをどう見りやそうなるんだよ。ただの幼馴染だぞ」

「…………ツ」

「…………なんで睨むんだよ」

「うつさいわねツ! 何でもないわよツ!!」

どう考えてもうるさいのは鈴の方だろ、なんで怒つてるんだよ。

勝手に怒つてる鈴を他所に篝から怪訝そうな声があがる。

「…………幼馴染、だと?」

「ああ、そう言えば箒とは入れ違いになつたんだつけ。小4の終わりに箒が引っ越してから、鉈が転校して來たんだよ。正確には小5の頭だけど」「ふうん、つてことはあなたが篠ノ之さんなんだ……初めてまして、よろしくね？」

「ああ、こちらこそだ……ッ!!」

二人がすっげ一笑顔で握手している。おお、ファーストセカンドの間に友情が芽生えた！

ギリギリって音と二人に浮かんでる青筋は幻聴および幻覚に違ひない。

昨日の疲れが取れないせいでな、うん。

俺は何も見てないし、聞いてもいなイぞー。

そんな（見た目だけは）仲よく握手している二人に、またしても省られたセシリ亞が食つてかかつた。

「わ、わたくしを置いて勝手に盛り上がらないでもらいますッ!?」

「……誰？」

「イギリス代表候補生のセシリ亞・オルコットですわッ！　代表候補生なら他の国の人候補生の事ぐらい知つておきなさいなッ!!」

「いや、あたし別に他の国の事とか興味ないし」

「それはそれでどうなんだ、もつとアンテナ張つとけよ代表候補生」

あつけらかんと言い放つ鈴にツツコミを入れる。

「どうか、セシリ亞が怒りのあまり、顔を真つ赤にしてプルプル震えてるんだが。どうどう、落ち着けー。」

「それに、知らなくても戦つたら勝つんだから何の問題もないわ。ほら、アタシつて強いし?」

いや、知らねーよ、そんなこと。どつから来るんだ、その自信は。

まあ、代表候補生になつたんだから、相応の実力はあるんだろうけど……相変わらずのビックマウスだ。

「ま、でも残念だつたな。もう少し早くこつちに来てれば、クラス代表になれたかもしないのに」

「なつたわよ?」

「は? なに言つてんだよ、クラス代表の選考は先週までだつたはずだぞ?」

「知つてる。だから、ウチの代表の子にちょーっとお願ひして代わつてもらつたの」
……誰だか知らないが、せつかく代表になつたのに不憫だなあ。

コイツの場合、お願ひという言葉に脅迫というルビが振つてあるからな。

まつたく、もうちよつと気を遣えよ、日本の謙虚な心を忘れたのか。

「ところで、アンタもクラス代表になつたのよね？」

「ああ、成り行きだけな……ん？ ということは今度の代表戦で鈴と当たるかもしけないってことか」

「！ そ、そうよ？ その時は手加減なんてしないんだからねッ！」

「おお、当たり前だろ？ 俺も全力で行くからな」

前回のセシリヤの時は負けちまつたけど、あれからも千冬姉に扱かれてるんだ。負けるわけにはいかない。

そんな事を思つてると、篝が何かぼそりと呟いた。

「ふん、どうせ一夏を倒せば自分の強さに惚れるとでも思つているのだろう？ その浅はかさは愚かしいな」

「ななな、何言つてんのよつ！？ そんなわけないじやにやいつ！」

「そうですわッ！ 戰うことぐらいで惚れるなんてどうかしてますわッ！」

「……まず、お前は鏡を見るべきだな」

「？ どういうことです？」

「……そんなどからちよろいなどと言われるのだ」

「いつわたくしがちよ、ちよろいなんて言われたんですのツ!? ちよろくなんてありま

せんわー！」

「ちよつと！ あたしを無視すんなーツ!!」
があーっと吠える鈴。

さつきとは立場が逆になつたな。

それにも、全く話に入れない。

コレが噂のガールズトークと言う奴か。

こんなに騒がしいイメージはなかつたんだが、現実はこんなもんらしい。

……さて。

「(バ)ちそうさまでした」

『『へつ？』』

「お前らもさつさと食べないと授業に遅れるぞー」

三人の前に置いてある昼食はその量を全く減らすことなく、冷めてしまつていた。
まあ、セシリアのサンドイッチは問題ないけど、鈴のラーメンなんて悲惨だ。
麺が伸びきつて、スープを全部吸つてしまつてる。

料理屋の娘だけあつて、食事にはうるさいのに……珍しい事もあるもんだ。

「な、なんで教えてくれなかつたのよ?」

「いや、何か楽しそうに話してたから、水を注すのも悪いと思つてな」

「なんて無駄なとこに気を遣うのよ、アンタは!! もつと気を遣うべき所があるでしょ
うがッ!!」

「そうか？ ま、次 実習だから俺は先に行くぞ」

「あたしだつて同じよおーっ!!」

まだ後ろの方で鈴がぎやあぎやあ言つてるが、俺の場合 着替える場所が違うから早く移動しないと千冬姉スイングが飛んで来るんだよ。悪いな。

それについて、鈴も文句言う暇があつたら食べればいいのに。

篝たちは黙々と食べてたから大丈夫だろうけど……。

そして、ウチのクラスと合同であつた実習に遅刻した鈴は、頭に出席簿が容赦なく降り注ぐ事となつた。

～今日の鈴さん～

遅刻したせいで千冬さんからきつつい一撃を貰つてからしばらく授業も終わつて、着替えているところだ。

「うう、まだ頭が痛い……年々威力が増してるように気がするわ……」
「遅刻したアンタが悪いんでしょ？ 自業自得じやない」

同室になつたティナ・ハミルトンが呆れたように言う。

くう、正論過ぎて言い返せないじやないつ。

もうつ、これも全部一夏のせいなんだから！

……そういえば、結局あの約束の事訊けなかつたなあ。

(次に会うときには今よりもずつと、ずっと料理の腕上げて……そしたら、ま、毎日酢豚作つてあげるんだからねッ！)

(おう、楽しみにしてるぜ)

……覚えてる、わよね。

今日だつて、昼食に酢豚食べてたし……。あ、も、もしかして、あれつて遠まわしなアピールだつたのかしら……？

一夏は約束をちゃんと覚えてて、あたしの事を待つててくれたつて事……？

[...]

「どしたの、鈴？ 顔真っ赤になつてゐるわよ？」

——なんでもにやいわよ！」

(何、この可愛い娘……！)

よ、よし、女は度胸！

こんなところで悩んでる間に他の奴等に搔つ攫われるわけにはいかないわ！放課後になつたら、あいつの所に行つて……約束の事について訊きましょう。そしたら、私と一夏は晴れて――

「ティナ、あたしやるわ！」

！……そう、やるのね。大丈夫よ、貴方ならやれるわ！」

あ、ありがとう……」

ふふふ、一夏！ 待つてなさいよっ！！

この時のアタシは一夏が朴念神であることや、まだ倒さなきやいけない人がいることも完全に忘れて、ただ浮かれていたのだった。

第7話

5月に入つての最初の休日、俺は外出届けを出して帰宅するついでに友人である五反田 弾の家に顔を出していた。

「で、何しに来たんだよ。このナチュラルボーンフラグメイカーめ」「なんだよ、その称号は……」

「ほん、女の園に迷い込んだ男の敵にはちょうどいいだろうが」
俺だつて好きで迷い込んだわけじゃねーよ。

「どうせそんなこと言つても聞きやしないんだろうけどな、コイツは。
『そんなことより、今日は相談があつて来たんだよ』

「あん？ 別に電話ですりやいいだろうが。おい、テメエもしかして……！」
「ん？」いや、ただ家に物を取りに帰るついでにな

主に千冬姉の服とかだけど。

なかなか戻る機会がないから今の内に夏物を準備してたんだ、と言つてみるもの弾はどうにも話を聞いていないようだ。

おーいと、目の前で手を振つてやると突然、激昂し始める弾。

「蘭に会いに来たんじやねーだろうなあツ?! さ・せ・る・かあああああああつ!!」
 「ちよつ、おま、やめ……ツ!」

ガクガクと俺を揺さぶる弾。

ちなみに、蘭とはコイツの妹で俺等の一つ下の中学3生。
 この春、某有名私立の生徒会長に就任したそうな。

それで、そんな妹を持つたコイツは超が付くほどのシスコンだ。

弾の家に遊びに行つて初めて蘭と会った時なんて、やれ色目を使うんじやねえ!
 とか馴れ馴れしく話すな! とか宥めるのが大変だつたぐらいだ。

……それについても、コイツを見てると既視感を覚えるのは何故だろうか?
 で、いい加減反撃してもいいよなツ!

「やめんかつ! このシスコンツ!!」

「がふつ!?

揺すつて来る勢いそのままに頭突きを喰らわせる。

額がひりひりするも、ようやくシェイクから解放された。

相変わらず蘭の事となると急に戦闘力を増すな、コイツ……

とりあえず、さつさと本題に入るとする。

「いや、だから普通に相談があつたから来たんだよ」

「……まあ、そういう事にしておいてやるよ」

額をさすりながら不機嫌そうに言う。まつたく、しつこい奴だ。

ま、それだけ蘭の事が大事なんだろう。その家族を大切に思う気持ちは俺にもよく分かる。

俺だつて千冬姉に悪い虫が付いたらと考へると……一も二もなく雪片でぶつた斬るかもしだん。

「んで？ その相談つてのは何なんだよ」

「あー、それなんだけどな……お前鈴の事 覚えてるだろ？」

「鈴？ おお、覚えてる覚えてる。いつだつたか、中国の代表候補生になつたとかテレビでやつてたの見たぜ。ん？ つーことは、アイツ I S 学園にいんのかよ」

「ああ、この前 転入して來たんだよ。それでな、何か知らないけどアイツを怒らせちまつたみたいでさ……」

その理由が分からなくて、俺に隠れて内緒話をするぐらい仲がよかつた弾に訊きに来たのだ。

でも、付き合つてるとかではなかつたらしい。というか、前に「付き合つてるのか？」って訊いてみたら鈴にぶつ飛ばされた記憶がある。

抉るように俺の頸に吸い込まれたあの拳。宙を舞う俺。

あの日の空は、とても近くに見えた。

「あーあー、なんとなく見えてきた。まあたお前の朴念仁スキルが発動したんだな」「なんだよ、その人聞きの悪いスキルは……」

「事実だろーが。それで？ 何やつたんだよ』

くつ、他人事だと思いやがつて……！

あと、ニヤニヤすんな！

ぶん殴りたくなる衝動を抑えて、その時の事を思い出しながら説明する。

◆
鈴と再会した日の夜。

鈴が突然俺の部屋……と言うか千冬姉の寮長室に尋ねてきた。

「い、一夏……あのねつ！ その、約束の事なんだけど！」

「約束……？ 何かしてたつけ？」

「い、意地が悪いわねツ……ま、まあ、そりゃあ気付かなかつた私も悪いんだけどさ」

いや、だから何の話だよ。

勝手に自己完結されても分からねえよ。

そんな俺の心情など知らず、鈴は顔を赤くしながら俺の事をチラチラと上目遣いで見てくる。

……そんな期待したような顔をされても、分からないものは分からない。

さて、どうしたものか……と頭を悩ませてる俺を見かねたのか、こちらの様子を見ていた千冬姉が助け舟を出してくれた。

「一夏、あの事じやないか？　お前、酢豚がどうとかと言つて喜んでいただろ？」

「！」

千冬姉の助言に驚きつつも、全力で頷く鈴。

ええと、酢豚、酢豚……と。

「……ああ、思い出した！　確かに、鈴の料理の腕が上がつたら毎日酢豚を——」

「！　そうつ、それよ！」

「——奢ってくれるつてやつだな」

「うん！……うん？」

「……（ニヤリ）」

確か小学生の頃だつたか、そんな約束をした気がする。

そういうや今日、酢豚を頼んだ時に何か思い出しそうになつたのはこの事だつたんだな。

「あ、アンタ、いつたい何を……ツ」

「ん？ だから、鈴が料理できるようになつたら飯を奢つてくれるつて約束だつただろ？」

いやー、アレ聞いた時嬉しくてな！ 千冬姉に自慢したもんだぜ！」

千冬姉も「そうか、よかつたな。毎日『ご馳走してくれる』とは、いい『友達』を持つたな、一夏。『友達』は大切にしなければダメだぞ」つて、一緒になつて喜んでくれたのを覚えてる。

心なしか、ご馳走とか友達とかを強調してたような気がするけど……。

「ま、まさか、千冬さん……！ 私の約束を……ツ!!」

「さて、何のことだか

「ん？ 何か違つてたか？」

「くくくッ！ 最ツツ低！ 何でちゃんと覚えてないのよ！ せ、せつかくあたしが勇気を出して言つたつてのに……ツ!! もう知らないツ!!」

最後に「バカ、朴念仁！」と、一気に捲し立てて鈴は部屋から出て行つてしまつた。

……なんか知らんが、怒らせてしまつた事は確からしい。

ちゃんと覚えてない？　つて事はやつぱりどこか間違つてたのか？
 などと、鈴を怒らせた理由についてアレコレと頭を悩ませていた俺には、後ろで「計
 画通り」と晒つていた千冬姉に全く気付くことはなかつた。



なんて事があり、その次の日から鈴は俺が話しかけても露骨に顔を背けたりしてくる
 のだ。

昔つから、こういう事は根に持つタイプだから余計に厄介だ。
 で、俺の説明が終わると弾は何か分かつたのか一人で戦慄していた。

……今の話のどこにそんな要素があつたのだろうか？

「ま、マジで震えてきやがつた……ツ！」　千冬さんは本当に頭の良い御方だな。俺も見
 習うべきか

「なあ、結局　俺はどこを間違えてたんだ？」

「お前、いつ死ぬべきじやないのか？　黒〇号に蹴られて」

「なんでだよ」

あれに蹴られたら原形残らないだろ。ひでぶつてなるわ。

この後、弾はいくら鈴が怒った理由を訊いてもを教えてくれなかつた。で、結局俺はそのまま弾とゲームをしたり、弾の祖父である厳さんがやつてる五反田食堂で昼飯を食べたりと極普通の休日を過ごしたのだつた。

んー、やつぱ男同士つていうのは余計な気を遣わなくて楽でいい。

鈴の問題は何の進展もなかつたけど、リフレッシュできたから良しとしよう。

来週の頭にはもうクラス対抗戦だからな……それまでには何とかしないとマズイ。

何がマズイつて、鈴から愚痴でも言われたのか箒やセシリアまで俺の事をやたら冷たい目で見てくるのだ。

まあ、さすがに鈴みたく無視とかしてくるわけじやないんだけど、精神的につらいものがある。

このままだと胃に穴が開きそうだぜ。

……帰つたら千冬姉に相談してみるか。

千冬姉なら当時の事覚えてるだろうし、何か分かるかもしねない。

そんな事を思いながら、IS学園へ向かうモノレールに乗るのであつた。



一方、その頃の五反田家

蘭が厨房に飛び込んできたのは、食堂の方の手伝いをしているときだつた。

「お兄（にい）！ 何で一夏さんが来てるの教えてくれなかつたのよツ!!」

「ダメだ！ お前にあんなすけこましと会わせるわけにはいかねー!!」

一夏の奴に会いたかつたと食つて掛かる蘭。

くつ、やはりアイツの毒牙にかかつてしまつていたか……相変わらず息をするようにフラグを建てる奴だな。

それさえなれば、気のいい奴だが、それとこれとは全く別問題だ。絶対に蘭は渡さねえッ！

あんな朴念仁のシスコン野郎なんてお兄ちゃん認めないからな！

「うつさいつ！ お兄の馬鹿ッ！ 大ツ嫌い!!」

「なつ……！ き、嫌い？ 蘭が？ 俺の事を……？ ……鬱だ、死の……あだあつ?!」

蘭の痛恨の一言いちげきが胸に突き刺さり、膝から崩れ落ちる俺にじーちゃんから拳骨が飛ん

できた。

年中 中華鍋を振つているじーちゃんの一撃は非常に重い。本当に80過ぎてんのかよ。

「馬鹿言つてねーでさつさと皿洗え。終わつたら、客んとこ行つて皿下げてこい」「何も殴ることないだろじーちゃんっ！」

「いいから手え動かせ」

「はいっ！」

五反田ヒエラルヒー最下層の住人である俺は一夏への呪詛を吐きつつ、必死で皿を洗うのであつた。



試合当日。

ここ、第2アリーナでの第一試合の組み合わせは俺と鈴。

俺と空中で向かい合つてる鈴は、自身のISの主武装である青龍刀？

を構えて ツ

タリ』と笑っている……口元だけ。加えて言うなら、頭には井桁が浮かんでいたりする。

お察しの通り、今日まで何の解決にも至らなかつたのである。

果たして、これから始まるのは試合なのか公開処刑なのか……それが問題だ。

「さあ、一夏。あんたの罪を数えなさいッ！」

「……ひい、ふう、みい……」

「ホントに数えてんじやないわよ!!」

「理不尽な」

そんなふざけた会話はさて置いて、どう戦つたものか……

鈴のISは黒と暗めの赤を基調とした機体で、その名を『甲龍〈シェンロン〉』というらしい。

どうにもアレを連想してしまうな……漢字違うけど。うん、これからあの機体はボルンガつて呼ば……うと思つたけど、鈴の睨みが一層きつくなつたからやめよう。

鈴が手に持つてる青龍刀を見る限り、戦闘スタイルは主に近距離型だろう。

まあ、武装がアレだけとは限らないけど……あの肩の所にある非固定浮遊部位『アンチロック・ユニット』とか怪しいんだが……

まさか、セシリ亞のブルー・ティアーズみたく飛んで来ないよな？ 棘とか付いてる

し、アレぶつけられたらすぐえ痛そうだ。

なんて考えていると、試合開始のアナウンスが。

『——それでは両者、試合を開始してください』

そして、ブザーが会場に鳴り響き、同時に鈴が突っ込んでくる。

そのまま振り下ろされる青龍刀を雪片で防ぐ……が、予想以上の衝撃に弾かれる。

……等といい、コイツといい、その細腕のどこにそんな力があるんだか。

まあ、鈴の場合 I-S の補正があるんだけど。

鈴の青龍刀は両端に歯が付いており、それをバトンの如く振り回し斬り込んでくる。
俺は千冬姉に身体に教えこまれた（強制）三次元躍動旋廻《クロス・グリッド・ター
ン》で回避回避回避イイ!!

「ふうん？ この双天牙月（そうてんがげつ）の攻撃をここまでかわすなんてやるじやな
い」

「こと近接戦での回避だけは負ける気がしない！」

「……なんで泣いてんのよ？」

……泣いてなんかない。

セシリアとの決闘の後、千冬姉は白式の扱いだけじゃなく一層厳しい回避訓練を俺に課したのであつた。

時々、自分の首がちゃんと繋がつてゐるか確かめてしまうのは仕方のないことだと思う。

「ま、でも甲龍の武装がコレだけだと思ったら大間違いなんだからね！」
ぱかつと例の肩のアーマーがスライドし、中央に球体が見える。

そして、その球体が発光した瞬間に見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。

幸いにして、正面に構えていた雪片式型で防げたらしく、ダメージは最小限……が、そ
の一撃で終わるはずもなく。

再び球体が光り、次々とその衝撃が発射される。

「ぬわああああッ!?」

「あーはっはっは!! 殴ッ血K I L L T T !!」

フィールドに爆音が響き渡り土煙が立ち上る。

不可視の砲撃とか卑怯すぎるだろ!?

つか、鈴が滅茶苦茶笑つてるんだが。トリガーハツピ－の氣でもあつたのか、アイ
ツ。

あと、そのセリフが似合いすぎだ。あかいあくま的な共通点が多い所為か。

鈴が放つてきている『龍咆（りゅうほう）』は空間自体に圧力をかけ、衝撃を撃ち出す衝撃砲……って、白式が解析した情報にはある。セシリアのブルーティアーズと同じ第3世代型の武装みたいだな。

射線は直線だけど、砲身すらない上に射角に制限がないため、真下、真上は勿論、真後ろでも全方位射撃可能。

さらに、弾速も速く連射も効くつと……なんだよ、このチート武器。絶対修正されるべきだろ。

と愚痴りつつもかわす俺。千冬姉の訓練様々である。

「よくかわすじやないッ！　でも、それだけじゃ結果は変わらないわよっ!!」

「ぐつ、分かつてるよっ!!」

武装がこの雪片式型のみの俺では圧倒的にレンジが足りないので。このままだと斃り殺される。比喩なしに。

これだからブレオンは……！　などと、千冬姉が聞いたら「お前が未熟なだけだ」と一刀両断にされかねない事を考えながら反撃の手立てを考える。

龍砲を捉えようと、ハイパーセンサーで周囲の空間の歪みと大気の流れとかを探らせてるんだが、察知した時には既に放たれてるしなあ……まあ、ないよりはマシな程度だけど。

空気の圧縮つてことは、少なからず温度変化があるはず……そつちから観測した方がいいか？

とはいえ、全方位に放てるから温度変化を感知してもどこに向かつて発射されるかまでは分からんな。

つまり避けるには実質 動き回るしかないわけだが……徐々にこちらが捕捉されつある。

さすがは代表候補生つてことだな。感心してゐる場合じやないけど。

それに反撃するにしても、まずは接近しなきや話にならぬ。

……となると、俺の取れる手段としては『瞬時加速《イグニッショングースト》』しかない。

瞬時加速。これまた千冬姉に身体に叩き込まれた技能だが、後部スラスター翼からエネルギーを放出、それを内部にとり込み圧縮、再び放出する。その際のエネルギーを利用し、爆発的に加速するっていう技術なのだ。

自分で説明してみても意味が分からんが、実際できるんだから納得しておこう。

この加速があれば、もしあの衝撃砲が放たれても打ち負けずに接近できる……はず。考えてみれば、こつちから鈴に一直線に向かえば射線は限定される。

それにタイミングはあの球体が発光した瞬間だから、弾が見えなくとも何とかなる

……案外 悪い手じゃないかもしない。

問題はこれが何度も使える手じゃないって事だよな……割とシールドエネルギー食うし。

ともあれ、この一回で鈴のシールドエネルギーを半分以上削れないと俺のジリ貧は必至。

そのための手段……それも俺の手の中にある。

俺の I.S の単一仕様能力『零落百夜（れいらくびやくや）』。『自身のシールドエネルギー』を雪片のブレードへと転換し、相手のバリアー残量関係なく切り裂いて本体に直接ダメージを与えられる。そこで I.S の絶対防御を無理矢理発動させ、シールドエネルギーをゴリゴリ削るのだ。

千冬姉が世界最強の名を欲しいがままにしたのはこの能力と千冬姉自身の技量がマッチした所が大きかつたらしい。

ただ、これを発動させると馬鹿みたいにエネルギーを喰うから諸刃の剣なんだけどな。

この前のセシリア戦の時に急にエネルギーがなくなつた原因がこれだ。あの時、調子に乗つて無駄にミサイルとか斬らなきや俺の勝ちだつたんだと。

まあ、今回は前回と違つて残りのエネルギー残量には余裕があるから瞬時加速と合わ

せても数回は使える。

となれば、後は覚悟を決めて……突つ込むだけだッ！

「鈴ツ！」

「なによ！」

「本気で行くからな」

「な、何を当たり前な事を言つてゐるのよ……。と、とにかくつ！ 格の違いつてのを見せてやるから覚悟しなしやいツ!!」

「……」

「くくくツ!!」

沈黙がアリーナを満たした。

鈴は青龍刀を構えたまま、顔を真つ赤にしてブルブル震えている。

よっぽど恥ずかしかったんだろう。こんな大勢の観衆の前で盛大に囁んだからなあ。

だが、鈴が逆ギレして突つかかってくる前にこつちから仕掛ける！

「いくぞっ!!」

「！」

背中に強い圧力を感じ、周りの景色を置き去りにして俺は一気に加速する。

自身に掛かる急激なGで飛びそうになる意識を、ISの操縦者保護機能が防ぐ。

突然の加速に鈴が驚きつつも、俺に向かって衝撃砲を放つ……が、今までの砲撃から
弾速は大体把握している！

「ぜあああああッ!!」

衝撃砲を斬り払い、追撃の暇を与えずに接近。

そのまま、鈴へと斬り込もうとした瞬間――――突如、上空に閃光が奔り、アリーナへと膨大な熱量をもつた光線が突き刺さった。

ズドオオオオオオンッ!!!

凄まじい爆音とアリーナ全体を揺るがすほどの衝撃が響き渡る。

巻き上がる砂煙。その奥に浮かぶ赤い光点が不気味に明滅していた。

第8話

クラス対抗戦（リーグマッチ）。

私は前回と同じく、織斑先生たちと管制室で試合を見守つていた。

……何故か余計な奴も付いて来ていたが。

「あら、一夏さんの勇姿を見るなら会場で見るより、こちらの方がいいに決まっているではありませんか。」

特等席を独り占めなんてずるいですわ」

「ぐつ、なぜ声をかけられた時にうまくきり返せなかつたのだ……！」

「あのう……そもそも、ここは関係者以外立ち入り禁止なんんですけどお……聞いてます？」

山田先生が何か言つてるが気にしない。

そもそも、関係者というのなら一夏の幼馴染である私が関係者でなくて、誰が関係者になるというのだ。まつたく。

それはさておき、試合の状況はと言うと完全に一夏が劣勢である。

顔にも余裕がないし、鳳の衝撃砲を避けるので手一杯といった感じだ。

むう、軟弱な。攻めなければ、そのまま負けてしまうと言うのに……。

「それにしても一夏さん、ますます回避に磨きがかかつてますわね。まだ、ISに触れてから二月と経つていらっしゃらないのに……」

「まあ、あの訓練ならば納得いくがな……」

「……そうですわね」

織斑先生の訓練はボロボロになつてからが本番、とでも言うかのように只管扱かれるのである。

それが終わつた頃には、大抵一夏はアリーナで虫の息になつていたりする。

いくらなんでもやりすぎでしょう！ とセシリシアと詰め寄つた事もあるのだが「私の方針に口を出すな。それに、私が何からナニまで面倒を見ているのだから問題ない」と言い切られて口をつむぐしかなかつた。

その時の事を思い出して、無意識に織斑先生の事を恨みがましく見てしまつていた。それはセシリシアも同じだつたようである。

空気を切り裂き、薙ぎ払われた出席簿。渴いた音が私とセシリシアの頭から響く。

「……何か言いたいことでもあるのか？」

『なんでもありません！』

ひりひりする頭を抑えながら、瞬時に答える。

最近、叩かれる頻度が一夏より増えてきたような気がする。

というか、後ろに目でも付いてるんだろうか。さつきまでモニターを真剣に見ていたと言うのに……

そんな事をやつている間に、一夏は勝負に出るようだつた。

短い口上。しかし、その覇気と真剣な眼差しは画面越しの私も顔が赤くなるほど……そのつ、か、格好良かつた。

普段は見せてくれないその表情……どうせなら私だけに見せてくればと、心を温かくするような甘い想いが過ぎ^よつたその刹那、視界に3つの異なる軌跡が煌いた。視認すると同時に、速くそれでいて重い打撃が私の頭に打ち付けられていた。

「3人揃つて同じような思考を……私の前でいい度胸だ」

不機嫌な様子を隠そともせずに、織斑先生が告げる。

私とセシリアはともかく、山田先生も同じ事を考えていたのか織斑先生の強烈な一撃を叩き込まれて、最早涙目である。

一瞬で3つの斬撃……彼女の剣は篠ノ之流を超えたナニ力に昇華されているようだ。

織斑先生以外が頭を抑えて蹲つている……そんな実にシユールな状況の中、突如 上空からアリーナの遮断シールドを貫く閃光が奔り、施設全体を揺るがす衝撃と爆音が響き渡つた。

鳴り響くアラート。管制室の空気が一変した。

「な、何が起こつたんですの!?」

「システム破損ッ！ 何かがアリーナの遮断システムを貫通してきました！」

「織斑！ 凤！ 試合中止だ!! 直ちに退避しろ！ 山田先生、すぐに観客席の隔壁を閉じてください！」

「は、はいっ！」

モニターには所属不明のＩＳが出現と表示されているが、アリーナのステージは炎上し黒煙が立ち上っているため、その姿はこちらからは確認できていない。

しかし、次の瞬間。その黒煙を切り裂き、一夏たち目掛け熱線が放たれた。

鳳が何やら一夏と言ひ合つていて反応が遅れ、あわや直撃するかと思われたが一夏が横抱きに搔つ攫うことで回避した。

ドサクサに紛れて何をやつているのだつ？

「一夏あッ!? ええいつ、くつき過ぎだつ！ ……ツ……ど、どうやら無事のようだな！」

「なあつ!? そんな、鳳さんつたらなんて羨ま……ツ……こほん。なんて威力……私のレーザーライフルの比じやないですわね」

「おそらく先ほどのアリーナの遮断システムを貫通した物と同種ですね……。多少 威

力は落としてあるみたいですが……って、そんなことより織斑君、鳳さんツ！ 早くアリーナから脱出してくださいツ！」

あんなものが当たれば、確実にISの絶対防御を貫く。操縦者もただでは済まない。

しかし、一夏は山田先生の指示に従わず観客席にいた生徒達が避難するまで食い止めると言う。

確かに、ISの絶対防御を上回るシールドである遮断システムを貫くビーム砲撃を放つ相手だ。その攻撃が観客席の生徒へと放たれない保障はない。

「先生、わたくしが救援に向かいますわ。ISの使用許可を！」

「ダメです。オルコットさんの主武装 ブルー・ティアーズは一対多向きです。他の救援部隊の人と連携すらとれない状況下では、逆に戦力の低下になりかねませんつ」

「しかしつ」

「それに、これを見てください。遮断シールドがレベル4に設定されてる上に全ての扉にロックが掛かっています」

先生が見詰めるモニターに表示される警告と隔壁閉鎖の文字。

これでは救援どころか、生徒の避難もできない。

そんな……それでは一夏達の撤退どころか救援もできないではないかツ？

「なつ!? まさか……あのISの仕業ですの!! で、でしたら政府に救援要請をツ」

「既に要請しました。でも、こちらのシステムをハックできるISですから、外部への通信は妨害される可能性がありますね。

今、二年生、三年生の精銳に生徒達の救出と遮断シールドのシステムクラッシュを要請しました。私の方でも試みていますので、解除され次第、部隊を突入させます」

「……」

不謹慎な上に失礼な話だが、山田先生は優秀なのだな。

セシリアに答えつつ、せわしなくキーボードを叩きクラッシュとやらをしているのだろう。

真剣な眼差しで事態に当たるその姿からはやまやとか、マヤマヤとか呼ばれて弄られている人と同一人物なのかと思つてしまふほどだ。

このように先生は最善を尽くしているが、事態は好転の兆しを見せない。

一夏と鳳が正体不明機に果敢に向かっていくも、相手の機動や高火力に圧されてしまっている。

「くつ、結局 待つことしかできないのですか……？」

「……つ」

セシリアが口惜しげに言う。

本当に何もできないのか……？

私にも、私にだつて何かできることが……！

居ても立つてもいられず、気が付けば私は走り出していた。
せめて声だけでも伝えられる場所は……！

その時、私も随分と焦つていたのだろう。

管制室に居るはずの人が居なくなつてゐる事に気が付く事ができなかつたのだから。



試合に乱入してきた、深い灰色をした全身装甲の正体不明の I.S と対峙する俺達の口から漏れるのは文句ばかりだった。

「ああああッ！ もうつ、何なのよ！ このバ火力とアホほど硬い装甲は!? 龍砲も全然効いてないじやないッ!? ちつたあ、身じろぐぐらいしなさいよ！」

「全くだ！ しかもあの団体で機敏に動くとかッ!!」

見た目の重厚さに見合つた装甲。鈴の衝撃砲をその身に受けてもまるで堪えた様子もない。

近接戦を仕掛ければ、その長い腕を活かしてのダブルラリアットを放つてくる。

迂闊に喰らえばアリーナの壁に叩きつけられてしまうだろう。

……さらに、追撃にビーム砲撃まで付いてくる。

そのビームや高速回転する腕を回避しながら、鈴が衝撃砲を撃ち、俺が雪片で斬りつける。そして、すぐに距離をとる。

さつきからこの繰り返しだが、全身に付いた馬鹿みたいな出力のスラスターで無茶苦茶な回避をしやがる。

俺の瞬時加速なんて目じやないほどのGが掛かってるはずなんだが、平然とそのまま反撃してくる。

「——ツ、一夏ア！」

「——オオオオツ！」

鈴の衝撃砲で足を止めたところを狙い、背後からの一閃。——が、またもスラスターにより無理矢理回避される。

ちいつ、ホントに人間が乗つてんのかよ！ いくらなんでも、今のはありえないだろ……！

ハイパーセンサーがあるとはいえ、今のタイミングでの回避なんて……それに、さつきからどうにも不自然な行動が目に付く。

息を整えつつ、隣まで来ていた鈴に声をかける。

「鈴」

「何？ 無駄口叩く暇があつたら、あのビームを黙らせなさいよ」

「あいつの動き……変だと思わないか？」

「変？ そりや、あんな化物スラスターが付いてるんだから意味分かんないぐらいに変な回避してるけど……」

「ああ、あんな機動を連続して何回もするなんて “人間業” じゃない」

俺が言つた言葉に、鈴が眉をひそめる。

「……ちよつと、何が言いたいのよ？」

「あいつ、本当に誰か操縦してるのか？」

白式に映し出される鈴の表情に動搖が走つた。

敵の方を睨みつけたまま、話を続ける。

「何バカな事を言つてるのよ。 I Sは人無しじや絶対動かせない……そういう物なのよ？」

「分かつてゐるさ。でも、それにしてはあいつの行動が機械染みちやいないか？」

接近する時はフェイントや旋廻などせずに、俺たちに向けて一直線に向かってくる。

まるで、そうとしかプログラムされておらず他の行動が取れないみたいに。

まだ割り出しきれていないけど、今までの攻撃にしても一定のパターンがある。それに、こうやって俺達が会話してる間は自分から積極的に仕掛けてくる事はしてこない……まるでこちらの話に興味を持つてるみたいに。あるいは、データでも収集しているかのようだ。

いくらか疑問点を鈴に伝える。

少しの逡巡の後、鈴が尋ねてきた。

「もし、もしもよ？　仮にアイツが人が操縦していない無人機だとしてそれで勝てるつていうの？　攻撃が当たらない上に、ダメージが入らないってことには変わりはないのよ？」

「相手が無人機なら全力でこの零落百夜を使つてもいいからな、やれるさ。それに今度は絶対に当てる」

今まで手加減していた、なんて事はないんだが、この雪片式型——いや零落百夜の威力は高すぎる。

対人戦の場合、どうしても躊躇が生まれる。だけど、無人機相手なら最悪の想定をせずに済む。

それにさつきから鈴の衝撃砲はほとんど回避しないにも拘らず、俺の攻撃だけは必ず回避している。

俺の技量の差もあるんだろうが、零落白夜を警戒してると見て間違いないだろう。

どうやつて、白式のワンオフ・アビリティーの情報を掴んだかまでは分からなが。

「そ、分かつたわ。じゃあ、アレが無人機と仮定して攻めましようか。……で、私はどうしたらしいの？」

「ああ、俺が合図したらその衝撃砲を全力で放ってくれ……俺に」

「……あ、アンタつてそういう趣味だつたの!?」

「ばつ?! ち、違うッ! その衝撃砲のエネルギーを瞬時加速に回すんだよッ!!」

瞬時加速の速度は使用エネルギーに比例する。

残り少ないシールドエネルギーは零落白夜に回さなきやならないし、鈴の衝撃砲のエネルギーを使えるなら今までの比じやない速度になる。それなら、いくらあいつのスターでも回避できない、はず。

理論上は、このエネルギー転換は可能だつて、瞬時加速について教えてもらつた時に千冬姉が話していた。

難易度は跳ね上がるけど。

鈴もその事を知つていいようで、心配そうにこちらを見てくる。

「でも、それつてかなりの高等技術よ。……一夏にできるの?」

「ああ、伊達に千冬姉の弟やつてないって事見せてやるよ」

「……またそうやつて千冬さんを引き合いに出すし」

大きく溜息は付きつつ、何かをぼやいたみたいだけどよく聞こえなかつた。

「ん？ 何か言つたか？」

「何でもないわよッ！ いいわ、やつてやろうじゃないッ!! もし失敗したら駅前のファミレスで奢つてもらうからねッ！」

「あそこ潰れたけどな」

なんていつものように軽口をたたく。ま、何にしてもやる事は決まった。

後は実行するだけだ、と覚悟を決めて突撃体制を取つた俺の耳に飛び込んできたのは、聞こえてくるはずのない筈の怒声だつた。

「一夏あッ!! 男ならその程度の敵を倒せないでなんとするのだッ!!」

キインとハウリングが響く。

アリーナのスピーカーを通して聞こえてるらしい。

慌ててハイパー・センサーを駆使して中継室の方を見てみると、無残に斬り裂かれたドアと倒れ伏す審判とナレーターの姿が。どちらもピクリとも動いていない。

(（……や、殺（や）りやがつたあ———ツ?!）

俺と鈴の脳裏に『IS学園生 2名を斬殺』という朝刊の見出しが浮かぶ。
 「な、何やつてんだ馬鹿ッ！ すぐに救急車……いや、警察を呼ベツ!?」

「は？ 何を言つてるんだ、お前は……というか、馬鹿とは何だ馬鹿とは!?」

「いいから、自首しろ……初犯だし自首すればきっと執行猶予だつて付く!!」

「まさか、こんな形で敵がいなくなるなんてね。……アンタはいいライバルだつたわ」

「だから何の話だつ!?」

お前の足元に転がつてゐる人達の事だよツ!?

そんな風に真昼に起こつた大惨事を見てぎやあぎやあ言つてゐる俺達を他所に、例のア
 ンノウンは箒に向けて照準を合わせていたのであつた。

「一夏！ アレツ！」

「なあつ！? ちい、鈴！」

「分かつてゐる！」

鈴のチャージしていた衝撃砲がスラスターから取り込まれる。

暴発してしまいそうな、エネルギーの奔流。転換。スラスターへ……！

爆発的な加速、今まで以上のGに体が軋む。成功を実感する。

だが、このタイミングでは雪片を当てる前に砲撃が放たれてしまう……なら！

『一夏あッ!?』

アンノウンと筈の間……つまり、ビームの射線上に身体を割り込ませる。

勿論、瞬時加速の中で反転なんて器用な事はできない。アンノウンに完全に背を向ける形だ。

あの一撃を受ければ無事じや済まない……くつ、持つてくれよ、白式!!

そしてアンノウンから魔弾が放たれ――――――

「私の目の黒いうちは、一夏を傷つけることなどさせんッ!!」

――そんな宣言と共に斬り払われた。

「ち、ふゆ姉……？」

「ああ、私だ。良く頑張つたな」

打鉄を装着した千冬姉が隣までやつてきて、がしがしと乱暴に頭をなでてくる。

……急展開すぎて思考が追いつかない。

どういうことだ?

「すまないな。本来ならもつと早く来れるはずだつたんだが……隔壁が頑丈な上に数が多くてな」

「ま、まさか……ピットからここまで降りてた隔壁 全部壊したのか?」

「そうだ。まあ、私とお前の間を邪魔しようとしたモノの末路だといい見せしめにもなつたのだ。何の問題もない」

言つてる意味は分からんが、怖いぞ千冬姉。

「さて、お前には鳳を横抱きにした件など訊きたい事が山ほどある……が、まずはあれを片付けてからだ。少し待つていろ、すぐに終わらせる」

そう言うや否や、千冬姉は俺のとは次元が違う鍛度の瞬時加速でアンノウンに向かつて行つた。

「私の一夏が世話になつたようだな。貴様がどのような目的で襲撃したか知らないが

……一夏を傷つけた貴様は、私の敵だ。早々に消え失せろ」

目の前でアンノウンが千冬姉の手によつてスクランプにされていっている。
二人掛けであんなに苦労してた俺達の立場がないんだが……。

「仕方ないわよ……千冬さんだもの」

「何という説得力……」

「つていうか、あんなにしていいのかしら？　解析とかしなきやいけないんじやないの
？」

もう遅いだろ。

あーあ、叩き落とされた。

交戦から5分と経つてない、か……

……は、はは、ホントにすぐえつたらありやしねーよ。

「…………」

「？　どしたの、一夏……そんな難しい顔しちやつて」

「……いや、なんでもないさ」

ただ本当に立場がないな、と思つただけ。

I Sを使えるようになつて……今度こそ千冬姉を護れるつて、そう思つたのに。
結局、こうやつて千冬姉の後ろで護られてしまつてる。

千冬姉の後ろ姿だけを見るだけの自分が嫌で、変わろうと思つたつてのに……っ！

俺がそんな風に悔しさを滲ませている間に、千冬姉がこちらにやつてきていた。

「一夏、鳳……ご苦労だつた。後の処理は我々に任せてゆつくりと休むといい。ああ、一

応 医務室には行つておけよ」

「はい。ほら、行くわよ 一夏！」

「……ああ」

鈴はいつものように俺を促してくる。

たぶん、鈴は俺が落ち込んでいる事に気付いてるだろう……それに、その理由も。

“あの時”俺が言つた事をまだ覚えてるのかも知れない……

それでも、気付かない振りをしてくれるその不器用な優しさが、今の俺には嬉しかつ

た。

ピットへと戻つて行く鈴の後を追おうとしたその時、突然白式のハイパーセンサーが

警告を訴える。

——敵 I-S の再機動を確認！ ロックされています！

それが表示されると同時に振り返る。

鈍く光るその機体が足をもがれ、腕も左腕しか残つていらない状態でこちらに照準を合
わせ、千冬姉ごと俺を狙つていた。

次の瞬間、放たれる光の奔流。千冬姉は山田先生に指示を出していて、反応が遅れている。

気が付けば俺は瞬時加速を使い、千冬姉を押し飛ばすとその光の中へ飛び込んでいた。

光で埋め尽くされた視界の中、俺は確かに装甲を斬り裂いた――



――懐かしい夢を見ている。

る。 気が付けば、真っ暗な部屋の中。コンクリートで固められ、部屋全体が冷え切つてい

そんな中で拘束されて、捕まっていた。

今日は世界大会の決勝戦……反対する千冬姉に無理を言つてまで応援しに来たのにこの様だつた。

——何とかして脱出しないと。

そう思い、もがいてみたが拘束は緩むことなく、むしろ余計にワイヤーは手に食い込んで来た。

痛みに顔が歪む。歯を食いしばり、その痛みを堪えながらもがき続ける。手首に血が滲む。ひとりと床に血が滴る。

拘束が外れることはなかつた。

やがて抵抗する事にも疲れ、いつの間にか眠つてしまつていた俺に聞こえてきたのは建物を搖るがす爆音。目が覚めた。

階下から銃声が聞こえる。いくつかの悲鳴と共にその数は減つていく。
それから数分後 突然扉が斬り飛ばされて、差し込む光。その先に肩で息をする千冬姉が見えた。

ああ、決勝戦に出られなくなつたんだな……直感的に思つた。

ゴメン——そう謝る前に、抱きつかれた。

無事で良かった。ただ、そう繰り返す千冬姉は泣いていた。

いつも気丈に振る舞い、人に弱さなんて見せない。俺の大好きな姉が、たつた一人の家族が、泣いていた。

——その顔が、酷く目に焼きついている。



ふわりと優しい匂いが鼻をくすぐり、意識が浮上する。
暖かく、柔らかな温もりに頭を預けている。

前にも、こんな事があつた気がするな……そんな事を考えながら、薄つすらと目を開ける。

「——起きたか?」

「ちふゆねえ……？」

「ああ」

天井と千冬姉の顔が見える。

……どうやら千冬姉に膝枕されてるらしい。

……へつ?

「な、何やつてんだよ! 千冬姉!!」

「こら、まだ動くな。今の今まで気を失つていたんだぞ。それに別に恥ずかしがる事でもないだろう?」

「そりやあ、そうだけどさ……」
お前が師範に叩きのめされた後はよくこうやつていたじやないか」

恥ずかしいもんは恥ずかしい。

しかも何年前の話だよ、それ。

顔が赤くなるのを自覚する。しかし隠すこともできない。

気恥ずかしさから、千冬姉を見る事ができず目を逸らす。

そんな俺を見てか、千冬姉は苦笑しているらしかった。

……が、すぐに真剣な眼差しで話しかけてきた。

「……なあ、一夏」

「ん？」

「どうして、あのような無茶をした？　あの程度の攻撃で私が遅れを取るはずがない事ぐらい分かつていただろう」

「……」

「心配、したんだぞ……つ」

震える声でそう告げた千冬姉のその顔が、いつか見た光景と重なった。

また、その顔をさせてしまった。自分の不甲斐なさに嫌気がする。

俺はゆっくりと身体を起こす。止めようとする千冬姉を制して、正面から向き合う。

「……俺は、さ。いつも千冬姉に護られてばかりだった。俺たち家族が二人きりになつたときも、俺が誘拐されたときも……そして、今回も。だけど、俺だつて……千冬姉を護りたいんだ。今まで護ってきた分、今度は俺が守る番なんだって初めて白式を動かした時にそう心に決めた」

俺の独白を千冬姉は口を挟むことなく、耳を傾けている。

「だから、あの時千冬姉が危険だと思った時にじつとなんとしてられなかつた。あのま何もしなかつたら、俺はきっと後悔してた。例え千冬姉が無事だつたとしても、これは俺が自分に誓つたことだから。

よ

「…………ばかもの」

そんな俺の自嘲氣味の独白を聞いた千冬姉は俺を抱きしめた。痛いくらいに強く、優しく。

千冬姉の温もりに包まれる。

「お前は分かつていいない……私がどれだけ一夏に、お前という存在に護られているかを。救われているのかを」

「千冬姉……」

「一夏、お前の気持ちは嬉しい。だが、無茶だけはしてくれるな……お願ひだ。お前がいなくなつたら……私は、私は……！」

俺を抱き締めている千冬姉は、いつもとは違ひどこか弱々しく見えた。

小さく震えるその肩を俺は強く抱きしめ、謝る事しかできなかつた。

強くなろう。

力だけじゃなく、心も。

もう千冬姉にこんな悲しい顔をさせないためにも。

そう、改めて決意した。

と、ここで綺麗に終われたらよかつただけどな。

「さて、一夏？　お前には鳳を横抱きにした件について訊きたい事がある
「は？」いや、あれは緊急事態だつたし……」

「うるさい。口答えをするな」

「……ひやい」

頬つまみ上げられる。

結構、痛い。

「ああいう場合は蹴飛ばして射線上から外せ……いいな？　ま、まあ……あそこ居たの
が私の場合のみ許す」

「……」

こんな感じでたつぶり2時間ほど、頬を引っ張られたまま説教（？）を喰らうのであつ

た。
。

第9話

IS学園の地下50mにある特別区画の内の一室。

私は先ほど終わつた解析結果を持つて入る。

……といつても、ほとんど何も解らなかつたという事が分かつた、というだけなんですが、

失礼します」

「山田先生……解析の方はどうでした?」

「はい、やはりあれは無人機だつたみたいです。どのような方法で動いていたかは不明……織斑君の攻撃で機能中枢も焼切れていますから、修復も無理みたいです。それにコアは——」

「未登録の物、か」

「!……心当たりがあるんですか?」

「……私は確実にISの両腕と両足を斬り落とした。しかし、見てください。最後の砲撃の時、腕が再び接続している」

織斑先生が見つめるディスプレイには、先ほどの戦闘映像が映し出されていた。

確かに、斬り落されたはずの腕とその肩の部分が互いにケーブルを延ばし、接続された。

「そんな……確かに、ISには自己修復機能がついています。でも、あんな短時間で修復できるものじゃないですよ」

「ああ、現行の技術ではそれは不可能だろうな。だが、現実にこうして存在している」
無人機の遠隔操作(リモート・コントロール)もしくは独立稼動(スタンド・アローン)、それに異常なほどの修復能力。
……そんな凶悪な代物が作れる企業や国家はない。

でも、個人なら？ 一人しか、いませんよね……

「篠ノ之博士……」

「まあ、十中八九そうだろうな。こうして、一夏を危険な目に遭わせるとは。フフフ、どうしてくれようか」

ああっ、織斑先生が持つてるコップに婢(ひび)が……っ！

ご愁傷様です、篠ノ之博士。

きつと、あのコップみたいに掴まれちゃうんでしょうな……

あうう、想像するだけで痛いです。

「そもそも、アイツは一夏の事を馴れ馴れしく、いつくん、いつくんなどと呼びおつて
……羨ま……んんつ、けしからん」

うわあ……ブラコン全開ですね、織斑先生。

私は一人つ子だつたからよく分からぬけど、確かに織斑君みたいなカツコいい弟がいたら私もああなつちやうのかも。

もし私がお姉ちやんだつたら、なんて呼ばれるんだろう……織斑先生みたいに『真耶姉』かな？ それとも『お姉ちゃん』とか『姉さん』？

ああでも、織斑君になら『真耶』つて呼んでもらいたいかも……なんて一人で余計な事を考えていると

「山田先生……？」

……あ。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ——！！！

あ、あはは、隣からすごいプレッシャーがしてますよ……？

「私の一夏を使って好き勝手に妄想するとは本当にいい度胸だな？」

「い、いいえ！ わ、私、別にそんなつもりはツ！」

「フフフ、そのように頭を使ってさぞお疲れでしょう？ そういう時は塩分を取るとい

いらししいですよ？」

「へっ？ それと言うなら糖分なんじゃ……」

織斑先生は私の分のカップにコーヒーを注ぐとそこに大量のお塩を入れ始めた。

つていうか、なんで塩がこんな所にあるんですかあつ!?

ああああ!? そんな大匙で山盛りにい!? それコーヒーじゃないですツ! 真っ黒な飽和食塩水ですよう!?

「さあ、死をくれてやろう……!」

「ひいいいいつ!? 飲めませんよおつ?! 塩分過多で死んじやいますツ!?」

「そうだな」

しつれと言わないでください! つて、そんな近づけちゃ……い、
嫌あああ——ツツツ!?



例の無人機乱入事件から数日。

俺は今、IS整備室にやつてきている。

……そんな所があつたのか、と言つて千冬姉に叩かれた事はさておき。

なんで俺が整備室にやつてきているかというと、鈴との試合が有耶無耶になつてしま

まつたから、仕切り直しつて事で模擬戦をしたんだが……どうにも白式の燃費が悪い所
為で鈴を削り切る前にエネルギー切れになつてしまつた。

イグニッショーン・ブーストを見切られてしまつたのが痛いよなあ。
まあ、俺がもつとうまく使えば問題ないんだろうけど、その前にエネルギー切れになつちまつたらどうしようもない。

そんなわけで千冬姉に相談してみたところ、ここで調整しろと言われたのだ。
ちなみに千冬姉はついてきていない。

現役の頃から整備に関しては苦手だったと、苦い顔をしていた。

……まあ、千冬姉つて機械の類が苦手しなあ。いつだつたか、洗濯機の前で一時間ほど頭捻つてたし。

そんな訳で言われるがままにやつてきたんだが、ISに関する知識の乏しい俺がどこまで調整できるか甚だ疑問である。

一応、2年の整備科に配られる教科書や整備マニュアルを渡されたんだけど……さつぱりだ。

むむむ、こんなことならセシリアとか鈴とか連れて来るべきだつたか。

専用機持ちなうら、この辺りの知識もあるだろうし。

でも、筈も含めて今日に限つてどこにもいなかつたんだよなあ……3人で遊びにでも

行つてゐるのか？

「あー、おりむーだあー」

はあ、どうしたものか、と頭を悩ませてゐるところに聞き覚えのあるのほほんボイスが。

「あれ？ のほほんさんとかなりん……新聞部1年エースの」

「うー、それ恥ずかしいからやめてよお……」

「あ、すまん。それで二人はどうしたんだ？」

基本的にここを使うのは専用機持ちと2、3年生ぐらいだ。

まあ、別に入るのが禁止されてるわけではないから問題はないんだけど。

「てひひ、今日はかんちやんのお手伝いなんだよー」

「かんちやん？」

相変わらずのほほんさんの付ける渾名は独特だなあ。

かんちやん……神田？ 神崎？ 少なくとも、うちのクラスにはいないと思うが。

聞き覚えがなくて首を傾げる俺に、かなりんが助け舟を出してくれる。

「あ、本音ちやんが言つてるのは更織（さらしき）さんの事……つて言つても分からぬよね。4組のクラス代表の子なんだけど」

「あーそうだな。クラス対抗戦で会つてたなら分かつたんだろうけどな」

「ちゅーしになつちやつたもんね～」

あの後、対抗戦は例の襲撃事件の所為で中止となつてしまつた。

あの無人機についても箱口令がしかれ、俺や鈴なんかは直接やりやつたわけだから誓約書まで書かされた。

そういうば、誓約書を持つてきた山田先生が終始涙目だつたのはなんだつたんだろうか？

……よく考えたら、いつものことだつた。

ん？ 4組？ 4組と言えば、俺等以外で唯一専用機持ちがいるクラスじやなかつたか？

クラスの誰かが言つてたような気がするけど。

「うん。それが更織さんのことだね。更識 簪さん。日本の代表候補生でもあるんだよ」

「なるほど、かんざし簪で、かんちやんなわけか。

つまり、のほほんさん達は、その更織さんの専用機の整備の手伝いつつことなんだな」「あく、そなうなんだけど……まだ、専用機は完成してないの」「へ？ なんでだ？」

セシリ亞や鈴の専用機は国を挙げての第3世代型武装のテストモデルの兼ね合いも

あつて、国家規模で支援とかがあるとか言つてたんだけど。日本じや違うのか？
「それはねー、おりむーの所為なんだよー」

何故に。

俺は何もしてないぞ？……たぶん。

「更織さんの専用機つて、倉持技研が担当してるんだけど……」

「あそこの人達は皆おりむーのISに『ハア ハア ハア』してるからねー。かんちゃんの機体がほつたらかしにされてるのさー」

「ぐぬつ、確かに俺の所為でもあるか……あと、その言い方はやめなさい」

「はーい」

素直でよろしい。

それについても、俺の知らない所でいろんな人に迷惑をかけてるんだな……

つか、倉持技研も白式にしか手が回らないわけでもないだろうに、何やつてんだけの
人等。

またISについて壮大な討論でも繰り広げてるんだろうか——



倉持技研のとある会議室では議論が繰り広げられている。

「白式は私の婿」

「あら、白式は今私の横で寝てるわよ」

「イザナミだ」

「なん……だと？」

「むしろ白式×打鉄とかどうよ？」

『『この雪片式型をどう思う？』』『すぐ、大きいです……』……こうですか、分かりませ

ん

『ああ、すごいです。キミの零落白夜で僕のＳＥがゴリゴリ削られて……！』と、続く

のね』

『そうして、お互いのブレードでツキ合うような関係になるのね……！濡れるわ……

!!』

『主任！ 早速薄い本を書こうと思うんですけど、大丈夫ですか？』

『大丈夫よ、一番いい絡みを頼むわ！』

会議は続していく。



……変な電波を受信してしまった。酷い混線だ。

頭痛が痛いとはこういう事を言うのだろうか。

思わず眉間を押さえてしまう俺であった。皺がよつてるのがよく分かるなー。

「どうしたの、織斑君……顔色 悪いよ？」

「あ、ああ……なんでもない。それより、俺もその更織さんに会わせてもらつてもいいか？」何か迷惑かけちまつたみたいだし

「おー、おりむーはえらいねー」

「いいよー、なんて言いながら整備室の奥の方へとぼてぼてと歩いて行くのほほんさん。

「そういえば、織斑君はなんでここに？ いつもは篠ノ之さん達や織斑先生と一緒に、一人なんて珍しいね？」

「あー、白式の調整に来たんだけど、さっぱり分かんなくてさ。今日に限ってセシリア達

もいないし……」

「そうなんだ。あ、なら私から先輩に頼んでみようか?」

「? 先輩つて……黛先輩の事か?」

「うん。先輩 2年整備科のエースらしいから。私や本音ちゃんもある程度はできるんだけど、先輩の方が詳しいし」

なんて事を話しながら、俺達ものほほんさんの後について行くと――

「じゃあ、こつちやつてあげるね!」

「や、やめて……私だけでやるつて……言つてるのにつ……」

「私はおじよーさまの専属メイドだから手伝うのは当たり前なんだよー」

「お嬢様はやめて……」

「てひひ、はーい」

そこにはのほほんさんに振り回されて、わたわたしてるメガネをかけた女の子がいた。

あの娘が件の更織さんなのだろう。

というか、のほほんさんが言つてるお嬢様だかメイドだかは何なんだ?

とりあえず、のほほんさんがメイドやつても仕事は抄りそうにないけども。

逆にフォローする人の手間が増えるだけなんじやなかろうか。

「あー、おりむー今 しつれーな事考えたでしょー！」

どうしてこうも俺の思考は読まれてしまうのか。

のほほんさんにぱしばしとだぼだぼな袖ではたかれる。

ここはいろんな機材があるんだから、袖は捲くつておきなさい。

「織斑君、お母さんみたいな事言うんだね……」

「それほどでもない。つと、君が更織さん？」

「……う、うん。そう、だけど……」

「ごめんっ！ 何か俺の所為で君に迷惑かけちやつたみたいで……今更かもしれないけど、本ッ当にゴメンツ」

いきなり頭を下げた所為か、更織さんは目を白黒させている。

それでも、言いたい事は分かつてくれたようだ。

「……え、あ……そ、そんなに謝らなくても……いい……別に、織斑君だけの所為じや……ない、し……」

「それはそうかもしれないけど、けじめは付けたいからな」

「おおー。おりむーが珍しくまじめだ！」

「そうだよね。いつもなら「ですよねー」とか言ってふざけるのにね」

「そ、そうなの……？」

台無しだつた。

とまあ、こんな感じで更織さんと知り合ったわけなんだが、何故かその更織さんに白式の調整を手伝つてもらつてゐる。

「何か……ホントゴメンな……」

「ううん……私の方もその、行き詰つてたし……それに白式のデータも、参考になるし……」

「おりむーはダメダメだねー」

「ぐつ、言い返せない……」

何をしたらいいかさつぱりだつた俺は、悪いと思いつつ更織さんにアドバイスを貰つていたんだが、気が付けば白式の調整がメインになつていていた。どうしてこうなつた。

そして白式の操縦者たる俺はというと、その調整に関しては授業外で I.S.にほとんど

触れる事すらないのほほんさん達にすら及ばず、機材を運んだり、データを持つていつたりと雑務しかできない役立たずに成り下がったのである。

「んー、やつぱりこれ以上は無理かもー。あんましやつちやうと、機動力が落ちちゃうよー」

「そうだね。でも、5%ぐらいエネルギー効率は改善したんじゃないかな?」

「おお! 何をどうやつたかは分かんなかったけどありがとう!」

「……I Sの最適化はすごい……だけど、ちゃんと調整してあげないと、バランスが悪くなる……」

「まー、おりむーは武器がブレードしかないからねー。スラスター出力と零落百夜にエネルギーを振るつていうのも一間違いじやないんだけどねー」

更織さん達曰く。

俺の白式は機動力と攻撃を重視した物に自己進化して行つてるらしい。

定期的にフラグメントマップを見て調整した方がいい、というありがたいアドバイスもいただいた。

フラグメントマップつてのは……えーと、パーソナライズによる自己進化の道筋と、このマニュアルには書いてある。

つまり、これを見れば自分のI Sがどんな風に自己進化してるかが分かる訳か……。

だけど、肝心のフラグメントマップを読み取れるようになるまで時間が掛かりそうだな。

……うん、頑張ろう。

ま、ともかく。これで少しは燃費も良くなつたことだし、もう少し鈴に喰いつければいいんだけどな。

いや、その前にイグニッショーン・ブーストの練習が先だろか？

スラスターにまわすエネルギーを調節すれば、短距離での移動とか小刻みに使つて、反転とかそのままターンできるようになるらしい。戦術の幅も広がるかも知れない。

などと、次の試合の事を考えていると――

「あつ！ もうこんな時間だ。ごめんね、私先輩に呼ばれてるから片づけるの任せてもいいかな？」

「ああ。後は俺が片付けとくよ。のほほんさん達はどうする？ 終わりにするんなら俺が片付けておくけど」

というか、本気で申し訳ないんで片付けぐらいさせてくれ。

そう言うとすぐさま喰いつく、のほほんさん。

「やたつ。私もお仕事があるんだー。それじゃ、よろしくねー」

「ホントにありがとな。更織さんはどうする？ 終わるんなら更織さんのも片付けてお

くけど

とてとてと走り（？）去っていくのほほんさんを見送りながら更織さんに訊いてみる。

「あ……私はその、続き、やるから……」

「そつか。じゃあ、こつちだけ片付けるな。あ、他に持ってきてほしい物があつたら言つてくれよな」

「う、うん……あり、がと……」

よし、それじやあ片付けるとしますか。



織斑、一夏……世界で唯一の男性のIS操縦者。

私のIS『打鉄式式』の完成が遅れている原因。

でも本当は、織斑君の所為じやないつて分かつてる。

これは、きつとただの八つ当たり。倉持技研から政策が遅れるつて聞いた時に、自分から望んで一人でやろうと思つたから。

……姉さんみたいに。

昔から、一人で何でもできた……自慢の姉。でも、私は……そうじやないから。

いつも、姉さんと比べられて……“あの”目で見られる。

失望、諦観、嘲笑。いろんな負の感情が混ざり合つた、そんな視線。誰もが、姉さんを通してでしか私を見ていなかつた。だから、いつしか私は心を閉ざしていた。

そして、できるだけ姉さんと関わらないようにした。

そうすれば、傷つかないで済むから。

それに、姉さんだつて私みたいな妹なんて……きつと……。

「——さん？ 更織さん、どうかしたのか？」

「え……!?

肩を揺すられて我に帰る。いつの間にか、随分と深く考え込んでいたらしい。織斑君が心配そうにこちらを見てきている。

というか……

「か、顔つ……近い……つ」

「あ、ごめん」

い、いつもこんな風にしてるんだろうか、この人は。
いくらなんでもデリカシーとか、いろいろ足りてないんじゃないだろうか。

本音はお姉さんがいる男の子は異性に疎くなるつて言つてたけど、本当だつたらしい。

織斑君のお姉さん……織斑 千冬先生。

ISの操縦技術では他の追随を許さず、世界最強の名を手に入れた。姉さんと同じ領域にいる正に天才の一人だろう。

……織斑君は：なかつたのだろうか。私みたいに比べられた事が、あの身も竦んでしまうような視線に晒された事が。

気が付けば、私は織斑君に尋ねていた。

織斑先生と比べられて、辛かつたりしなかつたのかと……。

「んー、そりやあるに決まつてる。元々、俺なんてそんな素行がいいとか言えなかつたし、千冬姉と比べられてバカにされた事だつてある。まあ、その後 千冬姉までバカにしやがつたからぶん殴つてやつたけどな」

……そ、そんな胸を張つて言われても、困る。

と言うか、アグレッシブすぎ……。

「……確かに比べられたり、バカにされたりするのが辛いってこともあつた……けどさ」

織斑君はさつきまでのおどけてた態度を一変させて、真剣な目をする。

「俺が千冬姉の事を大事に思つてることとか、憧れてる事には関係ないんだよ。

だから、俺は千冬姉の弟として恥ずかしくないよう努力する。……それで今度は、

俺が千冬姉を護るんだ」

「……そう、なんだ……」

まだ、全然なんだけどな。

そう言つて照れたように笑う織斑君。

私とはまるで違う。私は、ただ逃げているだけ。姉さんから……そして、自分からも。「そんなことないだろ？」

「え……？」

織斑君がそう口にして、思わず声が漏れてしまつた。

もしかして、口に出してしまつてたんだろうか。

「更織さんが打鉄式式を自分で完成させようとしてるのだって、そのお姉さんに追いつこうと思つての事なんだろう？」

……まあ、俺の所為つてのが多分に含まれてるんだろうけど

「！」

「ＩＳの開発とか、整備とか俺はよく分からぬけどさ。その更織さんの気持ちは分か

るような気がする。

俺に手伝える事があれば何でも言つてくれよ？ 一人で頑張りたいのも分かるけど、無理したら元も子もないだろ？

そんな事してたら、のほほんさん達も心配するしな。勿論、俺だつて心配するぞ」「…………う、あ…………」

う、顔が火照つてるのが分かる……

真剣な目をしたまま、そんな言葉をかけてくれる織斑君に、私は曖昧に頷く事しかできなかつた。

その後、織斑君は片付けが済んだようで、私に声をかけてから整備室から出て行つた。それを少し残念に思いながら、私は再び打鉄式式に向き合つた。

「私…………頑張るから…………」

これから私と一緒に頑張つてくれるこの子に向けて、そう宣言する。

まだ、織斑君みたいに胸を張つていう事はできないけれど、私も姉さんに追いつきたいから。

…………そして、昔みたいにお姉ちゃんと笑いあえるようになりたいから。

そして、私は空間投射ディスプレイを呼び出してキーボードを叩き始めた。

——そのタツチは心なしか、普段よりも軽いものだつた。



更織さんと知り合つた日の夜。

千冬姉の夜の補習授業も終わり、二人でゆつくりしているところだ。

それにもしても、久しぶりにこんなにゆつくりとした時間を過ごしてゐる気がする。

入学してから2ヶ月、なんというかイベントが目白押しだつたしなあ……望んでもいなかつたけど。

俺としては、もつとゆつたりと事を進めて行きたいんだけども。……無理かなあ……
無理だろうなあ。

何を隠そう、俺はトラブルの達人なのだ（巻き込まれる方の）

「どうした、一夏……そんな顔をして」

「いや、なんでもないよ」

心配そうな顔でこちらを覗き込んでくる千冬姉。

むう、そんな心配されるような顔してしまつただろうか？
等たちにも考へてゐる事が顔に出てるとよく言われる。くだらない事を考へてゐる時とか、特に。

そういえば、千冬姉と同じ部屋で寝るようになつてからも2ヶ月になるんだな。
……毎朝、寝ぼけて俺のベッドに入つてくるのはそろそろやめてほしいんだが。
その辺どうにかならないのか、と訊いてみるもの。

「無理だな」

ばつさりだつた。

入つてくるだけならまだしも、その時の服装があ。

俺のシャツだけ羽織つてたり、下着だけとか。俺をなんだと思つてるんだよ……
まさか、俺以外にもこんな風に無防備なんぢやないだらうな……？ 気を付けなけれ
ば！

「安心しろ。お前の前 以外でするつもりなどない」

そんな胸を張つて言われても、その、反応に困る。

まあ、千冬姉はそんな俺を見て楽しんでいるようだつたが。
などと千冬姉と他愛もない話をしていると、コンコン、とドアが控えめにノックされ
た。

誰かが来たらしい。こんな時間に珍しいな。

「チツ、誰だ一夏との時間を邪魔しあつて……」

愚痴をこぼす千冬姉の後を追つて入り口の方に向かうと、部屋の前にいたのは山田先生だった。

いつにも増して挙動不審な様子である。

「あ、あああのッ、夜分にし、失礼します！」

「そうだな。失礼だから、早々に立ち去るといい」

「いやいや、千冬姉 何言つてんだよ。何か用があるんですね？」

「うう……はい、あの……その、ですね？ ……お、怒らないで、聞いてくれますか？」
「事と次第によつては容赦はしない」

「ひいつ!?」

ギロリと山田先生を威嚇する千冬姉。

山田先生はふるふると、恐怖のあまり竦み上がりてしまつていて。

「怖がらせたら話が進まないぢやないかよ……。大丈夫ですよ、山田先生。別に怒りませんから」

「ホント、ですか？ 嘘だつたら、泣いちゃいますよ……？」

「はい、もちろんですよ」

俺は、という注釈は付きますけどね。

つまり、千冬姉はその限りではないということです、はい。

果たして山田先生の察知スキルが低いのか、俺がうまく表情を隠せたのかは分からなかつたが、俺の内心を察することなく、安心して話し始める山田先生だった。

「実はですね、織斑君に寮の部屋が用意できたので、お引越しになつたんですよ」

「あ、そうなんですか」

「……」

山田先生の言葉を聞き、千冬姉が停止した。心なしか、顔も若干引き攣つてるような氣もする。

どうしたんだ、いつたい。目の前で、手を振つてみるも反応はない。

うーん、まあ、すぐに戻つてくるだろう。

それにもしても、ようやく部屋が確保できたのか。このまま、ずっと千冬姉と一緒になるんじゃないかと思つたぞ。

「それで、すぐに移つた方がいいんですか？」

「あ、そうですね。できれば、そうしてもらえると助かつちやいます」

「分かりました。用意します」

荷物が多いわけでもないし、すぐにまとめられるだろう。

山田先生に声をかけてから部屋に引っ込もうとしたところで、我に返った千冬姉に呼び止められた。

「ま、待て、一夏！ 部屋を移動する必要などないッ！ お前は私と……！」

「お、織斑先生……でも、そうしないと明日来る転校生さん達の部屋がなくなっちゃうんですよお。ほら、今朝の職員会議で言わわれてたじやないですかッ」

「知るかッ！ ラウラとそのもう一人を同じ部屋に押し込めればいいだろう！ 男だろうが関係あるかッ！ 軍人はそのような事でうろたえない……！」

「そういう問題じゃないんですよ……」

千冬姉の剣幕に押され、涙目になつてしまふ山田先生。

もはや、その顔がデフォなんじやないかと最近よく思う。

まあ、このままだと話が進まないから千冬姉を宥めるとしよう。

「千冬姉、そんな心配しなくても大丈夫だつて。朝も自分で起きれるし、弁当もちゃんと作るからさ」

「違うッ！ 私が言いたいのは……っ！」

「ん？ ああ、そうか。大丈夫、ちゃんとこここの部屋の掃除もしに来るから安心していいぞ」

「……ッ」

「あだあつ!?」

「無言で殴られた!?」

「ふん、お前がそう言うのなら好きにするがいい。……私も好きにさせてもらう？」

「?」

「じゃ、じゃあ織斑君は準備をして、この部屋に行つてくださいね？」

「あ、はい。わかりました」

よく分からぬが、許されたらしい。

何か最後ボソツと言つてた気がするけど、訊いても教えてくれないんだろうなあ
……。

とりあえず、山田先生から鍵を受け取つて、荷物をまとめ始める。
が、千冬姉と山田先生の話は続いているようだ……。

「じゃ、じゃあ、私は事務系の仕事があるのでこれで！」

「まあ、待て。そんなに急いでどうする。ゆっくりしていけばいいではないか、なあ？」

「ひうつ!? で、ででも仕事が残つてますし！」

「フフフ、明日からは山田先生も実機を使つて講習するからな。みつともない姿を晒さ

ないよう、きつちりと私が指導してやろう」

「あ、あれ？ 聞こえてないッ!?」

「ふむ、いまなら第2アリーナが空いてるな……では、行くぞ」「あうあうあうあうあうあう……」

そのまま、ずるずるとドナドナされていく山田先生。ご愁傷様です。

さて、準備も済んで新しい部屋に着いたわけなんだが、荷物を置いたところで来訪者が。

『『』……』

どこから聞きつけて来たのか、やつてきたのは筈、セシリ亞、鈴の三人だつた。

そして、何故か何も言わずに顔を赤くしてこちらを見るだけだ。

なんだ、風邪か？季節の変わり目だからな、体調管理には気を付けなきやいけないぞ？

「別に風邪なんてひいてないわよっ!!」

「そ、そうですわ！」

「そうなのか……で、何しに来たんだよ？　あ、何か用があるなら、部屋に入るか？」

「……でいい！」

「……」
「そうは言うものの、全く話そようとしない三人。
なんというか、お互い牽制しあつてるような、そうではないような。よく分からん。

「……っ、一夏！　月末の個人トーナメントの事だがな！」

「あ、抜け駆けはなしですわよ!?」

「はあ、何なんだよ……」

三人は声を合わせて（たぶん偶然だろう）

『『優勝したら――』』

「したら？」

『『私（アタシ）と付き合つてもらう（わ）（います）!!!』』

……はい？

よく分からぬが、こいつらが優勝したら、買い物か何かに付き合う事になるらしい。
なんでわざわざ自分でハードルをあげるんだ？　こいつ等は。

別に時間さえ合えば、いつでも付き合ってやるのにな……なんて、本人達に言わせれば外れな事を考えながら、俺はとりあえず「お、おう」と言うに留まるのであつた。

第10話

さて、引越しも終わり、筹達からよく分からん宣戦布告を受けた翌日のHRこと。

昨日、山田先生が言つていたように転校生が来た。

このIS学園に転校してくるつて事は、そいつは確実に女子である。
ああ、また肩身が狭くなるのか……なんて思つていた時期が、俺にもあつたわけなんだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから來ました。まだこの国では不慣れな事も多い
と思ひますが、よろしくお願ひしますね」

だが！ 内一人は男だつた！！

中性的な顔立ちの金髪の美少年。まさに、貴公子と言つた風貌である。

「き、キタ——!!」

「メイン男子キタ！」

「早い、もう二人目か！」

「これで勝つる!!」

そんな彼の登場にクラス中大騒ぎである。

手を取り合つて喜んでる子達もいる。……哀れな。

「うるさい、黙れ」

——スコーンツ!!

千冬姉のチョークが火を吹いた。

快音が鳴り響き、一瞬で20人以上の額が撃ち抜かれてしまつっていた。
千冬姉、絶対モンド・グロッソの射撃部門でも好い線行くだろ。セシリ亞以上の精密射撃だな。

そういえば、別に騒いでもいなかつた篠達まで撃ち抜かれてるのは何でだ?
「私がいない間に、余計な事をしてかしおつたからな。あとで鳳にも制裁に行く」
……よく分からん。

それはともかく転校生の方はと、こつちのテンションに付いていくてないよう
で、目を白黒させてる。

……? でも、もう一人の方の転校生（こつちは女の子）は特に動じる事もなく、何
故かこつちをじつと見つめてきてる。

「……」

鈴と同じか少し低いぐらいの背丈で、腰の辺りまで伸びた綺麗な銀色の髪に黒い眼
帯。

はて？ 初対面のはずだけど、どつかで会つた事もあるのか？

もしくは、更織さんみたいに気付かない内に迷惑かけた子だとか……？

などと心当たりを探しつつも、見つめられることの居心地の悪さに頬を搔く。

そんな俺達の様子に気付いたのか、千冬姉が自分で起こした惨状をそのままに、自己

紹介を続けさせようとする。

「……挨拶を続ければ、ラウラ」

「はい、教官。ラウラ・ボーデヴィイッヒだ。よろしく頼む」

「……え、えーっと……以上ですか？」

簡潔な自己紹介に山田先生が小動物のようにビクビクしながら、ラウラに尋ねる。

……いや、確かに軍人然とした鋭い雰囲気を放つてゐるけど、そこまで怯えるほどの事
でもないだろうに。

とか思つてたら「では、一つだけ」と前置きをしてから、つかつかと俺の前まで来て
ビシツと指差して来た。

まあ、来るんじやないかと思つてたよ。

「織斑一夏……私は認めんぞ！」

「……何をだよ」

いきなり全力で否定されて、つい言葉に棘が出てしまう。

しかし、ラウラはそれを気にした風もなく、一層強い口調で続けた。

「お前が……お前が教官の『嫁』などと！ 私は絶対に認めんッ！」

『…………』

なんとも言えない空気が、教室を満たした。

何で男の俺が嫁？

その疑問を口にするより先に、千冬姉が口を開いた。

「馬鹿者。それと言うなら婿だ」

「そうだよな」

「あ、特に否定はしないんですね……というか、織斑先生もまんざらでもなさそう……」

たぶん、俺が千冬姉の弟として相応しい実力がない事が不満、つてことが言いたかつたんだろうなあ。

嫁云々ってのは、まだこつちに着たばかりで日本語に慣れてないんだろう。

などと一人で納得していると、ようやく我に帰つたのか、さきほどまで呆然とした筈とセシリアが騒ぎ始めた。

「な、なな何を言つてるのだ！ 織斑先生の一夏は断じて嫁ではない！ ましてやむ、婿など……ッ！ い、いや、そのいづれは篠ノ之神社の神主として（ry）

「そうですわつ！一夏さんがお嫁さんなどと……などと……（一夏さんがエプロンをしてわたくしを出迎えてくださる……）わ、悪くはないですわねつ」

何言つてんだよ……特にセシリア。

だが、そんな二人も千冬姉が出席簿を投擲する事によつて再び沈黙した。すげえ、ジャイロ回転しながら二人の額に突き刺さつたぞ。

今度からアレを出席簿マグナムと呼ぼう。

そんな二人を特に気にする事もなく、ラウラは怪訝そうな顔をしながら尋ねてきた。「む？しかし、クラリッサが言うには日本では気に入ったものの事を『嫁にする』と言うのが習わしだと……」

「いや、確かに間違つていなくもないけど、一般的ではないからな？」

かなり局所的な文化だと思うぞ。

「……そうなのかな。一般的ではないと言うことは、より特別な呼称と言うわけか……やはり奥が深い日本の文化は」

うむうむと一人で感心してしまつている。

……まあ、いいか。否定するにも骨が折れそудし。

何にしても、いきなり認めないと言われた時は何かと思つたけど、そんなに悪い奴でもなさそうだな。

となると、俺がしつかり千冬姉の弟として恥ずかしくなって事を認めさせてやればいい。

「なら、やつてやるさ。」

「ふむ、ではこれでHRは終了とする。次は2組との合同のISの実習だ。各自、さつさと着替えて第二グラウンドまで来るようにな……つと、そうだ織斑。デュノアの面倒はお前に任せたからな」

「わかりました」

「うむ。……さて、2組に行くとするか」

そう言うと、千冬姉は指の間にチョークを挟んだまま教室を出て行つた。

「つと、ぼーつとしてる場合じゃない。さつさとシャルルを連れて移動しなきやな。
「えつと、君が織斑君だよね。初めまして、さつきの紹介でも言つたけど——
「いや、それは移動しながらにしようぜ。今から女子が着替えるからな……」

「?」

「……何で不思議そうな顔してるんだ? ほら、案内するから付いてくれ……えつ

と、シャルル、でいいか?」

「へ? ……あ、ああ! うん!」

「俺の事も一夏つて呼んでくれればいいぞ」

言いながら、廊下に出る。

笑顔で頷くシャルルが俺の後についてくる。

そのシャルルが何かぶつぶつ呟いてるみたいだつたが、その声は2組の教室から聞こえてきた悲鳴によつて搔き消されたため、俺の耳に届く事はなかつた。

「ひにやああああああああああああああ!!」

あ、断末魔。

南無。成仏しろよ、鈴。

そうやつて手を合わせる俺に、シャルルはただ首を傾げてゐるのであつた。



「はい、じゃあHRはこれで終わりです。次は第2グラウンドの方で1組と合同実習だから遅れないように」

というわけで、HRが終わつた。

一組と合同つて事は、担当は織斑先生か……早く行かなきやね——そう思つて、私こ

とティナ・ハミルトンは自前のISスーツに着替えようとしていた所で、思わぬ珍客が教室のドアから入ってきた。

「失礼する」

「あれ？ 織斑先生何かあつたんですか？」

「いや、少し鳳に用があつてな」

いつも通りのクールビューティーな織斑先生は何でもないかのように、担任の榎原先生（29歳 独身）に告げる。

鈴に？ そういや、昨日、部屋に帰ってきた途端ベッドにうずくまつてキャーキャー言つてたけど……アレと何か関係あるのかしら？

ちなみに、その様子はuzzと携帯で動画を撮つておいた。

あとでクラスの皆と一緒に、存分にニヤニヤしようと思う。

「？ アタシに……つてえ！ 千冬さんなんでチョーク持つてるんですか！？」

「織斑先生だ——なに、昨日一夏に余計な事を宣言したと聞いてな……制裁が必要だろう？」

そう言うや否や、手に持つていたチョークがものすごい速度で投擲され、鈴に殺到していく。

「り、理不尽過ぎよーッ！？」

——カンツ！

でも、腕の部分だけISを展開させた鈴はその魔弾を防いでいた。

専用機持つて便利ねえ……。というか、部分展開も特定の場所以外じや展開禁止つて条約で決められてなかつた？

「ほう、部分展開で防ぐか」

「そう簡単にやられるわけにはいきませんから！」

「だが、その程度で防げると思ったか？」

「うえつ!?」

ズガガガッ!! と、まるで削岩機のような音を立てながら、鈴のISに次々ヘチョーグが叩き付けられる。

あのチョーク何でできてるんだろ。ISの装甲削られてるんだけど。

というか、この光景をアメリカでブリュンヒルデは近接しか能がないとか揶揄してた連中に見せてやりたいわ。

ジャパニーズ侍は刀だけじゃなくて、銃だつて操るんだから。

でも、これつてどちらかと言えばニンジャマスターのそれよね。

なんて、考える間にも鈴は必死で防いでるんだけど、撃ち込まれて粉々になつたチョークの粉を吸い込み、咳き込んでしまつた。

ああ、防ぎきれないわね、これは。

そう思つた瞬間、快音が響く。

「ひにゃあああああああッ!!」

「フ、これでよし。騒がせましたね、榎原先生」

「え、あ、はい、お疲れ様でした……？」

そして悠然と去つていく織斑先生。

教室には呆然と立ち尽くす、先生と生徒。そして、額の痛みによつてゴロゴロとのた打ち回つている鈴が残された。

——うん、実にカオスな光景ね。

頑張んなさいよ、鈴。

あんたはあの織斑先生を超えないんだから……などと、遠い目をしながら私は着替えるのであつた。

◇

さて、更衣室に至るまでとアリーナに至るまでに様々な障害に苛まれた俺とシャルルだつたが、何とか授業が始まる前にアリーナに到着する事ができた。

そう言えば、更衣室では始終シャルルに見られていたような気がするが、何か俺変なモノでも付いてるんだろうか。

……ん？ 今、漢字じゃなくてカタカナに変換されたのがあつたような……？
まあ、いいか。

それにしても……

「何でそんなに俺を睨んでるんだよ……？」

先ほどから、篝達がギロリとこちらを睨んできている。

これが所謂殺意の波動か……。

「うつさい！ アンタの所為で額打ち抜かれてんのよ、こつちは!!」

「何で俺の所為なんだよ……文句なら千冬姉に言えよ」

「返り討ちになるに決まつてんじやないッ！」

そりやそうだ。

なんて事を話していると千冬姉がやつて來た。

「全員揃つてゐるようだな。では、格闘及び射撃を含む実機訓練に入る。だが、その前に実演を見てもらう——オルコット！ 鳳！」

「はい！」

「分かりましたわ。フフ、鈴さん……貴方とは一度決着を付けたいと思つてましたの」

「……いつぞや、戦つたら勝つとか言われた事まだ根に持つてたのかよ」

「ね、根になど持つていませんわ！ わたくしはただ純粹に、同じ代表候補生としてどちらが上なのかをつ」

「上等よ！ すぐにボロボロにしてやるんだから……一夏もよく見ておくのね！」

……いつになく好戦的だなあ、二人とも。

どうでもいいけど、やるなら俺等から離れてやれよな。

……そのままブルー・ティアーズや龍咆の巻き添えとか死人が出るぞ。

「やる気なのは結構だが、お前達の対戦相手は別にいる」

「「へつ？」」

「……そろそろ來てもいいはずなんだが、何を手間取つて——」

「織斑先生……？」

千冬姉が途中で言葉を切つて、黙り込んでしまったので声をかけてみる。

「……織斑、こつちに来ていろ！」

「……織斑、こつちに来ていろ」

「ひやああああああ！？」

ズドンとにぶい音と共に、今まで俺が立っていた位置に高速で何かが飛来して、土煙が上がった。

そして、次の瞬間。

「ひやああああああ！」

たらりと冷や汗が出る。千冬姉が引っ張ってくれなかつたら、俺あの爆心地の中心にいたのかよ……

「サンキュー、千冬姉」

「馬鹿者、織斑先生だ」

「あだつ」

いつものように俺を出席簿ではたいてから、千冬姉はクレーターに向かつて呼びかけ

た。

「……山田先生」

「きゅー」

「……織斑、雪片を貸せ」

「おおお起きてますう!!」

おお、見事なりカバリーダ。

つーか、さつきの山田先生だつたのかよ。

……ぶつかつても、怪我はしなかつたかもナ。

なんて事がちらりと頭をよぎつた所為だろうか——

目の前を閃光が奔り、ちりちりと前髪が焦げた……

恐る恐る、発射された方向に目を向ける。

「あら? 外してしまいましたわ」 スターライトmkIIで狙いを定めるセシリア。

「馬鹿ね、アタシが殺るからちゃんと見てなさいよ?」 龍咆を機動させる鈴。

「待て、私が先だ」 真剣を牙突の体勢で構える筈。

その全ての矛先がこちらに向いていた。

た、助けてくれ、千冬姉……と、千冬姉に助けを求めるよう視線を向けたところで——

——ゴスツ！

出席簿が額に突き刺さり、俺の意識はフェードアウトするのであつた。

はっ!? 俺はいつたい!?

ズキズキと痛む額を押さえながら辺りを見渡す。

「あ、一夏、起きたんだ」

「しゃ、シャルルか……今どんな状況だ?」

「あ、うん……山田先生がちょうどあの二人を倒したところだよ」

「はっ!? 2対1で勝ったのか?」

慌ててグラウンドの中央の方を見ると、セシリアと鈴が折り重なるようにぶつ倒れていた。

……えつ、山田先生ってそんな強かつたのか？

思わず呟いてしまった言葉を、いつの間にか隣にやつてきていた筈が拾う。

「まあ、そう言いたくなる気持ちは分からんでもないが教員なのだから、実力はないとな
れないだろう」

「いや、そななんだけどさ。俺の入学試験の対戦相手 山田先生だつたんだよ……」

「うん？ なら、一夏つて山田先生が強いって知ってるんじやないの？」

「それが開始と同時に突っ込んできたのを避けたら、そのまま壁に激突して俺の勝ちにな
つっちゃつたんだよな、これが」

『うわあ……』

二人がなんとも言えない顔になつてしまつた。

そんな訳で、あの時の事といつもの様子しか知らない俺からすれば、今の光景は非常
に納得しがたいものがあるのだ。

まあ、あの時は何かぶるぶる震えてて、顔とか真っ青だつたし体調が悪かつただけな
のかも知れないな。

なんて事を話しているところで、千冬姉が手を叩いて指示を出し始める。

「では、これから実習を行う。各クラスの出席番号順に山田先生、オルコット、デュノア、
ボーデヴィッツ、鳳をグループリーダーとする班に入れ。ああ、ちなみにISは打鉄と

ラファールがあるが打鉄が3機、ラファールが2機ずつ用意している。班で相談して好きな機体を選ぶように」

……ナチュラルに俺がはぶかれたんだが。

なんだ、イジメか。さつきの続きなのか。

「せんせー、織斑君はどうするんですか～？」

落ち込んでいる俺の代わりに、のほほんさんが訊いてくれた。

さすがにのほほんさんも、千冬姉の前ではあの渾名では呼ばないらしい。

「織斑は私の補佐だ。何か文句でもあるのか？ ん？」

『『イイエ、アリマセン……』』

有無を言わせぬその迫力に、誰もが口を揃える。

待て待て、本格的にIS動かして一月経たない俺に何を補佐させようって言うんだよ。

「補佐つて……山田先生がいるんじゃんか……」

「ふん、あいつ等に私が餌を与えるわけがないだろう。というか、授業がまともに進まないのが目に見えている」

「そりや、見事な采配で……」

そういう訳だから、筈は俺を睨むんじゃない。

◆

他にもぶーぶー言つてる女子（割と2組の娘が多い）がいるけど、千冬姉の一睨みで沈黙するのであつた。

というわけで、俺は特に何をするでもなく、ただ千冬姉の隣で授業風景を眺めるのであつた。

凄まじい手持ち無沙汰さに、あくびを堪えながら過ごす午前中の授業であつた。

ちなみに、不満気なみんなとは対照的に千冬姉の機嫌はよかつた。
……はて、なんでだろうか？

無事に実習も終わり昼休みとなつた。

まだ学園に不慣れなシャルルを下手に学食とかに連れてくと、悲惨なことになるのは目に見えてる。

よつて、シャルルを加えたいつもの3人と屋上で飯を食べることにした……んだけど。

「何で、お前までいるんだ?」

「? 私のことか?」

「そうだよ」

「お前が教官の嫁に相応しいか見極めるためだ。他意はない」

「さようだよ……」

「このようにラウラまで付いてきていた。

まあ、いいけどな。

「でも、何か食べる物持つて来てるのか?」

「問題ない。軍用のレーシヨンを持つてきている」

そう言つて何やらビスケットやら缶詰を取り出すラウラ。

それはねえだろ……。他の皆も若干引いてるし。

仕方ないな……

「ほら、俺の弁当分けるから、それはしまつとけよ」

「む？ 別に施しを受けるつもりはないぞ」

「いや、そんなんばかり食つてたら栄養が偏るだろうが」「なっ!? バカにするな！ 我が軍のレーションは効率の良いエネルギー摂取とバランスよい栄養摂取を主軸とし、味にもこだわった一品なのだと！」
たとえそうでも、俺達が普通に弁当食べてる横でレーション食われると居た堪れなくなるんだよ……

「あ、じゃあ俺の弁当がどんなもんか評価するために食つてみるつてのはどうだ？」
「む。確かに、嫁と言うならば料理ができなければ話にならんな……」

（お、やつたね、一夏！）

（ああ、言つてみるもんだぜ）

などと俺とシヤルルが喜んでいる一方で、他三人は「によ」と内緒話をしてい
る。

（ちょっと！ 嫁つてどう言う事なのよ!!）

（わ、私が知るか！ 朝来た時から、何故か一夏の事を千冬さんの嫁だなどと言つて
いるのだ!!）
(なっ!? ってことは、千冬さんの陣営なわけ!?)

(所がそうでもないみたいなんですの。一夏さんの事を嫁とは認めないと仰つてますし……)

(つていうか、そもそも何で一夏はなんとも言わないのよ!)

(……嫁じやなくて婿だよな、と仰つてましたわ)

(……)

? まあ、いいか。

昼休みの時間も限られてるし、さつさと弁当を食おう。

ラウラの方に弁当箱を差し出す。

「ほら、どれでも好きなの選んでいいぞ」

「……ほう、見た目はいいようだな」

「わあ、おいしそう! 一夏が作つたの!? 男の子なのにすごいね」

「まあ、小さい頃から作つてるしな。そう言うシャルルは作れないのか? 」

「え? 僕はできるよ、勿論」

「……」

何でそんな当たり前なことを聞くの? そう言つて不思議そうに俺を見るシャルル。

あれ? 俺が変な事言つたことになつてる?

お互ひの言葉に納得できず二人して首をかしげる。

すると、シャルルは何かに気付いたようで……

「シャルル？」

「あ……あはは……い、いや何でもないよ！ それより僕もちょっと貰つてもいいかな？」

「え、ああ、いいぞ。どれにする？」

「ん」、「これでもいい？」

そう言つてシャルルは、肉じゃがを指差す。

これは昨日の夕食の残りだつたりする。ちゃんと中で別の容器に入れてあるから、汁が滲みだすなんて事もしてない。

「くつ、貴様……これはもしかして教官の……つ！」

「ん？ どうかしたか？」

「前に一度聞かされた事がある……教官の最も好きな食べ物……N i k u — j a g a ではないかっ！」

ローマ字で表記されると違和感が半端ないな。

それはそうと、確かにこの肉じゃがは千冬姉の好物である。

甘いのがあまり好きじやない千冬姉のために、砂糖やみりんを控えて出汁を効かせた

自慢の一品だ。

「私もこれを貰う！……はむつ…………く、さすがに教官が褒めるだけの事はあるな」「そりや良かつた。シャルルはどうだ……つて、そうかシャルルは箸とか持つてないか」「あ、うん……」

「こういう事も考えて食堂で割り箸でも貰つてくればよかつたなあ。ま、俺の箸で我慢してくれ……ほら、口開けてくれ」

「ふわあつ!? い、一夏?! そ、それって……!?’

「ほら、あーん」

『『?!』』

とりあえず、ジャガイモをシャルルの口元へ運んでいく。

つて、コラ。口をパクパクさせるんじゃない。開けたままにしてろよ。

……もういいや、つつこんでやれ。

「そおいつ」

「むぐうつ!? んくつ、んつ……もお、なにするのさ」

「いつまでも食べないお前が悪い」

「絶対、一夏の方が悪いと思うんだけど……」

「はは、悪い悪い。それより、味の方はどうだった?」

「…………あ、あのね? 急に食べさせられて……その、よく分からなかつたんだ。だ、だ

からね、もう一回……」

『却下あ（ですわ）!!!』

「うう……」

シャルルが言い切る前に、全然話に加わってこなかつた三人が急に吠え出した。
いきなり、どうした。お腹減つたのか？

「違うわよ！ 人が黙つてればイチャイチャと……！ つーか、男同士で何やつてのよ
！」

「なんて羨ま……妬ましい！」

「篠さん、あまり言い換えられてませんわよ。 ものすごく同意しますけど」
ぎやあぎやあと言つてくる篠たちに、いつものことだと話半分に聞き流していたら、
ラウラがポツリと呟いた。

「ふむ、お前の周りはにぎやかだな」

「にぎやかすぎるぐらいだけどな」

『話を聞けえッ!!』

「はい。

くどくどと篠達による説教が始まつた。

その内容をまとめるところ

- ・自分達を無視するな
- ・イチャイチャするな
- ・作ってきた弁当食べろ
- とのことらしい。

とりあえず、2番目の事に付いては反論したい。俺がいつ誰とイチャイチャしたんだよ。人聞きの悪い。

まあ、弁当を食べる事に関してはありがたい。何だかんだで、俺の弁当はラウラが食べ尽くしちまつたしな。

「お、お前が食べろと言ったんだろうが！」私は悪くないぞ！？」

「いや、別に怒ってるわけじやないさ。気に入つてもらえたみたいだしな？」

「……ふんっ」

拗ねたようにそっぽを向くラウラに苦笑しつつ、遠慮なく箒達の弁当を分けてもらう事にした。

箒のは和風、鈴は中華。セシリアはサンドウイツチらしい。

まだ、中身は秘密だと見て見せてもらえてない。

さて、どれを食べようか……と思つたけど、既に食べる順番は決められていたらしい。「さあ、一夏さん。まずはわたくしのお料理からですわ！」

「ま、最初じやなかつたのは残念だつたけど、おいしいところは最後にあたしが貰うから問題ないわね」

「くつ、2番目では……！」

何か筈だけ異様に悔しがつてゐるんだが。

まあ、ともかくセシリ亞のサンディッヂをいただくとしよう。

つと、よく考えたら、セシリ亞の料理を吃るのは初めてだなあ。料理なんてできるんだろうか？

お嬢様だし……そういえば、今朝会つたときには指に絆創膏張つてたな。

うむ、俺のために頑張つてくれたつて考へると素直に嬉しい。もし多少失敗しても、ありがたくいただくとしよう。

そんな事を考へながら、セシリ亞の持つてきていたバスケットを開けてみると――

赤

紅

朱

血に染まつたかのような、真つ赤な三角形の物体が鎮座してゐた。

つーか、酸っぱツ!? 食べてないのに、既に酸っぱい！ あつ！ 梅か！ 梅なのかこれえ！?

なぜサンドウイッチで梅!? おにぎりならともか……いや、おにぎりでもコレは異常だろ!?

戦慄を隠せない俺と、俺に哀れみの視線を送る他4名。

そんな俺達の様子に気付いたのか、セシリアが小首を傾げながら尋ねてくる。

「……？ どうかいたしまして？」

「せ、セシリア……これは……？」

「ふふふ、驚きまして？ これはチエルシーから見せてもらつた『洗脳探偵 監修 ご奉仕レシピ ◇ウメサンドの項 ～これで愚鈍なあの方を●●です～』を完全再現した一品ですわ！」

材料の梅には最高級紀州南高梅がうなどと嬉しそうに説明をするセシリア。

ツツコミニどころが満載すぎてどこから突つ込んでいいのか分からんが、ともかくどうやつてここを乗り切るかが問題だ!!

しかし、こんなに嬉しそうな顔をしてるセシリアを裏切る事なんてできるか？ い

や、できない。

落ち着け、所詮 梅干だ。身体に害はない……！ 確か身体を動かしたした後にはクエン酸がいいってTVで言つて……いやでも、今日はあんまり体動かしてないし……それ以前に、これはどう考えても過剰摂取……ッ！

だが、セシリアはあんなに指に絆創膏を付けてまで頑張つてくれたんだ……

——覚悟を決めろ、織斑一夏。ここで引いたら、男じゃない。

そして、その真つ赤な物体に手を伸ばそうとした所で、隣にいたラウラに腕を掴まれた。

(やめろ！ 貴様、死ぬ気かっ？)

セシリアに聞こえないくらいの声で制止して來た。

篝達もそれぞれにやめろと目で訴えかけている。

だが、そんなんじや俺は止められない——ッ！！

ゆっくりとラウラの手を引き離し……そして、高らかに宣言する！

「こんな千冬姉に守られてばかり俺にも……こんな情けない俺にも！ 意地があるんだよ！ 男の子にはなあッ！」

ぐちゅりッ！ と手にはなんとも言えない感触。

だが、滴る梅汁もそのままに口へと放り込むツ!!

「はぐつ……ツ！」

『(無)茶しやがつて……』

じゅるりと口の中いっぱいに広がる、酸味と酸味と酸味。まさに酸味いっぱい。グツ……フ……何かいろいろこみ上げてきた……！ し、しかし、期待した顔でこちらを見るセシリアの手前、戻すわけにはいかないツ！ 気合で飲み込むツ！

——あ……あ、ダメだ意識が……混濁、してきた……
だが、一言言わなければならない……ツ

「ど、どうですか、一夏さん……？」

「……せ、セシリア……」

「は、はい！」

「そのレシピは……焼却、しろ……」

「は、い、一夏さん……？」

言い終える事ができたと、安心すると同時に倒れこむ俺。

口から漏れだしたのは、果たして俺の血なのか、梅汁なのか。

『い、一夏――――ツ!?』

「……くつ、見事だつたツ」

霞み行く視界の果てに最後に見えたのは、こちらに向かつて敬礼をするラウラと慌てて駆け寄つてくる4人だつた。



「――ちか、起きろ」

「……ん……あ？」

肩を揺すられている感覚に目を覚ます。

俺……なんで、寝てたんだ……？

いまいち状況が掴めないまま、身体を起こす。

――ここは……？

「やつと起きたか……心配かけおつて」

「千冬姉？ 何で……」

「お前が倒れたとラウラから報告があつてな。私の部屋に運んだ」

「倒れた……あ、そうだ。俺、セシリ亞の料理を食べて……。」

まさか、意識を刈り取られるレベルだつたとは。

「そつか……つて、千冬姉、午後から授業があつただろ。何で俺のどこにいるんだよ」「何を言つている。授業などどうに終わつている」

「え……なつ!? もう夜になつてるのか!?」

カーテンの隙間から見える外の様子はすっかり暗くなつていた。

どんだけ昏倒してたんだよ、俺……げに恐ろしきはウメサンドか。

本家でもそこまでの威力はなかつたはずなんだけどな……

つと、いつまでもこうやつて千冬姉のベッドを占領して置くわけにもいかない。

部屋に戻るしようか……と思つていたんだけど。

「一夏……お腹は空いていないか?」

「へつ？ あ、そうだな……結局昼は食べ損ねたし、割と空いてるけど。まあ、部屋に

帰つて適当に何か作るよ。それがどうかしたのか?」

「…………」

「千冬姉?」

顔を伏せて、その先を言おうとしない千冬姉。

「……その、だな……こつちで、食べていいかないか？」

「？ 千冬姉も食べたいのか？」

「……違う」

なんとも煮え切らない感じで、いつもの千冬姉らしくないな。

それにちよつとしおらしくて……むう、千冬姉の新たな一面を見た気がする。新鮮だ、とか思っていたら、ようやく意を決したのか話し始めた。

「おかゆ……」

「うん？」

「おかゆを、作つたんだ……」

……そ、それって――

「えと、もしかして……俺のために？」

「あ、当たり前だ！ お前のため以外に作る気など起こすはずがないっ

それはそれでどうなんだろうか、と思わなくもない。

やばい、嬉しい。……もしかしなくて、千冬姉の手料理なんて初めての事だ。

俺達が二人になつてからは、筈の家でお世話をなつてたし、筈が引っ越してからは俺が作るようになったからな。

「その、な。もつと、精の付く物を作つてやろうかとも、思つたんだがな……東に相談して、刺激の強いものを食べたのだから、こつちの方がいいと言われてな」

「……ありがとう、千冬姉…すっげー嬉しい」

「あ、あまり期待はするなよ！　そのつ、初めて作つたものだから、お前のようにうまいものが出来たなどとうぬぼれるつもりなどない……。食べられないようなら、そのまま捨てて——」

「そんな事するわけないだろ」

その先を言われる前に、俺は言葉をかぶせた。

たとえ、どんなに不味くても、黒コゲだつたとしても……その千冬姉の気持ちを、無駄になんてできるはずがない。

「じゃあ、用意してもらつてもいいか？　本当は、背中にくつつきそうなくらい腹が減つてたんだ」

「……ふふつ、そうか。なら、少し待つていいといい」

俺が冗談めかして言うと、千冬姉は嬉しそうにキツチンスペースへ入つて行つた。するとすぐに、湯気の立つた皿とレンゲを持つてきてくれた。

おお、卵が溶かしたシンプルなおかゆだ……見た目は普通においしそうだぞ。

「すげーよ、千冬姉。うまそだよ！」

「そ、そうか？ 束に聞きながら作つたからな……味の方もうまくいってればいいんだが……」

そう言いながら、千冬姉はレンゲでおかゆを掬つて、息を吹きかけ熱を冷ましている。

「あれ？ これって……

「ほら、一夏、口を開けろ」

「……いや、千冬姉。俺 別に風邪とか引いてるわけじやないんだけど」

「ふふ、いいだろう？ 私にも少しくらい役得があつても」

これが何の役得になるんだろうか。

恥ずかしがつてる俺の顔を見ることか？

くつ、まさかやられる側に回るなんて思つてもみなかつた……こんなの普通じや考えられないッ！

と、思いつつも素直に口を開く。

「ん、むぐ……」

「…………どうだ？」

「んー、若干芯が残つてたり、塩をかけすぎな感じもするけど普通に食べられる。

「うん、まあよつと塩が多いけど、大丈夫だぞ」

「……そこはお世辞でもおいしいと言うところじやないのか？」

「お世辞なんて言つたら、千冬姉怒るだろ？」

「フ、まあ、そうだな」

などと、そんな多愛のない話をしながら、千冬姉の作つてくれたおかゆを食べるのであつた。

……まあ、最初から最後まで食べさせられた事は恥ずかしいので忘れない。

（その頃のキツチン）

楽しそうな織斑姉弟の会話が聞こえる中、私 山田真耶は……

「うう……しくしく、ひんひん……」

大量に積み上がつた包丁などの調理器具と、焦げ付いてしまつた鍋を必死に洗つてい
る。

急に織斑先生のお部屋に呼ばれたと思つたら、キツチンの片付けをやらされるなんて
……というか、なんでおかゆを作るのに包丁とかフライパンとか使つてるんですか……

?

「ああ、山田先生。ついでにごみも捨ててくれ」
「うう…分かりましたあ……」

何で私ばっかりこんな目にい……やり直しを要求します——!!